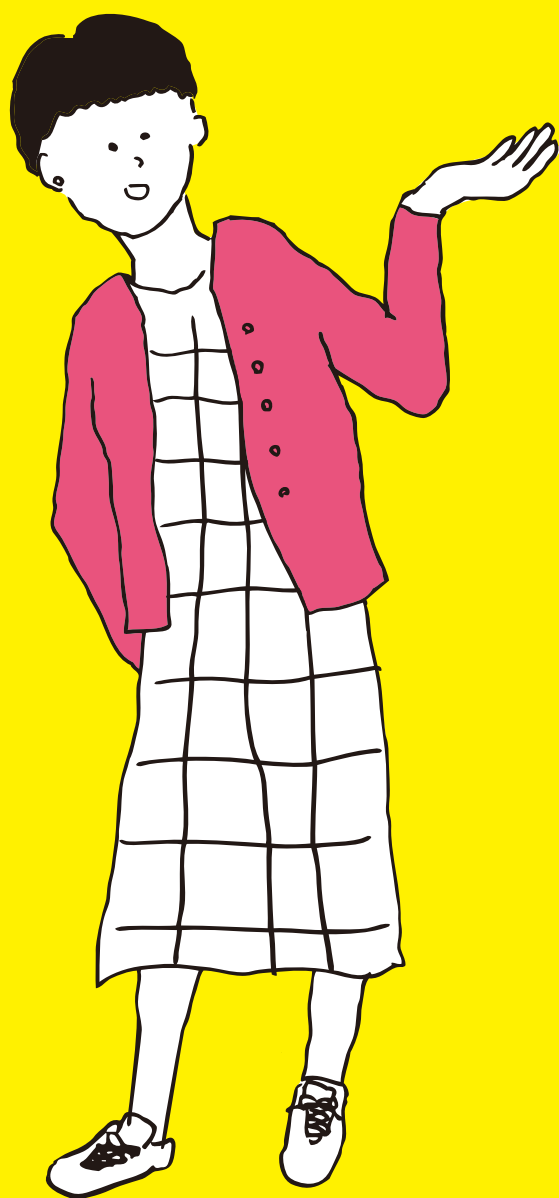


佐倉市立美術館

ミテ・ハナソウ

MITEHANASOU PROJECT

プロジェクト



アートの物語

市民とNPOと美術館が紡ぐ

活動報告と評価

2013-2017

佐倉市立美術館

ミテ・ハナソウ
プロジェクト

市民とNPOと美術館が紡ぐアートの物語
活動報告と評価 2013-2017



発行にあたって

この報告書は、佐倉市立美術館がNPO法人芸術資源開発機構(ARDA)に委託し、市民ボランティアを募集して行ってきた「対話による美術鑑賞プロジェクト ミテ・ハナソウ」の5年間の活動についてまとめたものです。

対話やワークショップ、プロジェクトなどの活動は、記録に残さなければ過ぎ去って消えてしまいます。

しかし、活動に精一杯で、記録を残すところまで手が回らないことも少なくありません。また、せっかく報告書や記録集をつくっても、参加した関係者しか興味を持たないような内容になりがちです。結局、こうした活動は、本当のところは体験した人にしかわからないものであることは間違いありません。

一方、現在数多く行われているこうした活動はどのように評価されていくのでしょうか。

文化活動は数よりも質が問題であるとか、すぐに答えが出るものではないなどの思いを持ちながら、事業の回数や参加人数などの数字を結果として出すことも多いと思います。しかし、もはや、問題となる質をどう測ればいいのか、いつになったらどんな答えがでるのかを考えていかなければならないのではないのでしょうか。

この報告書では、編集や評価、デザインを外部の専門家をお願いすることで、こうした壁を超えようと考えました。その結果、この報告書をつくること自体が、プロジェクトをみつめ直し、深めていくことになったのではないかと思います。せっかくつくるのならば、「読んでもらえる報告書」にしたい、今後の自分たちにも、私たちと同じような環境でプロジェクトを行う方々にも役立つものにしたい。この試みを手に取った方々にも感じていただければ幸いです。

2018年3月

ミテ・ハナソウ・プロジェクト連携実行委員会

Contents

	発行にあたって	P2
CHAPTER 1	プロローグ	P4
CHAPTER 2	ことの起こり プロジェクト「ミテ・ハナソウ」、始まりの話 ざくっとミテ・ハナ Column プロジェクトのファシリテーション・ポイント	P12
CHAPTER 3	What's going on? —そこでは何が起こっていますか— ミテ*ハナさんのこと ミテ*ハナさんインタビュー ミテ*ハナさんが起こすコミュニケーション 学校連携プログラム／ミテ・ハナソウ展 座談会 mitehana ROUND TABLE —美術館を超えて広がる〈ミテ・ハナする〉ことの可能性 Column 「ミテ・ハナソウ・カード」のこと	P24
CHAPTER 4	What else can we find? —ほかには何が起こっていますか— ミテ*ハナさんが起こすハミダシコミュニケーション 鼎談 — ミテ*ハナさん×美術館×佐倉市が生み出すミライ Column ミテ*ハナさんとの日々から	P52
CHAPTER 5	エピローグ ミテ・ハナソウ・プロジェクト 2013-2017年度 評価と分析	P64
APPENDIX	巻末資料 巻末資料 プロジェクト・メンバー一覧	P84



CHAPTER 1

プ ロ オ ー グ

佐倉市と佐倉市立美術館の話

美術館と市民が協働で紡ぐ「対話による美術鑑賞プロジェクト ミテ・ハナソウ」は、「千葉都民」が多く暮らす、ふつうのまちの小さな美術館で起きています。まずは、その舞台を紹介しましょう。

千葉県佐倉市

SAKURA CITY

成田国際空港から15kmほど西に位置する佐倉市。江戸時代には11万石の城下町として栄え、現在は都心に勤務する人たちが多く住むベッドタウンでもあります。



京成佐倉駅→京成上野駅 55分



年間予算

約 **469** 億円



人口

約 **17.6** 万人
(2.32人/1世帯)

公立
保育園・
幼稚園

10 園

公立
小・中学校

34 校

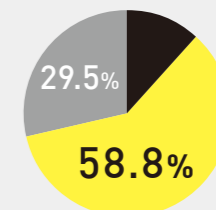
図書館

3 施設

平均年齢

47.3 歳

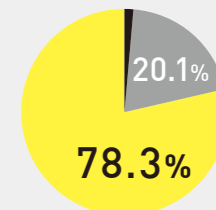
11.7%



0~14歳
15~64歳
65歳以上

15歳以上の
就業人口

1.6%



第1次産業
第2次産業
第3次産業

〈佐倉市 2017年市勢のしおり〉より

佐倉市立美術館

SAKURA CITY
MUSEUM of ART

1918（大正7）年竣工の銀行の建築をエントランスホールとして活用した旧城下町のシンボル。作品発表の場を求める市民の声にも応えて設立されました。浅井忠ら郷土の作家中心の収蔵品のほか、ル・コルビュジエらの「座れる」デザイナーズチェアも魅力的です。

開館 1994年
運営母体 佐倉市
開館時間 10:00~18:00
休館日 月曜、年末年始



運営情報



年間予算※1

約 **1.45** 億円



職員数

7 人
(うち学芸員4人)



来館者数※2

平均 **8.4** 万人/年



年間の企画展数※2

3 回

コレクション



絵画

716 点
(素描・水彩含む)



デザイナーズチェア

115 点
(10種類)



工芸

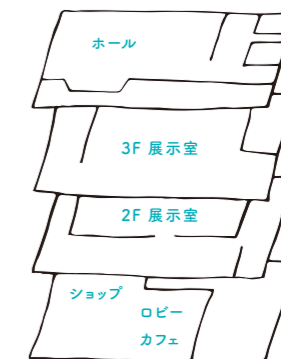
123 点



版画・彫刻ほか

701 点

施設



ショップ・カフェ 外部委託

展示室 ホール

835 m² **99** 席

※1:2017年度。人件費・施設管理費含む ※2:2012~16年度の平均

ミテ・ハナソウとは？

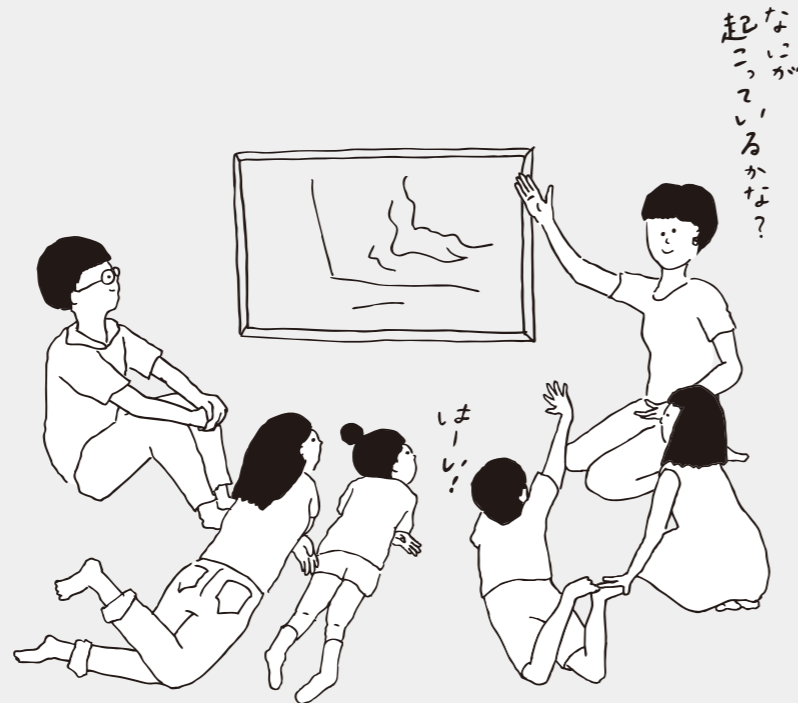
ミテ・ハナソウとは？

学校から初めて美術館にやってくる子どもたち、美術館は敷居が高い、と思っている大人たちに、自分の目で作品をみる面白さを伝えたい。さらに、いつも美術館を楽しんでいる人たちにも、ちょっと違った楽しみ方を知ってほしい……

そんな思いから、「対話による美術鑑賞プロジェクト ミテ・ハナソウ」は始まりました。「ミテ・ハナソウ」とは文字通り、作品をよくみて、お話をしながら鑑賞しよう、という佐倉市立美術館のプロジェクトです。

作品の中で
何が起っていて、どんな風にみえる？
作品のどこからそう思ったの？
ほかに発見はある？

というおもに3つの問いかけで「作品とあなた」、
「美術館とあなた」の、新しい物語を紡いでいきます。

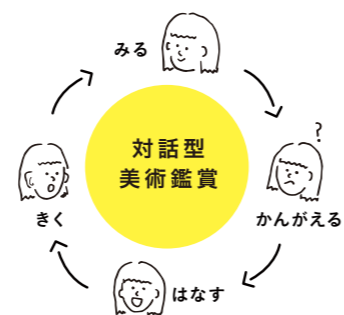


対話で紡ぐ美術鑑賞のこと

「対話による美術鑑賞」とは、数人のグループで1つの作品をみて、感じたり考えたりしたことを、自由に話し合う鑑賞の方法や考え方です。作品をよくみて、一人ひとりに考えることを促し、さまざまな意見を引き出しながら、対話を紡いで作品の見方を深めることは、創造的で批判的な感覚と思考を育みます。佐倉市立美術館ではその考えを取り入れ、「対話で紡ぐ美術鑑賞＝ミテ・ハナソウ」と名付けました。

ミテ・ハナソウでは、Visual Thinking Strategies (ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ) を基礎として、対話を紡ぎます (p.19参照)。VTSは、1つの正解を追求せず、作品をよくみて自分の考えを言葉にすることから、観察力や思考力、コミュニケーション力、そして考え続ける力がつくと言われています。

対話による美術鑑賞



プロジェクトのこと

「対話による美術鑑賞プロジェクト ミテ・ハナソウ」とは？

佐倉市立美術館では、2013 (平成25) 年度から、「対話による美術鑑賞プロジェクト ミテ・ハナソウ」を進めてきました。

グループで行う対話を用いた美術鑑賞は、美術史や美術の知識がなくても、作品をみながら楽しく見方を深め、学びも拓く方法の1つとして、近年、美術館や学校をはじめ、いろいろな場で行われています。

同館では、2013年度 (2014年2～3月) に、プロジェクトのキックオフとして、「国立美術館巡回展」において対話で紡ぐ美術鑑賞の実施と、稲庭彩和子氏 (東京都美術館 学芸員/アート・コミュニケーション担当係長) による講演会を行いました。

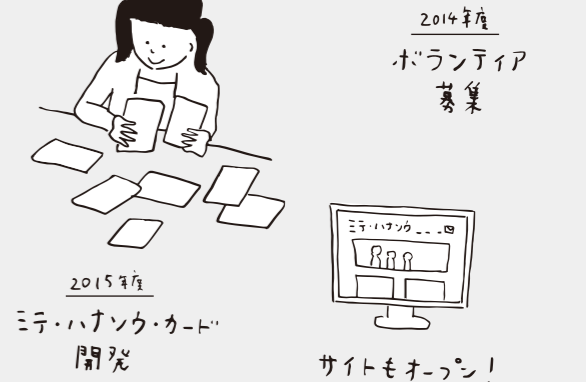
2014年度に、市民ボランティアを募集し、1年間の研修を経て「ミテ・ハナさん」が誕生しました。その後2回の募集を行い、現在のミテ・ハナさんは、総勢46名となっています。

研修後のミテ・ハナさんは、対話で紡ぐ美術鑑賞のリード役として、同館の展覧会や学校連携事業などで活動を展開しています。

2015～17年度には、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業 助成」を受け、学校連携を含むアウトリーチ用ツール「ミテ・ハナソウ・カード」の開発、「ミテ・ハナソウ」公式サイトもオープン。

5年目の今、「ミテ・ハナソウ展」やミテ・ハナさんの提案によるアウトリーチ活動をはじめ、プロジェクトは拡がりを見せています。

この事業は、NPO法人芸術資源開発機構 (通称ARDAアルダ) との協働で進めています。



ファシリテーターのこと

Visual Thinking Strategiesでは、対話を生み出すために、「ファシリテーター」と呼ばれる鑑賞コミュニケーションが作品と鑑賞者の間をつなぎます。

「ミテ・ハナソウ」では、このファシリテーターを「ミテ・ハナさん」と呼んでいます。

ミテ・ハナさんは全員、対話で紡ぐ美術鑑賞のためのファシリテーター養成の研修を受けた市民ボランティアです。

ミテ・ハナさん



ミテ・ハナしてみると

ミテ・ハナソウでは、一体どんな対話が生まれているのでしょうか。
ここで、佐倉市立美術館で作品をみた人たちが紡いだ言葉をほんの少し、ご紹介します。

箱の上の石はダイヤモンド。
ダイヤモンドが光って、
世界がぱあっと
明るく照らされている



神様が育ててきた、
大切な木



木の中央の祠のような入り口に入って
上へ上へと登ると異次元の世界。
うっそうたる森林の中に迷い込む、
そんな想像が頭に浮かんできます



柴宮 忠徳《樹と石のある風景》1978年

キャンバスの上にももっと
もっと天に届くほどこの木
は高く伸びているのでは
ないだろうか?



とても力強い木。
いろいろなことを
知っている木だと感じた



木の中にいろいろな
ものを見つけて、
みていると
地球にみえてきた



皮を剥いで
筋肉がむき出しに
なっているみたい



悪が聖なる
場所を覆い
尽くすよう



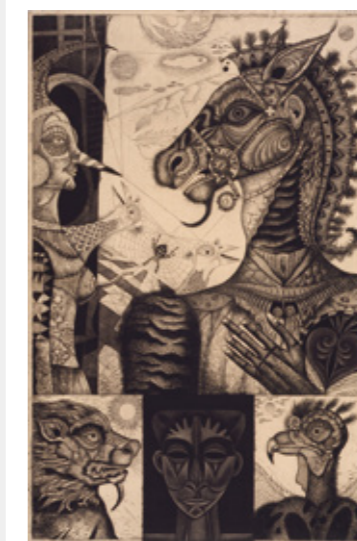
「かなしい」とか「いかり」
などの感情を描かれて
いるのだと思う



人から糸が
張り巡らされていて
操られているような感じ



中学校の頃の自分を
どこかにしまいこんだ
気にさせられました



長島 充《メタモルフォーシス・X1X—ミスターゼブラ》1993年

変化の途中。
古代の神話のよう



昼の神と夜の神。
神様の集いかな



プロジェクト「ミテ・ハナソウ」、始まりの話

始まりは、美術館の存在意義を考えたこと

2017年の今、佐倉市立美術館の通年事業となっているプロジェクト「ミテ・ハナソウ」。このプロジェクトが始まった理由は、そもそもどのようなことだったのでしょうか。また、どのようにカタチとなっていったのでしょうか。市民を巻き込んだ物語の始まりを、同館でプロジェクトを担当する永山さんに尋ねてみました。

佐倉市立美術館
主査(学芸員)
ながま のりこ
永山 智子



「市民とつくる美術館」が抱えた課題

—2013年度末の活動準備がプロジェクトの始点でしょうか？

永山 いえ、この事業以前に、私が館から与えられていた課題がありまして。それは高齢者社会への対応と、展示と連動した教育普及事業でした。

—そうでしたか。貴館は以前から教育普及事業に熱心で、永山さんは開館当時からその事業を担当されていたのですよね？

永山 もともと当館は、市民の創作発表の場——佐倉市民ギャラリーとして構想された館です。そのため、収蔵作品も少なく、展示は借りてきた作品で構成する企画展が主でした。私が担当した教育普及事業は展覧会と連動したものではなく、独立した企画として、作家とつくるワークショップを10年間やってきました。当館自

体も「市民とつくる美術館」という意識は高く、当時は毎年、市民ボランティアを募集して企画をつくっていました。

—その当時、学校連携事業は実施されていなかったのですか？

永山 2007(平成19)年からスタートしました。当館から遠い学校の子どもたちも来館できるよう、送迎バスも準備しています。

実は私は08~12年は市の文化課へ異動していました。その間に教育普及事業のスタイルも変わり、館に戻ったタイミングで先ほどの宿題を出されたのです。また、個人的に、限られた人数の職員で対応していかなければならない当館の学校連携事業について、美術館教育としての問題意識を持っていました。

「対話で紡ぐ美術鑑賞」へのプロセス

—3つの課題から「対話で紡ぐ鑑賞事業」へ、どう展開されたのでしょうか？

永山 学校連携事業の見直しと、展示と連動した教育普及事業ということで、まず考えたのが対話を用いた鑑賞です。

公立館はどこも似たような状況だと思いますが、バブル崩壊後、美術館の存在意義が問われ、学校教育と連携して教育機関としての立ち位置を確保しなければ、という危機感から各地で現在のような学校連携事業が始まったところがあったと思います。しかし、それが本当に子どもたちのためになっているのかどうか、疑問でした。そもそも全員が学ぶ学校の教科としての美術教育と美術館教育は別のもので、とはいえ、親が美術に興味があれば、子どもの選択肢に美術館はなかなか入って来ないという現実もあります。そこから起こる、いわゆる“教育格差”を今の社会問題の1つとして意識せざるを得ない。ならば、格差を少しでも埋めるために、子どもに美術や美術館を知ってもらう窓口として、学校というシステムをとらえ直すことにしたのです。

正直、この時点では、高齢者への対応については、考えが及んでいませんでした。ですから、2つの課題解決のために「対話型鑑賞事業」の導入を考えた、というプロセスです。

—「対話型」の鑑賞のどこが課題解決に結びついたのでしょうか？

永山 美術館が子どもたちに本当に伝えたいものは何かと突き詰めたら、やはり「作品をみる面白さ」だと思ったのです。それを伝えることができるのが対話型かどうか、疑問もありました。言葉にできない感覚も作品をみたときにはたくさん湧いてくる。それでも、対話型の「作品をみて、自分でいろいろ考える」という見方を肯定する部分では、伝えたいことと同じ方向を向いている。また、「言語表現」が必須の対話という形を取ることで、「学習指導要領」をベースとする学校にも受け入れやすいのではと思ったのです。もちろん、「作品をみて対話する」ことは、展示作品を使った教育普及という課題にも合っています。

—その事業を実現するために、どのようなプロセスをたどられましたか？

永山 教育普及事業自体を委託するスタイルで、高齢者対応を含む3つの課題をARDAに持ち込んで、相談していきました。というのも、学校を対象に対話で紡ぐ鑑賞を実施するにはボラ



1990年代に「対話を用いた美術鑑賞」について知見を得ていた永山さん。「当時はアメリカ・アレナス※1という人だからできると考えていました。また、自分自身も作品についての感動や考えたことを言葉にする難しさを感じていて、対話を用いた美術鑑賞そのものに疑問を持っていましたし、教育普及事業に取り入れるにも抵抗がありました」

※1:元ニューヨーク近代美術館のエディターで美術史学者。1980年代よりヤノウィンとともに「ヴィジュアル・シンキング・カリキュラム」に取り組んだ。1995年以降、水戸芸術館などで対話を用いたギャラリートークを実践し、日本の美術館の教育普及担当者にも影響を与えた。

ンティアさんの手を借りないとマンパワー的に実現が難しいと考えていたし、もし私が異動しても継続できる事業とボランティア組織をつくるには、外部の協力が必要だとも考えていたのです。そこで、対話で紡ぐ鑑賞事業や高齢者施設でのアート・ワークショップの実績を持つARDAに協力してもらおうと考えたのです。

最初は3つの課題について、対話で紡ぐ鑑賞も含めもついろいろな可能性を考えていました。しかし、一つひとつがそんなに簡単ではない、ということが(ARDAの)三ツ木さんと話を重ねていくうちにクリアになってきたのです。ならば、まずは「対話で紡ぐ鑑賞」に絞ろうということになりました。

市民が開かれた美術館にするには？



佐倉市立 美術館 過去の活動



1995年に開始した教育普及事業【体感する美術】シリーズより。当時先駆的なワークショップ(以下WS)を展開していた作家、宮前正樹「メディア・サバイバルゲーム」(1996年)のWSのよう



【体感する美術】シリーズより。千葉大学の長田謙一教授(当時)の協力で、1998年から募集を始めた市民ボランティア「Inter-art Forum Sakura(以下IFS)」によるWS「Go Goさくらランド」(1999年)での一幕



IFSメンバーからアイデアを募り、美術館と協働で練り上げた企画「佐倉観光案内」(2000年)の図録。IFSは1999~2002年の【体感する美術】シリーズの企画から運営まで参加した



【体感する美術】シリーズより。音楽家野村誠「しょうぎ作曲」展(2002年)のWSで、作曲しながら演奏する子どもたちと作家の様子。同展では、WSで作曲した曲の発表会やコンサートも開催



【体感する美術】シリーズより。開発好明「さくらテレビ」(2004年)のWSでは、美術館にスタジオを設け、子どもたちと一緒に番組づくりを行った。写真はその取材風景



2004年の【体感する美術】のプログラムの1つ、「体感する美術の通信簿」冊子より。IFSメンバーからの提案で、つなくNPOと連携し、美術館⇔観客のコミュニケーション回路生成を試行

「協働」だから、生まれるものがある

—具体的なARDAの動きとは？

永山 最初の年（2013年度）は、1つの展示会の関連事業として対話で紡ぐ鑑賞会をやってもらいました。翌2014年度にボランティアの募集・養成をARDAに委託しています。

今回は学校連携が念頭にあり、継続性が求められるものだったので、初めて期間を区切らない募集をしました。募集チラシや応募条件を付けるなどもARDAの提案です。こういった事業を専門的にされてきた方の話を聞いて、「こういうやり方があるんだ」と新鮮で。学校を通じて保護者宛に募集をしたのですが、大人の募集に学校の協力を得るという発想がなかったので、この提案には驚きました。ほかにも、シニア世代のボランティアも期待して、公民館などにもチラシを置いてもらいました。

—実際に、1期生にはどのくらいの応募があったのでしょうか？

永山 募集が朝日新聞に取り上げられたこともあって、20名の募集に対して、50名の応募がありました。

応募条件にA4の紙1枚程度のレポート提出があったのですが、子育て世代の人たちのレポートは明らかに対象を考えているものが多くて。「子どもたちにこうしたい、子どもたちのこういう姿がみたい」という。シニア世代は、これまで自分が社会に何をしてきたか、これから何をしていきたいか、という自分中心に書かれたものが多かったのです。事業目的と鑑賞コミュニケーションの性質を考えると、相手があると認識していて、子どもたちと楽しく活動していける人をお願いしたいと思いました。こういう判断ができたのは、ARDAが入ってくれたメリットですね。

—ARDAとの協働で、ほかに気づいたことはありますか？

永山 そうですね。まずは初年度に、初めて対話で紡ぐ鑑賞会をしたときの来館者からの反響の大きさかな。支持する声だけでなく、「うるさい」「作家を侮辱するのか」みたいなお話もいただいたのです。やはり美術館に求めるものは人それぞれ。この事業の課題として常に念頭に置いています。

この事業を進める上でのノウハウについては、専門のARDAから



「佐倉は上野までアクセスがよいこともあり、美術館といえば、地元より上野に眼がいく人びとも多い。しかし、今回のプロジェクトでは、さまざまな制約などから、地元の美術館で活動したいと思っている方も多くことに気づかされました」

学ぶことが多いです。また、ボランティアについてもいろいろと考える機会になっていますよ。以前の教育普及事業でもボランティアと協働していましたが、「ボランティア」そのもののとらえ方1つにも違う考え方やアプローチがあることに気づきました。

何より大きかったのは、鑑賞コミュニケーションを育てることは、その人が必要なスキルを身につけるとともに、互いに学び合い、自発的に考え続ける素地を身につけるために、継続性のあるトレーニングの場を創ることだということです。個人が持つ学び合う力や考える力を引き出すには、研修プログラムのような、「育てるための仕掛け」が必要だと。例えば、「アート・ワークショップの企画から自由に考えよう」という場を設けるだけでは、もともと自発的な行動や思考ができる人しか集まりません。そういう意味で、美術館として、今まで「鑑賞者を育てる」という事業をしてこなかったと、ミテ・ハナさんたちを見て気づかされました。

美術館は民主主義を保障する「場」であり続けること

—ミテ・ハナさんたちとの協働から、気づいたことや変わったことはありますか？

永山 たくさんあります！ 予想していなかったことの1つが、美術館内部を考えるきっかけになったということ。例えば、最初、監視員さんとミテ・ハナさんとの間のコミュニケーションがうまくいっていませんでした。作品を守る側の監視員さんと、作品に鑑賞者を近づけようとするミテ・ハナさんの立場は正反対のものですから、歩み寄りの機会がなければうまくいきません。そこで、ささいなことですが、互いに挨拶をする、展示会前に合同説明会をするなどの工夫で、ずいぶんやりやすくなりました。さらに館内のほかの職員同志のコミュニケーションまで考えるきっかけとなりました。

それから、ミテ・ハナさんはお友だちなど、今まで美術館に足を運ばなかった客層を連れてきてくれています。最近では、「ミテ・ハナ・チルドレン」もいて。ミテ・ハナさんたちのお子さんですが、ミテ・ハナソウ展に来てくれて、対話に参加して、手を挙げて発言すれば、ほかの人に発言を譲ることもできるし、場をうまく盛り上げてくれています。

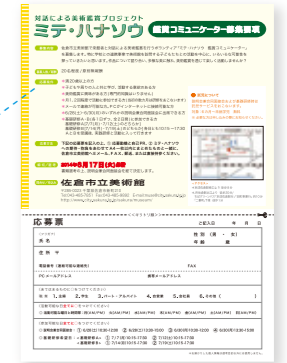
—最後に、美術館が「鑑賞者を育てる」事業の重要性を教えてください。

永山 鑑賞者を育てるということは、自分で考えて、参加する、本当の「市民」を育てることにつながっていくと思います。壮大ですが（笑）。以前は、美術や美術館は、わかる人だけがわかればいいという世界でした。そこに、啓蒙もすべきだろうという人たちが現れて知識伝達型の普及事業が始まったのだと思います。いや、そうではなく、美術館はもっと市民が参加し、開かれた場所になるべきだというのが、以前のワークショップ型の普及事業をやっていたころの考えでした。しかし、それも参加できる「市民」は限られた人たちでした。美術館は自主性に任せるだけではなく、その背中を押す役になることができる。「絵をみる」ことを通して、「対話しながら」市民を育てる。これはどこの美術館でもできることです。これが対話で紡ぐ鑑賞事業の重要性だと考えています。

美術館は、そもそも、自分の表現を世に問い、賞賛も批判も受ける「民主主義を保障する場」なんですよ。自分の意見も言うけれど、人の意見にも耳を傾け、その違いを受け入れる。自由と責任をきちんと考えられる。社会的に成熟した大人と言いますか、そういう人たちを育てるきっかけとなる事業と言えるのではないかと、そうとらえています。

ミテ・ハナさん募集チラシ

1期生募集時から、応募動機と自己PR、活動への期待と抱負をA4用紙1枚程度にまとめたものの提出が条件となっている募集チラシ。現在では、「ミテ・ハナソウ・カイ」を通じて、「対話で紡ぐ美術鑑賞」を知らない人でも体験してから応募できるように案内をつけるなど、さらに工夫されている



応募条件

子どもや周りの人と共に学び、活動する意欲のある方

応募方法

下記の応募票を記入の上、①応募動機と自己PR、②ミテ・ハナソウへの期待・抱負をあわせてA4、1枚以内にまとめたものと一緒、佐倉市立美術館へ

このプロジェクトは常に変化中です

ミテ・ハナソウ

現在の活動



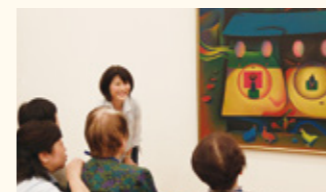
1年間の長い研修に取り組みミテ・ハナさんたち。研修は受動的に教わる形式ではなく、常に自ら考えることを習慣づけるワークショップのような内容で構成



永山さんも研修、学校連携事業、アウトリーチ活動などミテ・ハナソウの活動に可能な限り立ち会い、ミテ・ハナさんたちの変化を客観的に見つめる



学校は「子どもたちにとっての美術と美術館への入り口」ととらえ直すことによって、学校の美術教育と美術館が行う美術教育とのギャップを乗り越えた



ミテ・ハナさんからの提案で始まった高齢者施設での活動から。永山さんの課題でもあった高齢者への取り組みは、現在、プロジェクトの一環となりつつある



「作品を前に対話するスタイルについて、来館者からは賛否両論です。当館がそれを理解した上で、今後のプログラムを考えていくことも重要」と永山さん



永山 智子
Nagayama Noriko

同館の開館以来、教育普及事業を担当。毎年夏に行われていた「体感する美術」の仕掛け人。アーティストとともにワークショップを多数手掛け、商店街を舞台にした展示会などもキュレーションする。2013年より現職。

プロジェクト「ミテ・ハナソウ」、始まりの話

成熟した市民社会への 小さな一歩のために

「ミテ・ハナソウ」を佐倉市立美術館と協働で運営するNPOが、芸術資源開発機構（以下、ARDA）です。その代表理事の三ツ木さんは、このプロジェクトのもう一人の生みの親。三ツ木さんにはNPOの立場から、「対話による鑑賞」が社会に与える意義、美術館との協働から考えたことも含めて、始まりのお話をうかがいました。

アート・プランナー
特定非営利活動法人
芸術資源開発機構
代表理事
みつき のりえ
三ツ木 紀英



作家に頼らず、市民と創る

—まず、ARDAが「アーツ×ダイアログ^{※1}」事業を立ち上げた理由を教えてください。

三ツ木 きっかけは2011年の「東日本大震災」でした。私たちは設立時から作家によるワークショップ（以下、WS）活動をしてきたこともあり、震災直後から被災地で活動を始めました。WSをする、苦しい状況の人たちとのつながりができたり、自分らしさを取り戻す時間を創ることはできるけれど、被災地での活動はどうしても対処療法的になってしまうし、原発に絡んだ複雑な地域の断絶みたいなどころにはなかなか入っていけない。さらに言えば、そもそも原発のような問題を起こした社会の仕組みに対して、私は何もしてこなかったのではないかと深く反省したんです。それで、人々が持つ自律性や思考力みたいなものを、アートで育むことは

できないかと考えるようになりました。アートそのものが語るべき問題や課題、思想のようなものを含んでいますから。

あともう一つ、WSができる作家は限られていて、小さくしか展開できないということも実感しました。鑑賞ファシリテーターを育成することで、アートを語る「場」を創る人たちが増える。芸術家が常にいなくても自分たちで活動を広げていける。アートを通して自分で考えて、結論を出して、意見の異なる人も協働ができる人たちが集うコミュニティがあちこちでできたら、成熟した市民社会を創る小さな一歩になるのではないかと。そういう主体的に学び合う場が今、社会に必要なだろうと考えたのです。

特定非営利活動法人芸術資源開発機構



2002年設立。美術館やギャラリーの限界を超えて、アートから社会に働きかけをする活動しようというアートの専門家が組織した。高齢者施設や児童館でのアートワークショップ事業を皮切りに、最近ではアーツ×ダイアログ事業の活動も柱とし、実験的な取り組みを続ける。



1999年から行ってきた「高齢者へアートデリバリー」の活動より。アーティストによるWSを通じ、五感を揺さぶることで、高齢者の眠っている潜在能力を引き出すという活動



アートワークショップ事業の1つ、保育園・幼稚園が対象の「港区ふれあいアート」プロジェクト（2007年より継続中）から。アーティスト前沢知子による「からだでお絵かき！」（2015年）の一幕

VTsとは、人の力をとことん信じる考え方

—「ミテ・ハナソウ」では、対話による美術鑑賞の方法として「Visual Thinking Strategies（以下、VTs）^{※2}」をベースにされています。それはなぜですか？

三ツ木 まずは、VTsなら誰でも始めることができるから。次に専門家に頼りすぎず、鑑賞者に主体性が委ねられ、その人たちの見方が肯定されることで、今できることを精一杯やることにつながる。そのように自ら発見・成長していくというスタイルがよいと思いました。

さまざまな作家とWSの現場を創ってきたのですが、想定外の表現や発想やエネルギーが出てくるWSには共通点がある。作家は子どもたちに活動への興味を持たせ、集中させることに注力しますが、一度「場」が動き出したら極力何もしないのです。VTsも同じで、場のデザインは丁寧にするけど、対話が始まったら出てきた言葉を編集するだけ。どう展開するかは鑑賞者に委ねて、予測不可能なことを許容していく。それは鑑賞者の力をとことん信じ、一人ひとりに耳を傾けないとできません。自信や主体性を育むことにつながるそんなVTsの考え方が、社会をボトムアップで創り上げていく力にもなると思います。

—なるほど。ところで、このプロジェクトの運営全体にARDAが関わっていますが、参画した経緯を教えてください。

三ツ木 最初にお話をうかがって、ARDAの経験とノウハウを活かして、同館の課題を解決できると考えました。当時、ARDAは2市で学校と連携した「アーツ×ダイアログ」の活動^{※3}から、きちんとデザインされたプログラムを体験した子どもたちは必ず美術や美術館を好きになる、という実体験を持っていました。だから、市民ファシリテーターを養成して、学校連携事業を市民が主体となって動かすものにしようという提案ができた。高齢者を対象にした事業もしたいということでしたが、高齢者とくくるのではなく、いろいろな年代の市民の中に高齢者が含まれ一緒に活動していくことから始めましょう。

また、文化庁の助成金を申請して「アートカード」やウェブサイトを作成し、アウトリーチを促進しようといった、経済的な部分も含めて、総合的に美術館が動きやすくなる情報提供と企画提案をその都度していきました。



—そうでしたか。ところで、「ミテ・ハナソウ展」では、展示にも関わったそうですね。

三ツ木 これまで美術館やギャラリーだけでなく、まちや児童館などいろいろな場所で展覧会などをつくってききましたが、常にチャレンジしてきたのは鑑賞者が能動的で豊かな作品体験をするための空間やツール、WSといったプログラムをどう構成するかということでした。「ミテ・ハナソウ展」はその経験を踏まえ、さまざまな作品との出会いのシーンをデザインしました。靴を脱いでゴロンと寝転ぶ。椅子に座って腰を据える。何度もみている収蔵作品も身体と心の構えが変わると作品への向き合い方も変わり、新しい鑑賞体験が生まれるという展示です。

※1: 芸術（アーツ）をテーマに対話（ダイアログ）を紡ぐ芸術鑑賞事業。鑑賞ファシリテーターの育成と鑑賞プログラムの開発・実施を通じ、正解が1つではない今日の課題を考えた個人が集う、アートコミュニティの創出を目的とする。

※2: VTsとは、米国の認知心理学者アビゲイル・ハウゼンの美的発達段階研究を核に、元ニューヨーク近代美術館教育部長のフィリップ・ヤノウィッチが視覚芸術による実践を重ねた成果。おもに学習能力支援などに適用できるようプログラム化し、国内外の美術館や学校で広く実践されている。

※3: ARDAでは2011年より神奈川県大和市と、2012年より東京都西東京市と協働で事業を進めている。

三ツ木さんが 企画・協力した プロジェクトから



神奈川県立近代美術館の教育プログラム「きょうのはやまにみみをすます」より。ワークブックに誘われ、館と公園に出現した音のオブジェをたどり、葉山の環境とサウンドスケープに浸る（2004年）



川口市立アートギャラリー・アトリア「絵本カーニバルー片山健の絵本の世界であそぼう」展より。片山が描いた「ぼくからみると」の世界を体験するツールは、魚やトンビの視点で世界をみるというもの（2007年）

心も身体も
使ってみてね



美術館はもっと社会に インパクトを与えられる「場」

—ARDAは美術館とも行政とも協働経験がありますね。そのNPOから見て、美術館との協働のよさはどこにありますか？

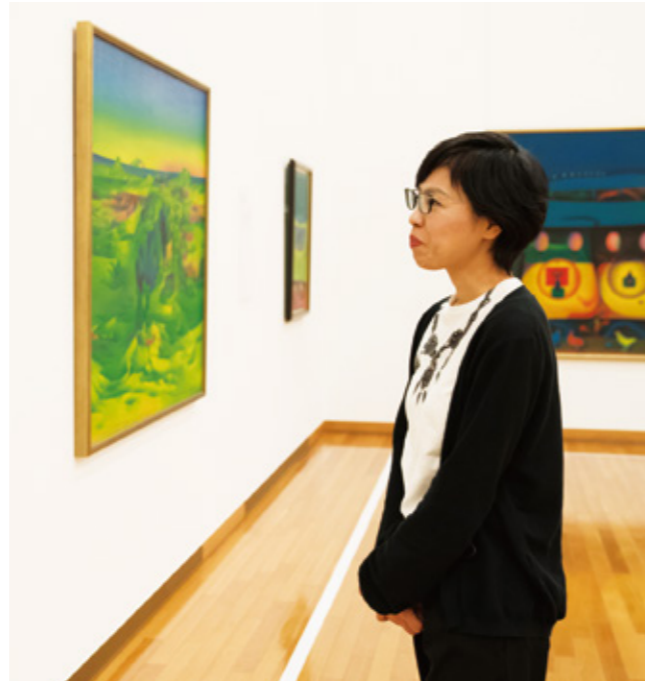
三ツ木 美術館は市民を惹きつける文化資源を持っている、魅力的な場所です。拠点のない行政組織との連携事業と比べると、美術館は市民の意欲を引き出して活動を創っていきやすく、たくさんの可能性に開かれています。

さまざまな美術作品との出会いや非日常的な空間で過ごす時間など、市民にとってとても魅力的。その文化資源を社会に開いたら、市民は入っていきたくて思っています。活動したい市民はこんなにいると、佐倉のミテ*ハナさんの積極的な様子や、「とびらプロジェクト^{※4}」を見てもわかりますよね。

—美術館と協働するときに、どんなことを大事にしているのでしょうか？

三ツ木 NPOが関わるのは美術館の活動のほんの一部ですが、美術館全体にとって意味や意義があることにしていきたいと考えています。永山さんが抱く問題意識を聞き取りながら、どんな美術館になれるのかを考えました。中にいると、突破できない壁や限界が予想できて可能性を狭めていたり、身近にあるものの魅力が見えにくかったりすることもあります。しかし、やり方を変えれば打破できることもある。ほかで上手くいった方法を提示したり、近過ぎて見えない美術館や地域の魅力に目を向けたり。外部から関わるからこそ、予想を超えた見たことのない世界と一緒に創りたい。永山さんは不安になることもあったと思いますが、目指している方向は一緒だと考え、私も踏み込んで提案していきました。

そしてなにより、ミテ*ハナさんと一緒ならこんな美術館になれる！というビジョンを美術館全体で共有することが大事だと考えています。例えば、ミテ*ハナソウでは、報告書は外部リサーチャーに入ってもらい事業評価を進めています。そして、2017年には館全体でロジックモデル作成のWSも開催できました。どちらも同館では初めての試みだったそうです。館の方々がどれくらいミテ*ハナソウの意義を見出してくださっているのかまだよくわかりませんが、それでもほかの学芸員さんが何を大事にしている、美術館は



何を課題だと考えているのか、それらがわかったことは、私たちに大きな収穫でした。

—では、市民との協働では何を大事にしていますか？

三ツ木 美術館とボランティア、講師と受講生。そもそも構造的に上下関係があるので、ボランティアはどうしても指示を待つ側、答えを教えてもらう側になってしまいます。そこをどうフラットにするか、「私たちのミテ*ハナソウ・プロジェクト」にしていくのが大切です。研修で質問があっても、まずは自分たちで考えることを促します。そして、「ミテ*ハナソウ展」の研究の間にミテ*ハナさんの個性や能力を生かせる余白をできるだけ設け、ルールなども私たちが最初に決めて渡さず、「委員会」をつくってまずは自分たちで考えてもらう。節目には議論の場を用意して、みんなの意見を聴きます。そのように「私たちの」という意識を持てるようにしています。

※4:「とびらプロジェクト」は、東京都美術館と東京藝術大学が協働で推進するソーシャル・デザインプロジェクト。ここでは市民から募った「とびら」と呼ばれるアート・コミュニケーターが人と作品・人・場をつなぐ活動を展開している。ARDAも一部の活動で協働する。

ファシリテーターが体現する「対話」のちから

—このプロジェクトから感じる、NPOが市民と協働するときの難しさはありますか？

三ツ木 あると言えばあるかもしれませんが……難しさとしてはとらえていません。NPOを組織するのと同じく、参加する市民とミッションやビジョンを共有できていれば、個人に温度差があっても問題ないです。この活動の意義は何なのか、誰のための活動なのかを考えたり、思い出したりする場面をつくることで、みんなが同じ方向を向いていることが、コツかなと思います。

そういえば、以前に美術館のボランティアが圧力団体のようになって、非常に手を焼いた館があったという話を聞いたことがあります。でも、ミテ*ハナさんたちを見る限り、美術館にクレームをつける事態など起こらない。それは「対話のちから」だと思います。ミテ*ハナさんたちは、研修や活動を通してお互いの話を聴き合う、でこぼこいろいろな人がいるけれどもお互いに認め合う。「アートを見て語る」ことを通して、そういう素地ができてきたのだと思います。一方的に自分の言いたいことを言うのではなく、まず一歩待って耳を傾け、相手の立場や視点を理解しようという姿勢が、ミテ*ハナさんの中に醸成されている。だから、美術館がこの方向でボランティアを育てていくと、彼らとの軋轢は生まれず、逆によき理解者になってくれるのではと思うのです。私は、市民ボランティアは、もっと暴れてもいいのと思うくらいです(笑)。

—それはどういうことでしょうか？

三ツ木 これは他地区のケースですが、理不尽な状況でも、相手の立場を理解できてしまうことで、逆に「私たちが頑張ります」と使命感で助けたり、その状況を素直に受け入れたりしてしまう。それはいいことなのですが、もっと社会に対して交渉したり、事業の重要性を訴えたりしなければ、この活動を広げるのは難しいとも思います。

レクチャーや解説と異なり、対話で紡ぐ鑑賞のイベントで人を集めるのは、実は結構大変です。体験すれば楽しいのですが、まだまだその面白さや魅力は知られていなくて、ツアーをしても10人集まればホッとすると感じ。でも「ミテ*ハナソウ展」の鑑賞会では、1カ月の会期中に600人も人が参加している。ミテ*ハナさんがあれだけ熱量をもって一緒につくるから、3年目にして、展覧会を楽しみにしているリピーターがたくさん出てきた。期間中、毎日ミテ*ハナさん



ミテ*ハナさんの研修風景。常に「ファシリテーター」として、メンバーとフラットな目線で話し合う。テクニカルな質問には「あなたはどうか考えるの?」と返し、まずは各人が自ら考えるよう導く三ツ木さん

んが美術館にいて、愛情をもって来館者を出迎えて、対話をする。彼らがやりとりする中で、いろいろな人たちの心を開いていき、今までの美術体験とは違った体験ができる。鑑賞者を発掘して、育てているのです。そんなすごいことが起こっているのだと、もっと発信してもいいのではないかなと思うのです。

ここまでたくさんのミテ*ハナさんが生まれ、学校連携も充実したプログラムが運営できるようになりましたし、ミテ*ハナさんのアイデアから生まれた活動も出てきました。でも、活動がきちんと根付くには、「ミテ*ハナソウ」はまだ道半ばだと感じています。この先も美術館、ミテ*ハナさんと一緒に考えていきたいと思っています。

フラットな関係
づくりが大事!!



三ツ木 紀英
Mitsuki Norie

ARDA代表理事、アート・プランナー。1999年より英国へ日本人作家のコーディネートを手掛けながら、美術施設だけでなく、地域で草の根的にプロジェクトを展開。2002年ARDA設立時より参画。さまざまな事業の統括を務め、12年副理事長、14年より現職。

ミテ*ハナソウの 活動から



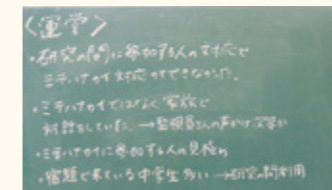
研修では、グループワークによる作品研究を通じて作品の見方を学ぶ。美術史的な知識に頼らず、自分たちが気づいたことや感じたことから作品を分析



A4サイズの作品図版を4人で鑑賞し合うミニVTS研修のよう。短時間で鑑賞、ふりかえり、気づいた点を全体シェアするプロセスを繰り返す



研修や活動で重要なプロセスが「ふりかえり」。グループでその日のファシリテーションで気づいたことをシェアし、課題を発見し、解決方法をみんなで考える



「ミテ*ハナソウ展2016」のミテ*ハナさんたちのふりかえりから。ここで出てきた内容を日頃の活動や次の展覧会にどう活かしていくか、メンバーで探る

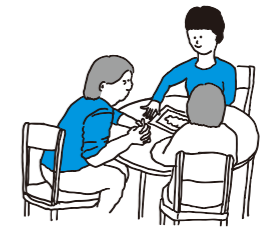
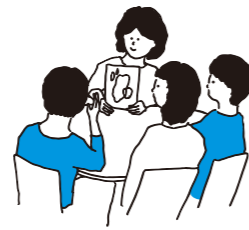


2017年9月に行われた「ミテ*ハナ全員ミーティング」より。ミテ*ハナさんたちで、今後拡げていきたい活動対象や内容、実現方法などをディスカッション

mitehana OUTLINE

ざくっと
ミテ・ハナ

2人の仕掛け人によってスタートした「対話による美術鑑賞プロジェクト ミテ・ハナソウ」。
プロジェクトの発足から5年間で起こったことと、プロジェクトが目指すゴールを、ざっくりとまとめてみました。



活動の展開

学校連携	対話による美術鑑賞授業モデル実施	実施 7校	実施 9校	実施 10校
展覧会		ミテ・ハナソウ展	ミテ・ハナソウ展 2016	ミテ・ハナソウ展 2017
発信	プロジェクト・キック・オフ講演会	公式サイトオープン アートカード発行	ミテ・ハナさん 2期生募集	ミテ・ハナさん 3期生募集
ハミダシ活動			団体対応 2回 アウトリーチ・イベント 4回	団体対応 1回 アウトリーチ・イベント 1回 ミテ・ハナソウ・カイ 8回 継続型アウトリーチ 1カ所

2013 年度 12月より

2014 年度

2015 年度

2016 年度

2017 年度

プロジェクト始まる年

1年目

2年目

3年目

4年目

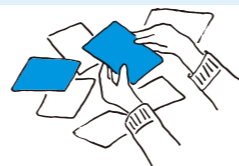
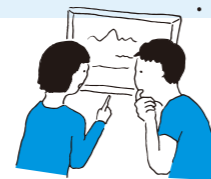
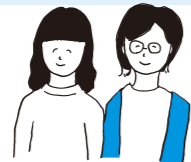
未来へ

文化庁助成開始!

動きと計画

課題と提案	課題: 学校連携事業のブラッシュアップ・高齢化社会に向けて/職員異動後に継続できる仕組みづくり	提案: スムーズなアウトリーチ展開に向けて/ミテハナ展の提案 課題: マンパワーと美術館予算の限界	提案: 継続的な事業展開に向けて/ミテハナさんのアイデアを活かすサポート体制	課題: 発展的継続のための美術館内での活動の意味の明確化/公的資金による事業の成果や課題を社会に活かす方法	提案: 発展的継続に向けて → 夏の企画、ミテ・ハナさん育成強化、市内の全校へリーチ etc...
運営	プロジェクト発足 対話で紡ぐ美術鑑賞の導入決定 市民ボランティアの育成決定	コミュニケーション用SNS利用開始	ARDAコーディネーター派遣 アートカード・公式サイト・映像制作 ミテハナ展企画制作 プロジェクト連携実行委員会発足	ミテハナ展企画制作 公式サイトリニューアル ミテ・ハナハミダシ活動 本格サポート開始	外部専門家による事業評価・「5カ年報告書」の制作 同館学芸員とロジックモデルWS ミテハナ展企画制作
ミテ・ハナさん		1期生研修+自主研修	1期生研修+自主研修 アートカード制作 ミテハナ展運営	2期生研修+1・2期生合同研修+自主研修 複数の委員会発足 コーディネーター誕生	3期生研修+全期生合同研修+自主研修 ミテハナ展準備・運営 新コーディネーター誕生 ミテ・ハナ全員ミーティング

→ 提案・課題に対応する動き



プロジェクトの ファシリテーション・ポイント

ミテ・ハナさんが持つネットワークやアイデアは豊かです。その市民が楽しく生き生き活動することで、美術館の文化資源が地域に活かされるという状態が、ミテ・ハナソウでは少しずつ実現できてきました。市民の力を束ねる、その運営のコツ——ファシリテーションについてまとめてみました。

1 よく聴いて、対話する

どんなことを考えているのかを常に聴こうとする姿勢は、ミテ・ハナさんの意欲を引き出す大きなポイント! 時に「どこからそう思ったの?」と詳細を尋ねていくと、ミテ・ハナさんが何に引っかかりそのような提案や相談をしているのか理由がつかめてきて、プロジェクトの課題が見えてくることもあります。

2 活動を「自分事」にしてみよう

ミテ・ハナさんには「VTSや美術館の作品を使って、いろんな可能性を一緒に考えていこう」と、ことあるごとに伝えていました。1期生とは、体験を重ねる中で出てきたアイデアを「〇〇委員会」と名付け、それぞれの得意分野を活かしたチームで考える場をつくって

きました。研修や現場のふりかえりでは、あのときはどうすべきだったのかをミテ・ハナさん同士で考えています。そんな小さな積み重ねから「私たちのミテハナ」という意識が育ってきました。

3 目的と意義を繰り返し考える場をつくる

例えば、ミテ・ハナさんのグループ面接は対話を紡ぐ鑑賞の意義について話し合うことから始まりました。その後の、研修と活動現場で繰り返し行われるふりかえりはミテハナの価値観創りにもなっています。講師や美術館が「こうです」と説明しても、なかなかその価値観は定着しません。活動を通して出てくる一つひとつの疑問の答えをミテ・ハナさん自身が考える

ことで、「みんなの価値観」が創られ、根付きます。

4 時々、伴走する

「〇〇委員会」などで、ミテ・ハナさんに企画を考えてもらうときは、できることの範囲と目的を運営側と共有してからスタートします。実はミテ・ハナさんたちのアイデアが違う方向に走ってしまい、時間をかけて話し合ったのに、企画として形にならず、メンバーを落胆させたことがありました。出発時だけでなく、目的に向かってブラッシュアップされているか、時々進行を確認することが大事なのです。

[文=三ツ木 紀英]

美術館×ミテ・ハナさんによる自立したプロジェクトへ

What's

ミテ*ハナさん

ミテ*ハナさんのこと

「ミテ*ハナさん」は、佐倉市立美術館に訪れる大人や子どもたちと、作品の出会いの場をつくる鑑賞コミュニケーターであり、このプロジェクトの核を成す存在です。長期の研修を受け、練習を重ね、市民ボランティアとして活動しています。



ミテ*ハナさんの活動

学校連携や地域での活動

同館を訪れる児童・生徒向けの鑑賞ツアーと、その事前授業——ミテ・ハナソウ・カードを使った出前授業など——を行います。現在では市内の高齢者施設でも定期的に活動中です。今後は学童保育や公民館など、市内のさまざまな場所で活動していきたいと、ミテ*ハナさんからアイデアが続々と出ています。



ミテ・ハナソウ・カイ

同館で開催される展覧会で毎月1回、対話で紡ぐ美術鑑賞ツアーを行っています。対話をリードするファシリテーターとスタッフが力を合わせて、充実した対話を紡ぎます。参加者の素敵なコメントや「楽しかった」という笑顔が、ミテ*ハナさんたちの活動の大きな喜びと励みになっています。



ミテ・ハナソウ展の運営

2015年～2017年の夏休みに開催した、「ミテ・ハナソウ展」の運営を行いました。会期中毎日開催した「ミテ・ハナソウ・カイ」でのファシリテーターのほか、「研究の間」で来場者にワークシートの書き方や研究のしかたを案内したり、お手伝いしたり。ミテ*ハナさんにとっても一大イベントとして、大変ですがやりがいも十分あります。



ミテ*ハナさんが生まれるまで

ミテ*ハナさんは、鑑賞コミュニケーター（不定期募集）に応募した市民ボランティアです。作文の提出とグループ面接のあと、約1年をかけて、VTSをベースにした「ワークショップ」型中心の基礎研修と実践研修を通じて、ミテ*ハナさんの基本を学びます。また、ミテ*ハナさんたちが自主的に開催する自主研修で相互に学び合い、ミテ*ハナさんとしてのデビューを迎えています。



2017年度のミテ*ハナさん3期生研修カレンダー

⌚ 所要時間
👤 参加人数

基本は毎月1回1年間。今年1・2期生の追加研修も実施しました

5/13(土) 基礎研修A ⌚ 6時間45分 👤 15人	5/20(土) 基礎研修B ⌚ 6時間40分 👤 18人	6/3(土) コーチング研修 ⌚ 4時間25分 👤 12人	6/17(土) コーチング研修 ⌚ 5時間10分 👤 14人	7/1(土) コーチング研修 ⌚ 5時間20分 👤 11人	8/4(金) ミテハナ展 顔合わせ ⌚ 2時間 👤 21人 (1-3期生合同)
8/5(土) ミテハナ展 運営研修 ⌚ 3時間45分 👤 25人 (1-3期生合同)	8/8(火) コーチング研修 ⌚ 4時間15分 👤 18人 (1-3期生合同)	8/19(土) コーチング研修 ⌚ 5時間 👤 14人 (1-3期生合同)	8/29(火) アートカード研修 ⌚ 4時間45分 👤 9人	9/2(土) アートカード研修 ⌚ 4時間25分 👤 10人	9/16(土) ミテハナ展振り返り・ これからのミテハナ会議 ⌚ 6時間10分 👤 26人 (1-3期生合同)
10/21(土) コーチング研修 ⌚ 5時間10分 👤 14人	11/12(日) コーチング研修 ⌚ 4時間35分 👤 10人	11/28(火) コーチング研修 ⌚ 4時間35分 👤 13人	2/17(土) コーチング研修 ⌚ 4時間予定 👤 未定	3/11(日) これからの ミテハナ会議 ⌚ 4時間予定 👤 未定 (1-3期生合同)	

2018年1月末現在。実施予定含む ※1・2期生が自主参加した回あり ※2期生研修より、美術館職員・監視員が一部回に参加

講師/プランナー
三ツ木紀英さん
(ARDA)



2017年度の自主研修と自主練習

👤 参加人数

★ ミテ*ハナさんの呼びかけによる自主練習

4/12(水) VTSコーチング 👤 8人	4/26(水) VTSコーチング 👤 5人 ★	7/15(土) VTSコーチング 👤 12人	7/21(金) VTSコーチング・ ミーティング 👤 8人	7/26(水) VTSコーチング・ ミーティング 👤 9人	10/6(金) アートカード 👤 4人 ★	10/7(土) アートカード・ VTSコーチング 👤 10人
10/13(金) アートカード 👤 5人 ★	10/18(水) 優都苑 アートカード 👤 7人 ★	10/21(土) VTSコーチング 👤 5人	11/5(日) アートカード・ VTSコーチング 👤 12人	12/3(日) アートカード・ VTSコーチング 👤 12人		

2018年1月末現在。実施予定含む ※1-3期生合同

研修内容や回数は
様子を見て調整します。
自主練はまだ増えそう

コーディネーター
近藤乃梨子さん
(ARDA)



2017年には総勢46人となったミテ*ハナさん。ふだんは、子育て中のお母さんだったり、会社員だったり、悠々自適だったり、一人ひとりのバックグラウンドも違えば、アートとの関わりも、世代も、時間の使い方も異なる人たちで構成されています。

各期生

2014年募集 1期生 24人 女性23人 男性1人
2016年募集 2期生 11人 女性11人 (同館監視員との兼任2人)
2017年募集 3期生 11人 女性10人 男性1人

年齢 30代~70代

お住まい

佐倉市・市川市・習志野市・船橋市を
含む千葉県、東京都、群馬県

(すべて2018年1月末現在)



m i t e h a n a s a n

INTERVIEW

ミテ*ハナさんインタビュー

ミテ*ハナさんはどんなことを考えて、活動をしているのでしょうか？
研修や活動を通じて、彼ら彼女らに何か変化は起きているのでしょうか？
5人のミテ*ハナさんに、お話をうかがってみました。



[インタビュー=米津いつか 文=米津いつか・和田真文(ともにノマドプロダクション)]

INTERVIEW

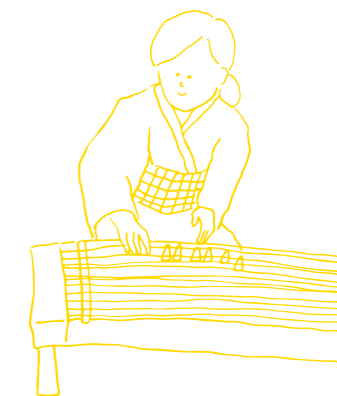
01

一人ではできないことをやる うれしさ、楽しさ



1期生

■さん



佐倉市在住。成人した子ども2人と、今年成人を迎える子どもの3人の母。以前から、「対話」による美術鑑賞に興味があった流れでミテ*ハナに応募。3年目の現在は、学校とミテ*ハナさんを結び、調整などを担当するコーディネーターの役割も果たす。アートとの接点は子どもの頃から絵を描くのが好きだった程度。今は趣味でお琴とフラメンコを続けている。最近は紅型染にも挑戦。

鑑賞ファシリテーターが行う「パラフレーズ(言い換えて応答する)」については、実は“親業訓練”という子育て方法で学んだことと同じだったのです。ですから、研修にすんなり入っていけました。日常でもそれが習慣になっていて、子どもとの会話で「今言っていたのはこういうことだよ」と私が言うと、「そうだよ」と会話が始まり、いつも結構話してくれるんです。

私自身は直感型ですぐ答えが出る方なんですけど、ミテ*ハナの活動を始めてから、少し思慮深くなった気がしています。考えれば考えるほどいろいろな見方があるんだと体感できるようになりました。研修のときも、私たちミテ*ハナはいつも考えるように促され、安易に答えを見せてくれるのではなく、「私たちが」どう思うかを聞いてくれるんです。

また、団体行動もいいなと思うようになったのも変化の1つです。ミテ*ハナになる前は集団行動を避けてきたんですが、今は、一人ではできないことをやる楽しさも実感しています。

近頃思うことは、ミテ*ハナの活動のあとに設けられた「ふりかえり」の時間をもっとよい場にしたいなと。振り返りって、もっと積極的に語るべきところだと思うんです。時間の制約もあるとは思いますが、運営面について話したあとは、全体でオープンに遠慮なく話せる場を創っていききたいですね。

ミテ*ハナ3年目になって、やりがいを感じる状況は少しずつ変化してきました。最初は会に参加した子どもの反応にうれしさを感じていましたが、今は、ミテ*ハナのみんなが盛り上がり、自分たちで見聞きし感動した言葉をたくさん伝えてくれることが何よりもうれしいです。

最近では、ミテ*ハナのコーディネーター業務も担当しています。私も含めて3人で、研修準備や学校対応の準備、全体を眺め動く立場です。パソコン業務など慣れない作業もありましたが、基本的には自分の性格に合っているのかもしれない。根っからのサポート気質で、裏方の仕事は性に合っています。ですが、とんちんかん人間なので(笑)、ミテ*ハナの仲間にはむしろ、支えてもらっていますよ。

これからは、子育てママのための対話で紡ぐ美術鑑賞をやってみたいと思っています。先日、3人の子どもを預けて参加してくださった方から、すごくよかったという感想をいただきました。ほんのいっときだけでも子どもを預けて参加してもらえる時間をつくりたいなあって。自分たちの社会に対する「責任」ではないけれど、「役割」があるなどは感じています。いつまでこのような活動が続けられるかという不安はありますが、ミテ*ハナの活動を社会に残していきたいです。

コーディネーターとして裏方仕事も率先して務める■さん。「最初はパソコンスキルもなくて大変だったんですけど(笑)。始まってしまえばやりがいが大きくて」と話す



What's going on?



1期生

さん



1期生唯一の男性。佐倉市内在住。学生時代はラグーマンで、社会人になってからはサークルで子どもたちと一緒にラグビーをする、スポーツ中心の人生を過ごしアートに縁がなかったという。ミテ・ハナソウ以前から佐倉市立美術館で企画展のボランティアを経験。DIC川村記念美術館で行われた「対話による美術鑑賞」に参加したことをきっかけに、今や休日をミテ・ハナソウに捧げるサラリーマン。

ミテ*ハナは、僕みたいに美術に対して真っさらな状態の人間でも活動に参加することができて、また、研修を通してスキルアップできるような組み立て方がされているので、とても満足して活動しています。教えるのではなく、気づかせるような手法が設計されているから、「次からこうしよう」って自分で考えるようになるんです。

研修の期間は長かったなと思います。僕ら1期生は基礎研修が終わって、6月くらいから翌年の3月までずっと外での活動はなく、自主練習だとかコーチングとかを受けていました。練習する時間がたっぷりあって、その意味では恵まれていたと思います。ただ、何年やらせるんだ、そろそろ外に出してよ、というような声は仲間内から結構出ていました。でも、自分たちが思う実力と、外部の方が評価する僕らの実力というのは違っていったんですよ。

実際の活動は思ったよりも難しかった。1年もやれば僕にもそれなりにできるのかなと思ったら、全然そうじゃない。ファシリテーターをやってみても、想像以上にできないことを痛感させられたんです。それで、時間があると美術館へ来て、作品をみながら考えをばーっと書き出して、2、3日後にまた来て、ということに繰り返し取り組みました。また、自分のファシリテーションや「ふりかえり」を録音して、発言内容や仲間のアドバイスを書き起こして読み返す、これを毎回したんです。

ミテ*ハナになって、自分が変わったことは確かです。一呼吸置くとか、ちょっとゆとりを持って場が見られるようになり、「話す立場」から「聴く立場」になりました。相手の、言葉の裏に隠された伝えたいことや話したいことを汲み取ろうと、「聴く」ことに注意を払うようになって、仕事でも、職場や顧客、取引先との人間関係も変わってきたんです。世の中というか僕が変わったせいなのでしょうかね？ 自分の周りの世界の見え方が変わりました。コミュニケーションがスムーズになったり、そういう変化が

だんだん見えてきて、自分でもすごいなと思いました。

今後のことと言えば、美術ってこんなに力があるんだよということを知っていきたくいです。文字通り、届けに行く。というのも友人が秋からこの近くで「こども食堂※1」を始めるので、そこでの心のビタミン剤みたいな部分を僕らが担当することができるんじゃないかと。例えばアートカードをやって、じゃあみんなで30分くらい美術館にみに行こうかっていうこともできるかもしれない。美術館ってそういう場であっていいのかなと思うんですね。

ミテ*ハナとして3年活動してきて、いろんなところで役立つ、役立つのではないかっていう実感を持っているんです。だからこそ、このミテ*ハナの活動をどう活かして広げていくのかは、すごく大きな課題です。我々はボランティアな立場ですが、美術館頼みにするのではなくて、一緒に考えて進めていかなきゃと思っています。

※1：家庭の事情などにより、十分に食事を摂れない、あるいは孤食になりがちな子どもに、無料または低額で食事や団らんを提供する市民活動。

平日は仕事で参加できなくても、ミテ・ハナソウ・カイやミテ・ハナソウ展で活躍するさん。
「地元の人たちにコミュニティの媒介としての美術館を知ってもらいたい」と話す



2期生

さん



佐倉市在住。ミテ*ハナ最年長者。子育て中から佐倉市立美術館に通う。英語を用いた劇創作などを通じ子どもから大人まで自由に意見を言い合える、ラボと呼ばれる活動の教室を25年間運営。また、大人対象の日本語講師も務めていた。現在は、本人曰く「全力投球で終活エンジョイ中」で、ミテ*ハナの活動に邁進中。

ミテ*ハナに応募するまでの25年間、子どもたちと関わってきましたので、ここでの活動はその延長線上にあると思っています。今までの経験を活かして、子どもたちの中から何か引き出せるお手伝いができるということが、とてもうれしいです。日本の子どもは自分から意見を言うことが少ないと感じていますが、活動を通じて子どもたちがキラキラした言葉を発していく瞬間が見たくて続けてきました。その想いはミテ*ハナになった今も一緒です。

これまでの活動では自分がトップに立って指示を出す立場にいましたが、ここでは違います。娘ほど年若い方たちが、皆さん本当に真剣にやっていたら、若い人からもビシバシ指摘されて落ち込むこともあるけれど、クリアしていく力が自分にもまだあるんですよ。ポイントポイントで指摘してくださるので、毎回目からウロコが落ちる経験をしています。上から指示が飛んできて受け入れるのではなくて、現場にいる人たちが自分でどうするか考えて動いていくボトムアップ型の考え方も、これまでの自分にはなかった発想法です。

ミテ*ハナになって大きく変化したことの1つに、本音でトークできるようになったということがあります。これまでは「人間こうでなくてはいけない」「ここまで言ったらちょっと言い過ぎかな」とか、自分の立場などからいろいろ抑えていたんですけど、ガードを解いて動けるようになったかな、と。年齢も、仕事も、過去も、肩書きも関係なく、一人の人間として居られる場所がここなんです。あと、例えば主人と一緒に展覧会をみるとき、自分の主観で作品の好き嫌いを考えるのではなく絵をみるときに自分の素直な気持ちで語れるようになったことも大きいです。都内に行くときはよく展覧会情報をチェックして、足を運ぶ機会も増えましたね。

ファシリテーターとして難しいのは、自分の意見を言わないこと。普段から家族でよく会話をするし、自分の意見

もよく言うんです。だから、何かをみて自分の意見が膨らんできても、それを抑えて子どもたちの声をよく聴くことが自分にとっては難しいと感じています。1期生の姿を見ると、自分はまだまだだと落ち込むこともありますが、それは好奇心で補って日々の活動を楽しんでいます。

今後は、佐倉市の小学生、中学生がもっと美術館に来て「ミテ・ハナソウ」を体験してくれるといいなと思っています。祖父母に連れられて無理矢理意見を言わされていた男の子でも、回数を重ねるにつれ自分から大きな声で感想を言ってくれるようになったり、お姉ちゃんが体験しているのを見て自分もやりたいと来てくれる子がいたりして、子どもたちの変化を目の当たりにするとやりがいを感じます。スポーツではそれぞれの子どもが優劣を自覚しながらやっていくものだと思います。アートは好きなことが言えて、自分を素直に解放することができる。だから好きだし、子どもたちがキラキラした言葉を発するための力になるんじゃないかと思うんです。「ミテ・ハナソウ」の活動を通じて、いつか子どもたちが自分から美術館に行きたい、作品について話したいと思えるようなお手伝いをできるようになることが理想です。

2期生のさんは、2017年にミテ*ハナとして本番デビュー。アウトリーチ活動にも積極的に参加する。「まだ、自分の対話を客観的に見ることができない」とも話す



04

自分も子どもも変えた ミテ*ハナの活動



2期生

さん



佐倉市在住。佐倉市立美術館の監視員として勤務しながら、ミテ*ハナの活動にも参加している。また、音楽大学出身で、そのスキルを活かし、自宅の近くにある障害者の自立支援を行うNPO法人「木ようの家」でワークショップに取り組み。プライベートでは、大学2年生の女の子と中学3年生の男の子という、子ども2人を持つお母さん。

小さい頃、暇さえあれば家にあった西洋画事典を眺めていました。この人は何が言いたいんだろう？ とか考えて物語を作ったりして、一人で繰り返し眺めていましたね。都内にある音楽大学のピアノ科に進んでからは、空き時間にふらっと美術館に行くこともあり。子どもが生まれてからは、母の実家近くにある絵本美術館などに一緒に出かけていたんです。ワークショップにも参加することもあったし、美術館は子どもと一緒に楽しむ場所というイメージが強かったです。そういう経験もあって、自分にも何かできるかなと思ってミテ*ハナに応募しました。

ミテ*ハナの活動はやってもやっても壁があって、最初はハードルが高く感じられました。でも、褒めたり励ましたりしてくださる仲間が存在が大きいですね。研修の始め頃は、「話をよく聴く」ところにハードルを感じていました。子育て中の方の話はすっと頭に入るのに、未経験のことや環境が異なる人の話は、自分の主観が邪魔をして聞けていないことに驚きました。研修では、うまく表現しきれないことを相手が理解してくれ、的確な言葉に置き換えてもらったときに「わかってもらえてうれしい！」と対話することが楽しく思える体験が何度もありました。そんな中で、子どもに対する対話も変わってきたように思います。

親という立場にあると、つい子どもの言うことを判断しなくなったり意見を言いたくなったりするんです。でも、グッと我慢して、研修で学んだ、話の内容を言い換える「パラフレーズ」の技を駆使して「よく聴く」。そうしたら最近、あまり学校のことを話さなかった下の子がよく話してくれるようになりました。私が自分の活動に忙しくてあまり口出ししなくなったのも影響しているかもしれません。

研修時はミテ*ハナを相手に訓練するのですが、実際はいろいろな年齢層の方が参加します。その都度、相手に合わせた対応が求められるんですよね。そこが大変な点でもあり、やりがいにもつながっています。デビューしたて

の頃、学校の授業で来館した子の中に、あまり話さない子がいたんです。1作品目はサポート役だった私は、その子が感想を口にするたびに「いいね、それ言ってみたら」と後ろから声をかけていたんです。始めは発言しなかったんですけど、私が2作品目を担当したとき、その子が手を挙げてくれて、「よっしゃー！」ってうれしくなりました。

一度、高齢の方と一緒に作品をみる機会がありました。初めは帰りたいようにしていたのが、対話が始まった途端に表情が変わっていくのを目の当たりにして、こんな風に人の役に立てることなんだと改めて感じました。そのことがきっかけで、今は優都苑でのアウトリーチにも興味を持ち始めています。あと、障害のある方向けの鑑賞会もやってみたい。月2回、私が音楽を教えている知的障害や身体障害のある方向けの自立支援施設「木ようの家」から何人か美術館に遊びに来てくださったことがあるんです。ふだんはあまり話さない人たちだと思っていたんですが、「〇〇にみえる」とか、一生懸命、絵をみて話してくれて。そんな経験をしたこともあって、これからは、子どもだけではなく、高齢者や障害のある方に向けた鑑賞会もやってみたいと考えています。

学校連携授業で、子どもたちの話に耳を傾ける
さん。「ミテハナ展も今年がデビュー。
ファシリテーションを3回やってみて、そのたびに違う課題が見えてくる」と言う



05

今まで信じてきたものが揺らぐ キラキラした瞬間に出会える



3期生

さん



東京都在住。アーティスト。ダンスカンパニー〈ときかたち〉主宰、シェアハウス&スタジオ〈LAB83〉代表。美術大学絵画学科を卒業後、身体を使った表現活動のかたわら、絵画教室の講師を務めていた。最近はおもに振付家・演出家として活動している。身体と音楽と美術を対等に扱い、みせることをコンセプトに活動。「アートにおける対話とは何か」に興味を持ち、ミテ*ハナに応募した。

作家として、異なるもの同士がいかにか共存するということを丁寧に探りたい、観客と直接的に対話する手法がないかと思っているときにVTSの存在を知って、ミテ*ハナに応募しました。アートにおける対話とは何か、観客とダイレクトに対話を産む方法論を探していたんです。

研修を通して、美術作品がみる人にとっていかに「自分と違うもの」であるかを痛感しました。みることでその他者とつながるような感覚がたくさんあるなって。作品をよくみることが、他者を尊重することや想像力を養うことにつながっていくんだと感じました。

一度、参加者としてミテ*ハナのファシリテーションを体験したことがあるのですが、まだじっくり作品をみているときに「あなたはどう思いますか？」と聞かれて、「今は答えたくありません」と言ったことがありました。私自身は、誘導尋問のように聞かれるのがいちばん嫌いなんです。自分がファシリテーターになったときは、気をつけようと思いました。鑑賞者の側にまわってみると、ファシリテーターというのは自分の写し鏡のような存在なんです。やってももらえるとうれしいこと、やってほしくないことが見えてくるんです。

研修は、自分も含めミテ*ハナたちの人生の訓練の場にいるような感覚を持ちました。ふだんと違う環境に身を置いたときに、自分が今まで信じてきたものが揺らぐ感覚がすごく楽しくて、キラキラして見えます。バックグラウンドも年齢も違う人たちが、何歳になっても新しいことや未知のことに取り組もうという姿勢でその環境にいることが素晴らしいし、私自身の学習にもつながっているし。

ミテ*ハナの皆さんと一緒にいると、絶対わかりあえないという前提を持った上で、わかりあおうという気持ちでいることが共通認識としてあると感じるんです。その気持ちがすごく大事だと思うし、みんなが悩んでい

る姿を見ると、日本にこんなに素晴らしい土壌があるのはいいなと思えてきます。未知なことに貪欲な姿勢や、話し合える環境が日本にあるということがうれしいし、その場を創れるパーツとして自分が機能していることにやりがいを感じています。

アーティストとしては、自分の意見や視点を相手と共有することが求められ、ミテ*ハナソウのファシリテーターとしては、自分の意見を述べずに参加者の思考を開くという作業が求められる。自分のワークショップでのファシリテーションとは異なり、まだまだ不慣れですが、ここには批判する人や裁く人がいないということも、まずは身振り手振りで鑑賞者に伝え、居心地のいい環境をつくりたい。そうすると、ファシリテーターとしての自分も意識を集中させることができ、言葉も自然についてくるという好循環を生み出すことができるんです。

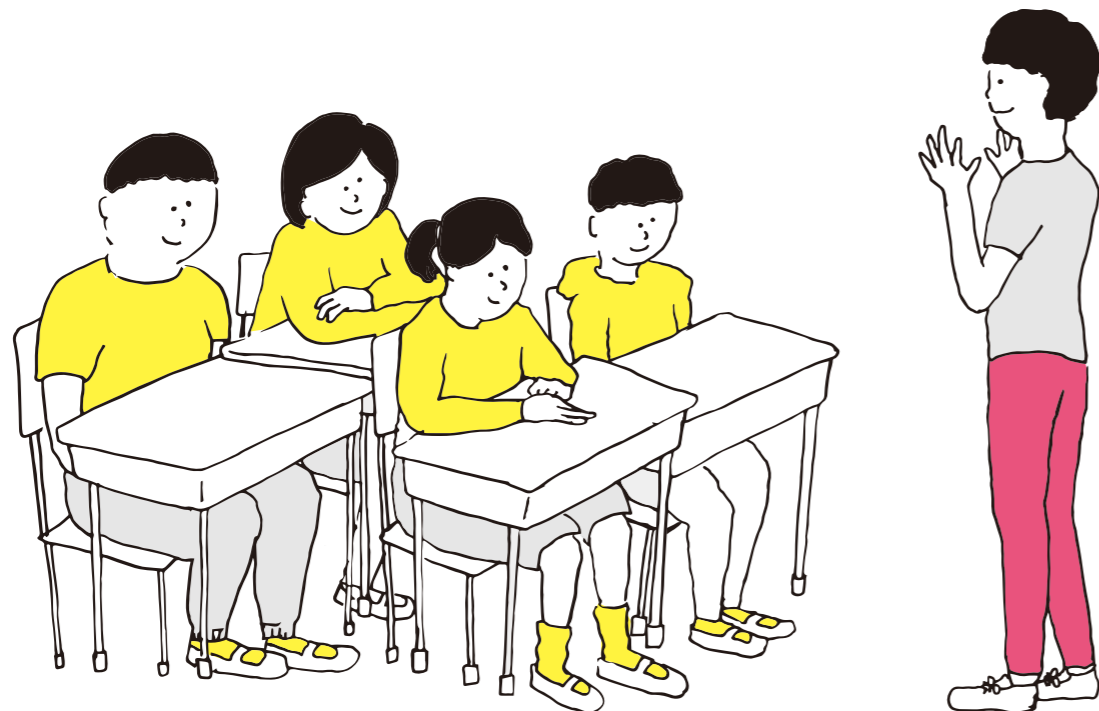
自分が作品を創る理由は、そこで対話を生むため、そういった作品をみて対話するというシステムを私は信じていますし、このミテ*ハナソウの対話を通じた活動は重要な意味を持つと思っているんです。この先も、ミテ*ハナが増えて活動が広がると、日本人にとって、日本にとって、いい機能として影響を与えるんじゃないかと思っています。

異なる環境や世代の人が集う研修から学ぶ
ものが多いと話すさん。「ダンスを使った対話で紡ぐ鑑賞もやってみたい」とも



D O C U M E N T

学校連携プログラム



ミテ・ハナソウ・プロジェクトの起りは、子どもたちのためになる学校との連携事業を考えたことでした。そこでは、どのようにプログラムが準備され、ミテ*ハナさんと子どもたちはどんな活動をしているのでしょうか？

Days 1 事前準備

申込みのあった学校へ、コーディネーターのミテ*ハナさんが訪問（現在は担当学芸員も同行）。1時間ほどかけて先生と情報交換をします。

Meeting 事前ミーティング

館から担当の先生へ、事前授業と美術館訪問の目的や内容を説明します。そして学校には、参加する子どもたちの学年や人数、特徴などの必要事項を確認します。



先生に配布する資料。ミテ・ハナソウ心得、授業概要、先生への依頼がまとめられたチェックシート

先生が期待すること、ミテ・ハナソウが大事にしていることをすり合わせます。

Days 2 事前授業@学校

ミテ*ハナさんが学校を訪問し、子どもたちが美術館での作品鑑賞を深められるよう、アートカードを使って環境づくりをします。

13:00
40分

ミテ*ハナさん 集合・準備

控室で、進行や児童のことを確認するミーティングと授業で使うアートカードなどの準備を行います。また、使用する教室の机を移動するなど授業の環境も整える時間です。



13:40
10分

あいさつ

ミテ*ハナさんから子どもたちへ、あいさつと自己紹介タイム。今日の授業ですることや、アートを見ることには間違いがないことを伝えます。「よくみて」「かんがえて」「はなして」「ぎく」のための、心の準備をします。



13:50
35分

グループ活動

美術館訪問授業への動機付け
各班に分かれ、子どもたちはミテ*ハナさんとともに、アートカードで「みること」に挑戦します。



これは、作品をみる楽しさの体験と同時に、以下のような、来館への動機付けを目的としています。

- ① ミテ*ハナさんと関係をつくる
- ② 作品について興味や疑問を持つ
- ③ 作品について言葉を紡ぐ練習をする
- ④ 美術館訪問を楽しみにする



アートカードで体験すること

最初の「神経衰弱」ゲームでは、子どもたちは2つの作品を見比べながら、その共通点を発見していきます。ミテ*ハナさんは子どもたちの気づきに対し「どこからそう思ったの?」と問いかけながら、ゲームを進行。しっかり作品をみることに慣れてきたら、次は1枚の絵をみて話しをします。「この作品の中でどんなことが起きている?」。美術館訪問に向けて、対話を紡ぐ練習です。最後に、訪問時にみたい作品を選んで、その理由を話し合います。美術館への期待が高まってきたところで、終了時間がやってきます。

14:25 結び
5分

教室の片付け後、ミテ*ハナさんから子どもたちに「いちばん面白かったこと」「発見したこと」など、感想を尋ねます。美術館の3つのマナーを紹介して、授業は終了です。



14:30 ミテ*ハナ
約30分
ふりかえり

一緒に活動した相手と、ファシリテーションのよかった点や失敗した点、子どもたちの気づきなどを話し、「本当にその対応でよかったのか」という点を考えます。そして、全員で活動の流れに沿って、問題点や改善点などを検討します。

プログラムの充実のために、活動の中で大事なことを確認します。



15:00 先生と
ふりかえり

先生に気づいたことや、気になったことを話してもらいます。また、ミテ*ハナさんからは、子どもたちの印象的な発言や態度、よかったことを具体的に伝えます。これにより、先生はふだんとは違う子どもの一面を発見することがあります。一方、ミテ*ハナさんは活動の意義を実感します。また、美術館訪問に向けて、子どもの意欲を持続させる工夫を、先生にお願いします。

先生と一緒に、この活動が子どもたちにとってどんな意義があるのかを考える時間です。



解散

ありがとうございました！

Days 3 美術館訪問

事前授業を受けた子どもたちが学校やクラス単位で来館。美術館でのマナーを学び、ミテ*ハナさんと一緒に展示作品で対話を紡ぐ美術鑑賞をします。



9:10 ミテ*ハナさん
50分
集合・準備

30分のミーティング後、荷物置き場やクリップボードなどをそろえて、子どもたちを迎える準備。



10:00 子どもたちとの再会 +
20分
クールダウン

子どもたちとの再会后、クールダウンを図り、活動内容や美術館のルールを説明します。



10:20 展示室へ移動
5分

空間になじみ、心を準備する時間
グループごとに展示室へ移動。事前授業でみた作品を探してぐるっと1周、1作品目の鑑賞へ。

子どもたちは美術館の空間になじみ、緊張を解きながら、作品をみたくてワクワクしています。



10:25 グループ活動
30分

作品の見方を体得する時間
グループごとにミテ*ハナさんのリードで、2作品を鑑賞します。

子どもたちはミテ*ハナさんの問いかけにより、1つの作品に向き合い、自分なりの作品の見方を体得していきます。

個人鑑賞につなぐための対話
まずは1つの作品をだまってじっくりとみたあと、ミテ*ハナさんが問いかけます。「この絵の中で何が起きている？ 感じたことはある？」。子どもたちの発言を受けて、「この絵のどこからそう考えたの？」「ほかに気づいたことは？」。問いかけを重ねることで、子どもたちは1つの作品に潜むさまざまな見方の可能性に気づき、鑑賞が深まります。



何かを訴えたいのか、悲しんでいるのかな



10:55
20分

個人鑑賞

自立した鑑賞の時間

作品と対話ができるようになった子どもたちが、集中して作品と向き合えるよう見守ります。



静かで密度の高い時間になれば、プログラムは成功!

作品と向かい合う

子どもたちは、学校で決めてきた作品や気になった作品と向き合います。一般来館者がいる中でも、とても静かな時間が流れます。子どもたちが手にしている「なんでもシート」は、作品の気に入った部分をスケッチしたり、考えたことを書きとめたりと、使い方はさまざまです。言葉や絵にしようとすることで、作品とつながりができます。

ミテ*ハナさんは子どもたちの様子を見守り、時間がきたら声をかけます。



11:15
15分

結び

子どもたちから、美術館で作品をみた感想などを聞き、鑑賞体験をふりかえります。ミテ*ハナさんたちが子どもたちを見送って、一連の授業は終了です。

11:50
40分

ミテ*ハナ ふりかえり

一緒に活動した相手と、「それで本当によかったのか?」という視点で、自身のファシリテーションや展示室への誘導、鑑賞時の作品との距離、声がけの仕方などを話し合います。その後、全体で運営について気づいたことを共有します。



事前授業時と同様に、ミテ*ハナさんのレベルアップのための時間。活動で大事なことは何かを確認します。

終了

VOICE

「ミテ*ハナソウ*プロジェクト」これまでの活動記録より

授業を実施した 先生たちの 声から

子どもたちの変化を中心に

ふ だんは美術作品に触れる機会が少なく、子どもたちは生き生きと鑑賞していたと思います。貴重な体験となりました。

物 事を表面的にしか見ることはできなかった子どもたちが、自ら想像し、その本質や内面をみよう意識することができるようになると感じました。心で“みる”こと“きく”ことができるようにするために、とても有意義な活動です。

✂ 工で作品鑑賞を行ったときに、以前よりも積極的に意見を言う子が増えました。自分の感覚に自信を持つ子が増えたからだと思います。

学 習中に自分の考えを発言する児童が少々増えたと感じています。相手の意見を認め、マネではなく自分の意見に活かせる児童になって欲しいと思います。

1 つのことに集中して向き合うことが苦手な子どもたちが多くですが、作品や自分と向き合うことのよさを味わえたようです。芸術作品への興味・関心も高まり、例えば社会科の歴史資料をよく見て考えるにもつながると思います。

何 も知らずに作品をみれば、見方がわからないと思います。わかっているもので1時間半、本物を見ることが充実したと思います。

ワ ークシートにも自由に書く・描くスペースがあり、これによって教師も評価材料になり、大変助かります。

子どもたちの 手紙より

絵 を見ると心がらくなったり自由になったりすることを学びました。
(小学4年生)

自 分で作品を鑑賞するときもギャラリートークで教わった作品の見方を活用して、すぐ絵をみて感想が浮かび上がりました。
(小学6年生)

本 物の作品を見ないとわからない事が沢山あったので、今度ゆっくり見に行きたいと思いました。
(小学4年生)

さ いしょにミテ*ハナさんたちがみんなの言っていることは全部正解です。とっていたので、わたしはその言葉が心に残っています。
(小学4年生)

他 の人の考えをきけたりして話するってこんなに楽しいんだと思いました。それからいろんな人と話するようになりました。
(小学6年生)

他 の人や色々な人の感想を聞くことができて、美術についてもっと知りたくなりました。
(中学1年生)

今 度絵を見たら、ただ見るだけでなく、しっかりと自分の考えを持つようになりたいです。
(小学6年生)

評価Note 先生にも子どもたちにも変化が!

「ミテ*ハナソウ*プロジェクト」事業評価分析から



事業評価
コーディネーター
熊谷 薫さん

ミテ*ハナソウ*プロジェクトの中で、根幹をなす学校連携プログラム。このプログラムを通して変化をしているのは、授業を行う先生と、参加する子どもたちの両方です。

先生からは、ふだんの子どもたちとは違う側面が見られたとの声が多くあり、通常の授業では気づかない貴重な情報が得られたようです。また子どもたちからは、絵を見ることが楽しかったとの声が多くあり、美術鑑賞の楽しさを感じてもらえたようです。

双方ともに、通常の授業とは異なる、正解のない美術鑑賞体験を通して対話をすることで、美術鑑賞を身近に感じ、その結果豊かな感性の醸成に役立ったようです。

詳しくはP.76へ

D O C U M E N T

ミテ・ハナソウ展



アート作品を眺める展覧会から、アートを深く味わう展覧会へ。そのための仕掛けがあちらこちらに設けられた「ミテ・ハナソウ展」。ここでもミテ*ハナさんは、そのソフトを担う大切な役割を果たします。展示室ではいったいどのようなことが起こっているのか。まずは2017年の展覧会をのぞいてみましょう。

Overview

展覧会の特徴

同じ作品も鑑賞者の心と身体の構えが変わると見方や感じ方が変わり、発見もあります。鑑賞者が作品とさまざまな出会いができるようデザインされた展覧会です。

VTSの美的発達段階や作品選びのポイントを踏まえて選ばれた作品。それらを集中してみたり、自由な心で鑑賞したりできるよう、座る・みる・話す・聴く・書くなど鑑賞者のアクションを促す展示空間や鑑賞ツアー、研究ツールを用意しています。

「ミテ・ハナソウ展 2017」(柴宮忠徳展 第2会場として開催)
 期間: 2017年8月5日(土)~31日(木) ※月曜休館
 時間: 10:00~18:00 (入館は17:30まで)



Landscape 展示のようす

鑑賞者と作品との距離がぐっと近づくよう工夫された展示空間と、作品についてほかの鑑賞者が感じたことも知ることで研究の間を自由に行き来できます。

研究の間



気になる作品や作者について、調べたりコメントを書いて貼ったりする部屋

ミテ*ハナさんが常駐して、来館者をお手伝い

椅子の間



イスを自由に動かして、好きな絵の前でゆっくり座ってみる部屋

木製のイスは子どもでも運べるもの

静けさの間



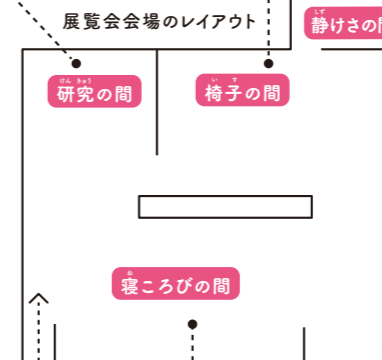
一人で静かに、じっくり作品と向き合う小さな部屋

うす暗く小ぢんまりした空間



コメントシート

作品キャプションのそばには、鑑賞者のコメントからピックアップされた言葉も



展覧会場場のレイアウト



サイン

展示空間には「どこからそう思う?」「何が起きているかな?」など作品と向き合う準備のための「ことば」も

寝ころびの間



靴をぬいで、ゴロゴロと寝転んだりしながらくつろいで作品をみる部屋。寝転ぶと視点が変わり、座っていたときに見落としていたことにも気づくかも

肌触りと色にこだわって選ばれたカーペット

ある日のカイ

家族単位での参加も多く、参加人数が多い日は大人のみ、子どものみ、同じ学年くらいの子どものみのグループなど、名札をつけながら、臨機応変にグループ分けをしています。

11:00
5分
あいさつ
ツアー説明

まずはミテ*ハナさんより、あいさつとツアーの説明です。その後グループに分かれ、集合場所のロビーや展示会場の入り口で、ミテ*ハナさんは参加者に声をかけながら、「話をしやすい」状態へと整えていきます。

11:10頃
45分
グループ鑑賞

対話を通して作品の見方を知る時間

参加者は、展示室のさまざまなシーンに身を置き、一期一会の他者と、対話を通して作品鑑賞を楽しむます。ふだんの静かな展示室で作品を一人で見ることとは、違った鑑賞の仕方を体験します。

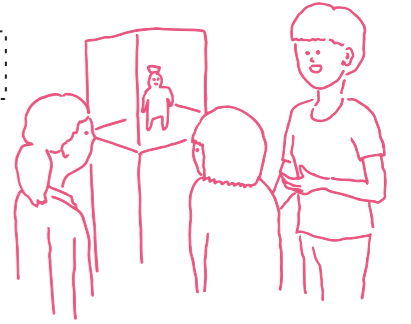
ミテ*ハナさんは、まず、参加者の緊張を解きながら、展示会を知ってもらうために会場を一巡。その後、参加者と対話をしながら3つの作品をみていきます。

鑑賞を深めるために

ミテ*ハナさんは深い鑑賞を目指して、参加者の年齢や経験などにふさわしい作品を選びます。描かれた表層から読み取れる要素が多いものから、次第に鑑賞の難度を上げていくように作品を選んでいるのです。初対面の大人グループでは、最初は意見が出にくいこともしばしばです。でも、3作品目にもなると、活発に言葉が飛び交い、見方が豊かになっていきます。

12:00頃
ツアーのあとは……

時間がある人は、研究の間に移動したり、ほかの作品をみたり。中にはミテ*ハナさんに、話し足りなかったことをさらに話してくれる子どもや保護者の姿も。研究の間では、疑問や興味がわいたら、自分で調べたり、ほかの人の意見を見たりして、考えを深めることができます。



中学校美術部とのカイ

夏休み中の部活動の一環で、来館するグループもあります。この日は、学校連携プログラムに近い内容でツアーをしました。

13:30
30分
あいさつと
自己紹介

担当学芸員から美術館と展示会の紹介のあとは、アートカードを使って自己紹介。ミテ*ハナさんも自己紹介をしながら、子どもたちとの距離を縮めます。

14:00
50分
鑑賞タイム

グループ鑑賞

展示会場を1周したら、まずはミテ*ハナさんとともにグループ鑑賞をしました。ここでの目的は、連携授業と同様に、作品の見方を体得して、自立した鑑賞態度を育むこと。この日の生徒たちは、自分の感じたことや考えたことを積極的に話し、友だちの意見にもしっかり耳を傾けていました。友だちの意見を聞いて自分の見方が変化した生徒もちらほら。

個人鑑賞

個人鑑賞の時間には、ワークシートを持って気になる作品の前へ。集中して一人で絵と向き合う生徒、友だちやミテ*ハナさん、学芸員と言葉を交わし、再び作品に向き合う生徒と、鑑賞スタイルはさまざまでした。

14:50
10分
結び

ワークシートを完成させたら、研究の間でほかの鑑賞者のワークシートを読んだり、自分のものを貼ったり。最後に、今日の感想を話し合っ、ツアーは終了です。



「研究会の間」は、興味を持った作品について見方を深める部屋。
読んだり書いたり話したり、そのスタイルは自由です。



研究会の使い方

ワークシートを使って頭の整理をする人、壁に貼られたほかの人の言葉や資料を読み作品とのさらなる対話を楽しむ人、研究会スタッフのミテ・ハナさんに作品の話や感想を伝える姿も見られます。プレゼントの缶バッジをもらって終わり、と思いきや、缶バッジになった作品を確かめに、もう一度、展示をみに行く子どもも。



ワークシートには思ったことを絵にする人もいます



小学生も、もくもくと自分の言葉を綴ります



自分のかいたシートを壁に貼り出します



鑑賞者が気になった作品について、感じたことや考えたことを綴ったワークシートが壁いっぱい



ほかの人の意見と比較しながら作品がどうみられていたかも研究



集中してほかの人の思いを読む中学生の姿



バッジに夢中の小学生。毎年来館するコレクター児童もいます



対話の時間に話さきれなかったことをミテ・ハナさんに伝える姿は日常的



中学生も缶バッジに興味津々

研究ツール

ワークシートに作品から感じたことを書いたり、イメージを描いたりすることは、自分の考えを整理し、鑑賞を深めることにつながります。気になった作品をさらに「研究」するため、右のツールや関連資料も用意。壁に貼ったほかの鑑賞者のワークシートも新たな気づきの手がかりになります。



ワークシート

自由に使えるワークシート。
展示室に持ち出せるバインダー付き



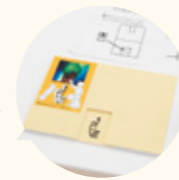
展示作品のミニ版シール

ワークシート用の全作品のミニシール。
ミテ・ハナさんが1枚ずつ切って準備



スタンプカード

佐倉市内全小中学生に配布している「ミテ・ハナソウ展」スタンプカード。
裏面には、各部屋で鑑賞しているイラストのスタンプを押すスペースがある



缶バッジ

スタンプカードを持ってツアーに参加するともらえる、子ども用特典。
各部屋のイラストや作品の一部など10数種類を用意した。バッジ集めから、ミテハナ展の対話リピーターになった子どもたちも出現

VOICE 小学生の リピート率 50%!

これまでのアンケートより

ミテ・ハナソウ・カイに 参加した人の声から

1つの作品から、
たくさんの方
があると感じた。ほか
の作品からもどう思っ
たかみてみたい。
(小学6年生)

絵画に興味がなく、感
受性も乏しいと思っ
ていましたが、皆さんの意見
などをうかがい、私なりに楽
しんで鑑賞することができ、
自分にびっくりしました。絵は
自分なりの感覚でよいのだと
肩の力が抜けた感じです。
(60代女性)

自分の心を、
特に醜い部
分を、知らなかつ
た醜さを思い知ら
されているような
気がした。
(30代男性)

担当してくださった方が笑
顔で発言しやすかつ
た。美術館に行くことは時々
あったけれど、どのように絵を
見ればよいのか、実はよくわか
らなかつたけど、こんな風に見
ればよいのだと思うことがで
きました。
(40代女性)

たくさんの大人
の意見を聞い
たりして、見方が変
わりました！あまり
大人の人たちの意見
を聞く機会が無いの
で楽しかったです。
(中学2年生)

多様な見方をする
ことで作品に対
する見方を深めること
ができるのはわかつた
のですが、やはりその前
に学習しておくことも必
要かも。
(60代女性)

— 人だただ眺めて
特に感想もないま
ま終わってしまったと思
います。人とはなすことによ
って絵の世界のより多くの
面が見られました。
(40代女性)

いろんな絵をみ
て絵を見るの
が楽しくなりました。
絵を深くみることで
いろんなことがわか
りました。
(小学5年生)

抽象画的なものは、
こんな機会に話し
合ってみることが大変面
白いことだと初めてわか
った。普通はあまりやら
ないから。
(80代男性)

美術館のイメージが
変わりました。子
ども楽しめたのでよかつ
たです。こういう取り組
みがあると、足を運びやす
いと感じました。
(30代女性)

ほかの鑑賞者との
会話が美術館
では生まれにくい
が、対話することでと
ても新鮮な視野が得られ、
満足感が高まった。
(20代男性)

自分は意見を言う
のが得意ではな
いけれど、絵をみて考え
たり思ったりすることは
たくさんあったので、楽
しかったです。
(小学6年生)

はずかしがり
やだった私
が、イスの間で自
分の意見をはずかし
がらずにいえました。
ありがとう。
(小学3年生)

日頃身近に感
じない芸術と
いうものに初めて触
れたような気がしま
した。
(30代男性)

What's ミテハナ・カード



美術館で
貸出中! /



「ミテ・ハナソウ・カード」のこと

学校連携プログラムなどに使っている「ミテ・ハナソウ・カード」は、佐倉市立美術館オリジナルのアートカードです。収蔵品から60点を選び、〈作品カード〉にしました。さらに、作品をよくみて、考えるきっかけとなる〈問いかけカード〉、カードの使い方を記載した〈ガイドブック〉がセットになっています。美術館の外でも、自分で作品と対話する第一歩が体験できるツールです。

作品カード〈60枚〉

60の作品は、さまざまな見方ができるものを中心に選ばれています。絵画、彫刻、工芸品と幅広いジャンルの作品があるのも特徴です。



問いかけカード〈11枚〉

表面は「何が起きている?」「どんな音がする?」など作品をよくみるためのヒント、裏面には作品の中に発言の根拠を尋ねる「どこからそう思った?」という言葉が書かれています。カードを組み合わせることで、鑑賞が深まる設計になっています。



ガイドブック

ゲーム感覚で楽しみながら、作品に親しみ、鑑賞のコツをつかむよう工夫されたミテ・ハナソウ・カードの特徴や使い方を紹介するガイドブックです。中にはミテ・ハナさんが開発したゲームも掲載されています。



ココで活躍中!



学校の事前授業で、アートカード・ゲームを通じて、子どもたちに美術鑑賞のコツをつかんでもらう



高齢者施設での活動にも、手持ちサイズとゲーム性で、美術が身近になる、ツールとして利用



美術館での鑑賞ツアーのウォームアップにも使用。自己紹介で話すきっかけづくりにも



アウトリーチ活動に。多様な場で「対話で紡ぐ美術鑑賞」の入り口を体験することができる

評価Note 子どもたちのリピート率50%という驚異の展覧会

「ミテ・ハナソウ・プロジェクト」事業評価分析から



事業評価
コーディネーター
熊谷 薫さん

ミテ・ハナソウ展には、大人と子どもがほぼ同数参加しています。展示期間中の大人のミテ・ハナソウ・カイ参加のリピート率が25%程度で、子どものリピート率が50%と驚くほど高い割合です。特に子どもが「対話で紡ぐ美術鑑賞」を楽しんでおり、繰り返し参加することで美術館への親しみを深めていることがわかります。アンケート調査の結果、子どもたちは「絵をみて考える」「自分の意見を言える」「他人の意見を聞く」ことなどを楽しんでいることがわかり、VTSの目指す効果を得ていることが明らかになりました。

詳しくはP.76へ

ミテハナラウンドテーブル
mitahana ROUND TABLE



「ミテ・ハナソウ」では、学校連携などのほかに、ミテ*ハナさんたちの提案によるアウトリーチ活動が増殖中です。ここでは、コーディネーターの近藤乃梨子さんをモデレーターとして、ミテ*ハナさんの中から4名に、アウトリーチ活動についてのホンネや今後の希望などを、ざっくばらんに話してもらいました。

勤務先で気づいたことに<ミテ・ハナ>を重ねたら

—ミテ*ハナさんによる美術館の外での活動では、ツールとして佐倉市立美術館オリジナルのアートカード「ミテ・ハナソウ・カード」がよく使われています。例えば1期生の小川さんは、高齢者施設での活動を提案してくれましたが、このアートカードがあるからこそやってみたい、行ってみたいと思われたのですか？

小川 アウトリーチ委員会に入ったことがきっかけなんですけれど。私が勤める介護老人保健施設「ユウカリ優都苑」（以下、優都苑）のレクリエーションは、入所者が受け身になるもの多くて、外から見てもちょっとつまらなさそうだなと感じていました。アートカードを使った活動は、どんなことを言ってもいいし、正解・不正解がない。絵をみたまま、自分の心の中のことを言葉にするので、これだったら入所者さんも能動的にできるんじゃないかと思ったんです。

—実際にやってみてどうでした？

小川 入所者さんは、日頃はどうしても単独行動になりがちだし、つまらなければ部屋に戻ったりするんです。けれど、回を重ねるごとに、語彙が増えて、発言の内容も回数も豊かになったし、表情も穏やかで、コミュニケーションも取れるようになってきました。仲間内で一緒に話し合うということが、目に見えてできるようになってきたことにすごく驚いています。アートカードをやっている時間だけですが、コミュニケーションを取るということが少しずつできるようになって、こうやって1つずつ積み重ねることによる変化を目の前で見ていると、すごくうれしくて。アートカードを持っていった甲斐があったなと思います。

ミテ・ハナソウ・カードの制作

制作提案は運営側だが、ミテ*ハナ1期生と一緒に作り上げた。研修の中で、他館など複数のアートカードを比較検討し、紙質やサイズ、印刷状態などを研究。ミテ*ハナさんは、「ミテ・ハナソウ」への理解を深めながら、ガイドブックに載せるいくつかのゲームの開発を行った。

アウトリーチ委員会

ミテ*ハナさん中心に進めてもらいたい企画については、〇〇委員会と名付け、有志が参加しディスカッションしている。アウトリーチ委員会もその1つ。ここでは美術館外での活動に興味のあるメンバーが集まり、館外での活動先や実現の方法などを話し合っている。実際の活動への参加・不参加は個々の事情にも関係するため問わない。また、実際に活動をして出てきた課題を見直し、ブラッシュアップするための相談の場もある。



永山 最初はどのようなことかと思ったけれど、ちゃんと対話になってきていますよね。

並木 学校でのアウトリーチの現場で、まさにそういう能動的な変化を感じます。前思春期くらいから、子どもたちは自分を表現しようとするすごく構えてしまったり、周りを気にして自己表現をセーブしたりすることが多くなります。それは成長の証でもあるんですが……そんなとき、作品を介してすごく能動的な表現を引き出せることがあります。自分が発見したことや感じたことがその場のみんなと共有され、自然に受け入れてもらえるという体験は、子どもたちの自己肯定感や仲間を認める力につながっていると実感しています。佐倉市立美術館は市民の「宝」ですし、市の美術館としてのこの取り組みが市の子どもたちに還元できていることも意義深い。自分もミテ*ハナの一員として関わっていることがとても幸せです。

美術館の外で<ミテ・ハナする>ということ

—研修を終え、学校での授業デビューをしたばかりの3期生の田口さんは、アウトリーチ活動についてはどう感じていますか？

田口 今日初めて事前授業をやらせてもらったばかりですけど、これが通常授業として身近になるといいなと感じました。最初は「全然絵に興味がない」と言っていた男の子が早速カードを選んで、「これ家に飾りたい」と言ったんですよ。カードをみた瞬間にその子が変わったことに驚きました。みんなカードを眺めながら、美術館でどの作品がみたいかを真剣に、具体的に考えていてすごいなと思いました。みんなでみて話すってということが新鮮なんですよね。発想が柔軟ですぐアイデアを思いつくし、感想も新鮮でした。

—1期生で、優都苑や学校連携などに多く参加している橋本さんは、どんなところがいいなと思っていますか？

橋本 優都苑では自分のことを覚えてないだろうと思っていた人たちが覚えてくれていて、うれしそうに手を出してくれたり、また来てねって言われたりすることがやりがいにつながっています。歩みはゆっくりなんですけど確実にしゃべることが増えていて感じます。入所者さんには、いつときでも楽しいことがあるのは心の平和につながると思うんです。閉ざされた空間にいると、自分で何かを選ぶ機会がほとんどない。カード選びで頭の中も活性化されると思うし、それまであまり話さなかった人がいろいろ話してくれるようになることもあります。楽しくて思わず「高校三年生」なんか歌っちゃう人もいます。

小川 この活動は、やってほしいと思う施設もたくさんあるはず。優都苑だけでもまだまだいろんな人がいて、ふだんは全然話さない人や部屋にこもりきりな人でも、アートカードを持って何回か行ったら目をキラキラさせてくれたりするんです。3つ、4つ発言ができたとかいうわずかな変化でも、1年続ければきっと大きく変化するはず。

並木 私は2期生なのでそもそもの質問です。こういう活動の窓口になるミテ*ハナはどうやって決めて、ほかのメンバーはどんな風に関わっていくんですか？

—優都苑は、昨年7月頃に受け入れてもらえそうという話があり、まずはコーディネーターとして小川さんに企画書も書いてもらい、私がサポートしながら進めましたよね。

小川 言い出しっぱなし、私がやる、と。あとは、活動の様子をサイボウズの掲示板*1に上げて呼びかけ、興味のある人が集まりました。

—今でこそみんなでやろうという雰囲気があるし、定期的な活動になっていますが、初めは漠然としていたと思います。その中で小川さんはどんなことを感じていましたか？

小川 当初は、不定期に施設を訪問して、カードを広げて話をしてもらおうか、簡単なゲームくらいでいいなと思っていました。でも、ミテ*ハナさんが入所者さんの話を傾聴している状態になってしまい、ゲームにならなかったんです。そこで、ちょっと大きいカードを使ったり、座席順を変えたり、マンツーマンでミテ*ハナが付かないようにしたり、小さな工夫を積み重ねるうちにみんなも慣れて、お互いの話を聞いて自分の意見も言う、という過ごし方がわかるようになったんだと思います。少しずついいから何か

ミテ*ハナさん
プロフィール

(集合写真 左から)



さん (3期生)

会社員。現代の子どもたちに少しでも楽しむ時間がもてるよう手伝えたらとミテ*ハナに応募。美術館がマインドリセットできる場として認知されることを願っている。



さん (1期生)

主婦。佐倉市立美術館の建物の美しさに惹かれ、展覧会に足を運ぶように。対話で紡ぐ美術鑑賞の企画を美術館のウェブサイトでも知りミテ*ハナに応募した。



さん (2期生)

臨床心理士、スクールカウンセラー。現在の勤務先は市外だが、居住地域へ還元をしたいという想いから、ミテ*ハナのほか、読み聞かせのボランティアなども行う。



さん (1期生)

「介護老人保健施設 ユウカリ優都苑」でパートタイマーとして働きながら、ミテ*ハナの活動を行っている。「対話による鑑賞」という言葉に惹かれてミテ*ハナに応募。

成果が出て、ボランティアの人たちも含めみんなが何かしら手応えを感じられるような機会になればいいですし、外から新しい空気が入ることで活性化されて、施設スタッフにとってもいい学習の場になるんじゃないかと思っていました。

— 橋本さんは、この活動に巻き込まれた側ですよね？

橋本 私は3カ月入院していたことがあり、“普通のこと”に飢える気持ちがわかりました。それもあって施設と高齢者とアートをつなぐ何がしたいと、この活動を知り最初に手を挙げました。施設にはいろんなボランティア活動が入りますが、どうしても単発になりがちです。それがミテ・ハナソウとの一番大きな違い。入所者さんにも、少しずつ内容がステップアップする継続的な活動であることが伝わっていると感じます。

— 2期の並木さん、3期の田口さんは、優都苑での活動に加わってみるとしたらどうですか？

田口 やってみたいです。子どもからお年寄りまで巻き込めるのはすごいことですね。(仕事の都合で) 平日の活動はちょっと難しいですけど。

小川 入所者さんの家族が大勢来る土日に開催して、ご家族に活動の様子を見てもらうのもいいかも。カードを使っていきいきと楽しく話している姿を見たら、家族だってうれしいですよ。

— 企画が始まりそうですね (笑)

並木 学校の先生方が「この子がこんな表現をするんだ」「こんな言葉が出てくるんだ」といった、子どものいつもとは違う側面に光が当たり、それを発見して喜ぶ姿を目のあたりにすると心からうれしくなります。私は学校現場での実践をより充実させる方向で自分の力を還元できたらと考えています。

活動を実現するために必要なのは？

— アウトリーチ活動は、学校や高齢者施設に留める必要はありません。これからの活動先のイメージはありますか？

橋本 児童養護施設でもやってみたいです。いろんな傷を抱えた子どもたちが自己肯定感を得ることは大事だし、1つでも楽しい思い出が残れば生きる力になると思うから。丸ごと受け入れてくれる人がいるだけで心の持ちようが全然違うはず。まずはアートカード、最終的には、美術館に来てもらいたいなあ。

— 実現するために何が必要だと思いますか？

橋本 受け入れ先を作ることはもちろん、ミテハナさんの人数を

増やさないといけませんよね。それに、自分のモチベーションをそれまで保っていられるかどうか大事なところ。1回行って終わりだと相手に失礼だから。それと走り続ける体力。

小川 需要はあるだろうし、いくらでも続けられると思うけど、先方に窓口となってくれる人が必要です。連絡係をしてくれる人がいないと成り立ちませんし、いきなり行ってやらせてくださいというのは無理なので、ツテ探しやアンテナを張ることも重要ですね。

— 並木さんは学校で何か企画するのはどうですか？

並木 中学の美術部でアートカードを使った部活動はできるかも。佐倉市外の学校ですが、カードは使っているのですか？

永山 貸出しているものは、実験的にも使ってください。

並木 使ってみます。ほかに、自分が佐倉市内の学校に勤務できたら、学校の中から美術館と連携した活動をしたいと思います。子どもたちの様子を記録し、美術館での体験を通してどういふ変化があるか、体験がどう日常に活かされるのかなどを継続的にリサーチしたい。アメリカだとそういうデータの蓄積がありますよね。その日本バージョンができれば。壮大な話ですけど。

田口 私は「xChange」という洋服の物々交換の催しにたまに手伝いに行くんですが、例えばそこでミテ・ハナソウのワークショップを開催できないかなと考えています。アートカードを使った体験的な……。都内でやれば、佐倉市のPRにもなるし、単独で人を呼ぶのはハードルが高いから何かのイベントに出させてもらうのがいいのかもしれない。

永山 そういえば、1期生の荒井さんがお祭りや「子ども食堂」※2でもミテ・ハナをしたいと言っていましたね。

橋本 いいんじゃないかな。今、思いついたんだけど、主催者に許可をもらえたら、私が参加する「オレンジカフェ」※3でアートカードを使うのもいいかなって。美術館の近くで毎月あるの。

— 仕組みはあとからついて来るし、やってみないとわからないですよね。不安なことは共有しながら、まずは個人で考えて、興味ありそうな人と一緒に最初は対象先に遊びに行くことから始めてみるのがいいかもしれませんね。

橋本 じゃあ、早速明後日アートカードを持って行ってみたいです(笑)。

— 早くも新しいアウトリーチ活動が生まれそうです。将来的な研究までいろいろアイデアがでてきましたね。みなさん今日はありがとうございました。

[構成・文：米津いつか・和田真文(ノマドプロダクション)]

※1 サイボウズの掲示板

ウェブサイト上に設けられたクローズドの掲示板。情報共有とミテハナさん同士のコミュニケーションを促進するために導入された。使い方はミテハナさん同士で教え合っている。テーマごとにスレッドが立てられ、ある日の活動とふりかえりの内容報告、自主練習や活動への参加募集告知もされる。また、研修や活動を通じて気づいた個人的な課題や提案なども掲示板で共有し、さまざまなアドバイスや励ましなどが行き交っている。

※2 子ども食堂

地域に根ざした市民活動の1つ。経済的な事情や家庭の事情によって、十分に食事が摂れない、あるいは孤食になりがちな子どもに、無料または低額で食事や团らんの場を提供している。

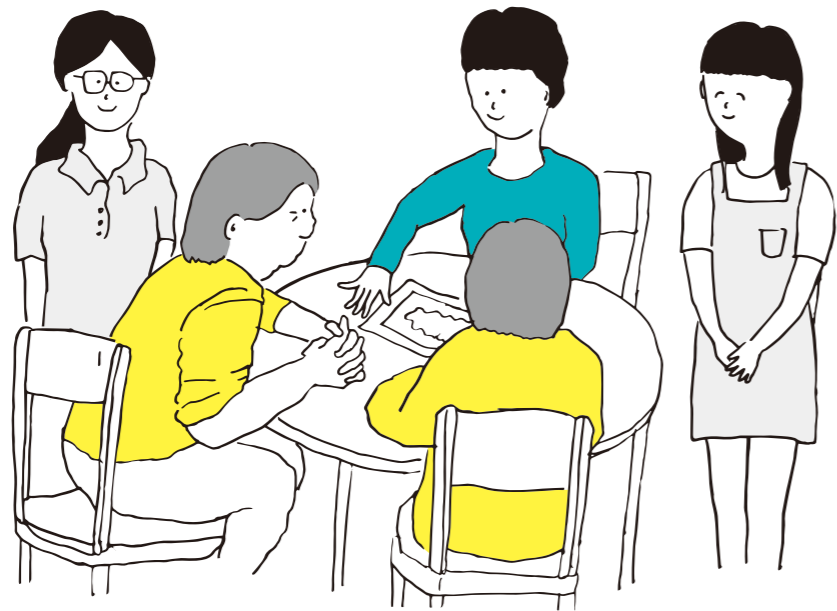
※3 オレンジカフェ

認知症とその家族を支援するために各地で自治体や市民が組織している「認知症カフェ」の通称。内容は会話と料理やゲームなどのアクティビティが多い。場所は公民館や空き民家、喫茶店とさまざま。



ミテ*ハナさんの提案で広がる

ミテ・アクティビティ ハナ



ミテ*ハナさん1期生が実践経験を積んだ2016年度から、彼らの提案による地域との活動が少しずつ増えています。彼らの提案は、「対話で紡ぐ美術鑑賞」を経験してきた実感値から、この活動の導入がふだんの暮らしや職場で感じる小さな問題により効果をもたらすのではないかと、という思いに基づくもの。その思いを運営側が汲み取り、ミテ*ハナさんが自発的に活動できるようにプロジェクトデザインすることが大切です。ここでは、ミテ*ハナさんを喚起して支える運営側の動きと、生まれてきたハミダシ活動を紹介していきます。

Design ハミダシをデザインする

ハミダシを誘発する

長期的な協働を運営していく上で起こりがちなのは、活動のマンネリ化からくるモチベーションの低下です。せっかくファシリテーションができるようになったのに、活動が遠のいてしまう人がいては残念すぎる！ミテ*ハナさんにとって、いつまでも「何かチャレンジできる魅力的なわたしの活動」であるために、一人ひとりにとって活動が「自分事」になるように研修中心に働きかけてきました。自分事になることで、「こういうこともできるのでは?」「あんなこともしてみたい」というアイデアが出てきます。それらはプロジェクトを豊かにする種であり、大事に育つように、プロジェクト全体がデザインされていたのです。(詳細はp22-23コラム参照)

アイデアを自発的な活動にする

運営側は、ミテ*ハナさんがポロポロとつぶやく「こんなことしたい」という自主活動の種を聞き取ってきました。すぐに実現できなくても、ミテ*ハナさんの活動体力や、運営側のサポート体制が整っているかなどを見つつ、活動の立ち上げのタイミングを図ってきました。その仕掛けが「テーマ別の委員会」です。アウトリーチ委員会は、ミテ*ハナソウ展が2年目に入り、展示会のブラッシュアップを考える複数の委員会と並行して立ち上げられました。みんなが必ず何かの委員会に入って、自分事としてミテ*ハナを考えるように場を設定することで、これまでバラバラと出てきていたアイデアをチームで実現するようデザインしていったのです。(詳細はp22-23コラム参照)

Activity 1 高齢者施設×継続型のミテ・ハナ

介護老人保健施設「ユウカリ優都苑」との連携プロジェクトは、ミテ・ハナソウ初の、同じ人々を対象とした「継続型」の活動です。2016年度にトライアル訪問を行い、同苑に勤務するミテ*ハナさん(小川さん)がミテ・ハナソウとアートカードについて、職員に詳細な話を伝えていました。その結果、入所者の変化が期待できること、同施設が取り組む「ダイバーショナル・セラピー」の1つの方法として導入することが可能という判断から、2017年の4月より定期的な活動が始まったのです。

ミテ*ハナさんたちは、毎回、「1人ずつサポートがつくと、傾聴の環境になり、参加者同士の話し合いが生まれやすい」「アイスブレイクを丁寧にしないと、口を開かなくなる人もいる」……と丁寧なふりかえり、人の配置からファシリテーションまで試行錯誤を重ねています。

アートカードから始まった活動は、入所者の美術館訪問にもつながり、双方に新たな気づきが生まれました。



Process ユウカリ優都苑での定期的な活動実現までのプロセス



2016年5月

step 1 アウトリーチ委員会

- ① アウトリーチ先の検討
- ② アウトリーチについての整理
- ※ 運営側が介入してファシリテーション、美術館内の調整

能動的になる活動だと思って提案



小川さんは、職員へ活動のプレゼンテーションと入所者がアートカードにふれる機会提供を継続

step 2 企画書・プログラム作成

- ① 活動内容をまとめる
- ② 実現に向けてプログラムを練る
- ※ 運営側が介入してファシリテーション、美術館内の調整



2016年7月・2017年3月
モデル実施

step 3 アウトリーチリサーチ@ユウカリ優都苑

- ① 入所者・施設職員のアートカード体験
- ② 施設職員とのふりかえり・打ち合わせ
- ③ 受け入れ条件の確認
- 職員ともふりかえりをする中で、活動の目的を共有
- 入所者の変化や、入所者の対応についての課題などを共有
- ※ 運営側のファシリテートによりプロジェクトのフレーム作成、美術館内での検討、実施の決定



2017年4月

step 4 月1回のミテ*ハナさん訪問による活動決定!

- 前回のふりかえりで挙がった点に注意して活動を展開
- 実施前に小川さんが、職員にも次回のプログラム案づくりへの意見を求める



ミテ*ハナさん
1期生
さん



2017年8・9月は美術館訪問に合わせ、苑内で美術館のように1枚の絵をみて、対話で紡ぐ鑑賞を実施



8月に優都苑の入所者が初来館。外出としても楽しんでもらえた



活動日のふりかえりでは、入所者の変化や活動目的に沿った微修正を話し合う



入所者の「美術館に行きたい!」という声から実現させた、美術館訪問



施設職員も入所者の変化を見守り、ふりかえりで情報交換をする

活動を積み重ねると変化が明らかに



ミテ＊ハナさん 1期生

さん

2018年1月末現在

Schedule 2017年度 ユーカリ優都苑との連携活動

4/8(土) 佐倉市立美術館 メンバーミーティング	4/19(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動	5/17(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動	6/21(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動	7/19(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動	8/9(水) 佐倉市立美術館 柴宮忠徳展の鑑賞
8/16(水) ユーカリ優都苑 プロジェクター投影による美術鑑賞	9/13(水) 佐倉市立美術館 柴宮忠徳展の鑑賞	9/15(金) 佐倉市立美術館 柴宮忠徳展の鑑賞	9/20(水) ユーカリ優都苑 プロジェクター投影による美術鑑賞	10/4(水)午前 ユーカリ優都苑 施設職員と年度後半の活動についてのミーティング	10/4(水)午後 ミテ＊ハナさん在住マンション多目的室 メンバーミーティング+アートカード練習
10/25(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動	11/15(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動	12/20(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動	1/17(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動	2/21(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動	3/21(水) ユーカリ優都苑 アートカードを使った活動

評価Note アートの社会包摂性を明らかにする活動

「ミテ・ハナソウ・プロジェクト」事業評価分析から



事業評価
コーディネーター
熊谷 薫さん

優都苑での活動は、ミテ・ハナソウがミテ＊ハナさんの自主性を育てていった結果、主体的に企画されたアウトリーチ活動です。そのため、とても重要な成果だと言えるでしょう。この活動に関わったのは、ミテ＊ハナさんに加え、施設の入所者である高齢者の方々、及び職員の方たちですが、それぞれにやりがいや喜びを感じたようです。職員の方たちからは、活動を施設の職員の研修に役立てたいとの声もあり、実現すれば美術館外に美術館活動が入り込む1つのケースとなる可能性があります。ミテ＊ハナさん自身も、この活動を通してより主体的になり、大きく成長したのではないのでしょうか。また、職員の方たちからは、利用者の皆さんの笑顔を引き出してくれたことがありがたく、今後も継続してほしいとの声もありました。ミテ・ハナソウの活動が美術館を飛び出し地域活動へと変化し、さらには社会包摂機能※1を持っていることが明らかになりつつあります。

※1: 社会包摂性の「包摂」とは、社会的弱者やマイノリティーを含め多様な人が、社会の一員として受け入れられている状態のこと。また、その多様な人たちが、制度や機会や場から排除されず、経済的、社会的、文化的生活を享受できる状態も指します。

詳しくはP.78へ

Activity 2 ミテ・ハナソウ・カイ

ミテ・ハナソウ展(2015年)後、手応えを感じたミテ＊ハナさんたち。年間を通じて「ミテ・ハナせる場」をつくろうと考えたのが、来館者を対象にした毎月1回の鑑賞会です。学校連携で「ミテ・ハナした」子どもが親と一緒に来ることも。すでにミテ＊ハナさんのみで運営し、平日の活動に参加しづらい人も「作品は自由を楽しめることをもっと広めたい」と、積極的に参加している活動です。

作品が展覧会ごとにより変わり、参加者は年代を問わず、また、参加人数も日によってまちまちです。いわば、毎回違う対応を求められる修行の場。ふりかえりでは、ファシリテーションとともに来館者への配慮など細かな気づきをシェアし、よりよい運営を考えています。



絵をみて話す楽しさ、広く伝えたい

Schedule 2016～17年度 ミテ・ハナソウ・カイの活動 参加人数

2016年度

4/24(日) 収蔵作品展 佐倉ゆかりの作家と工芸 11:00～14:00 9人	5/22(日) 収蔵作品展 佐倉ゆかりの作家と工芸 11:00～14:00 8人	6/26(日) 収蔵作品展 深沢幸雄一銅版画の魅力 11:00～14:00 6人	8/28(日) 収蔵作品展 -memories- 11:00～14:00 5人	9/25(日) 収蔵作品展 -memories- 11:00～14:00 8人	3/26(日) カオスモス5一粒の砂に世界を見るように 11:00～14:00 7人
---	---	---	--	--	--

2017年度

4/23(日) 収蔵作品展 浅井忠と弟子たち 11:00～14:00 8人	5/28(日) 収蔵作品展 小林ドンゲ 初期版画を中心として 11:00～14:00 12人	6/25(日) 収蔵作品展 小林ドンゲ 初期版画を中心として 11:00～14:00 3人	9/24(日) 柴宮忠徳展 11:00～14:00 8人	11/26(日) 自転車の世紀 11:00～14:00 12人	1/28(日) 根付展 11:00～14:00 13人
--	---	--	------------------------------------	---------------------------------------	-----------------------------------

3/25(日)
佐倉・城下町400年記念事業総合展示「城と町と人と」
11:00～14:00 未定

2018年1月末現在
※2016年7月、2017年8月は「ミテ・ハナソウ展」のため未実施
※2016年10月～2017年3月は改修工事による閉館のため未実施
※2017年10月、2018年2月は展示替えのため未実施
※ほか、2017年3月に3期生募集に向けての体験会として、ミテ・ハナソウ・カイを2回実施



ミテ＊ハナさん 3期生

さん

What else can we find?



作品解説ツアーを期待する参加者もいるため、趣旨は最初にしっかり伝える



静かに作品をみたい来館者に配慮するため、活動中は常にサインボードを掲げる



大人に比べ、子どもからは意見が比較の出やすい。意見が出るまで「待つ」ことも大切

Activity 3 ミテ*ハナさん、そのほかの活動

ミテ*ハナさんのハミダシ活動は、まだまだあります。不定期ですが、ミテ*ハナさんからの提案で地域の子ども会などに出かけて行き、アートカードによる美術鑑賞を楽しむ企画はその例です。また、外部からの依頼で出向く活動もあります。例えば、小学校の文化祭で行うアートカードによる美術鑑賞です。今後は、毎年開催される市内のお祭りやクラフトフェア、こども食堂での出前鑑賞企画もアイデアが挙がっています。

また、ミテ*ハナソウの活動に興味を持って来館する団体も出てきました。ここでもミテ*ハナさんが、ニーズや時間に合わせ、アートカードを使ったアイスブレイクやグループ鑑賞などを組み合わせたプログラムを企画し、運営までを引き受けています。



船橋市郷土資料館が呼びかけたバスツアーの参加者、子ども8名、大人9名、同館職員2名が来館（2017年）



船橋からの団体対応では、大人と子どもを別グループにして、ミテ*ハナソウ・カイを実施（2017年）



ユーカリが丘7丁目子ども会へのアウトリーチ活動より。会場の集会所で進行の確認中（2016年）



ミテ*ハナさんの発案で実施した子ども会での活動は、アートカードとミニVTSによる美術鑑賞（2016年）

Schedule 2016~17年度 その他のミテ*ハナさんたちの活動

2016年度				2017年度	
7/26 (火)	8/27 (土)	10/30 (日)	11/5 (土)	8/9 (水)	11/11 (土)
美術館訪問・ 問野台わんぱく 子供会	美術館訪問・ 市原市立加茂公民館 現代アート入門講座 (団体対応)	アウトリーチ活動・ ユーカリが丘7丁目 子ども会	アウトリーチ活動・ しろがねぶんかさい	美術館訪問・ 船橋市郷土資料館 (団体対応)	アウトリーチ活動・ しろがねぶんかさい

2018年1月末現在

評価Note 仲間がいるから成長できる

「ミテ*ハナソウ・プロジェクト」事業評価分析から



事業評価
コーディネーター
熊谷 薫さん

ミテ*ハナソウ・プロジェクトを支えるミテ*ハナさんたちは、美術館という場で、仲間とともに活動するからこそ、どんどん自発的に活動するようになっていきます。まずは自分の話を言いたい段階から、人の話を聞くのが楽しくなり、さらにはそこに感動を見出すようになる。そして、徐々に対話で紡ぐ美術鑑賞のファシリテーション能力を身につける段階へ成長するようです。こうした活動は日常生活をさらに生き生きしたものにし、ミテ*ハナさんの周囲へと伝わっていきます。こうしたボランティア活動は、楽しんで活動する人がいること、そしてそれがどんどん周囲の人へ伝わっていくことにより、活動が拡大し、市民生活を豊かなものにしていく効果があるといえるでしょう。

詳しくはP.72へ



COLUMN ミテ*ハナさんとの日々から

ミテ*ハナさんがのびのびと活躍する舞台の裏でその活動をサポートすべく奔走するコーディネーター。その役割や仕事、ミテ*ハナさんとの関わり方をコーディネーターの近藤乃梨子さんに綴ってもらいました。

全体をとらえる大きな眼と、細部に向ける眼差しと

このプロジェクトでの私の役割は、ミテ*ハナさんと美術館、学校など、関わるさまざまな人の中に入り、全体と細部に目配りしつつ、場を創っていくこと。具体的な仕事は、各プログラムの準備、連絡・調整、研修準備・出欠管理、ブログ更新、写真整理や活動記録の作成、シフト作成など多岐にわたります。

例えば学校連携事業は、先生とのやりとりから始まります。先生には、授業で使用する教室手配やクラスの班分けなどの具体的な準備を依頼します。ミテ*ハナさんには、子どもたちの様子、班の編成、ルートなどプログラム内容を共有する資料を作成し、作品選びなどを進めてもらう。ときには打ち合わせをお願いすることも。当日の朝はミーティングで疑問や不安を解消する時間を設ける……このように丁寧な準備で、子どもたちや先生、ミテ*ハナさんが安心して当日を迎えられると思っています。プログラム中、子どもたちと直接関わる部分はミテ*ハナさんに任せ、私は時間管理と全体の見守り役です。終了後のふりかえりでは、全体や各グループで起きたことを、よかったことも改善点も全員で共有し、次へつなげるよう努めます。

ふりかえりでは厳しいことも言います。それは、ミテ*ハナさん自身で課題や目標を見つけることがモチベーションになると思うから。今は学校授業での司会など、ミテ*ハナさんの役割を増量中です。新たな役割に躊躇する人がいれば、背中を押してみます。そのあたりの力加減が難しいところですが……対話型鑑賞に終わりが無いのと同じように、ミテ*ハナさんたちの「ミテ*ハナ力」をさらに深く広げていく。そうサポートするのが私の楽しみです。

日々の仕事の中で大切にしているのは、役割の違いはあるけれど「ミテ*ハナさんとともに活動を創る」気持ちを持ち続けること。佐倉市のことは私より詳しい彼らに尋ね、プログラムのアイデアも求めて、一緒に考えます。私が活動の下地を作り、そこにミテ*ハナさんが色付けをしていく、そんなイメージです。

気になっているのは、活動お休み中のミテ*ハナさんも気兼ねなく立ち寄れる場など、復帰しやすい環境を整えられているか？ということ。ミテ*ハナさんが自主活動やミーティングに自由に集える拠点が美術館にあるのが理想かな……。個人的には、変化し続けるプロジェクトと一人ひとりの気持ちがうまく調和できるよう、ミテ*ハナさんとごっくばらんに話す時間をもっと作りたいなと思っています。

[文:近藤乃梨子]

ミテ*ハナさんと一緒に
成長中です



近藤 乃梨子 (ARDA)
Kondo Noriko

ミテ*ハナソウ・プロジェクト
コーディネーター

ミテ＊ハナさん × 美術館 × 佐倉市が生み出すミライ

プロジェクト始動から5年。

ミテ＊ハナソウは、市民を巻き込んで、

年間1500人の対話参加者を生み、さらに変化を続けています。

ここでは、事業評価コーディネーターの熊谷 薫さんをモデレーターに迎え、

仕掛け人の2人とともに、ミテ＊ハナさんの成長をふりかえります。

また、そこから見えてきた、今後のプロジェクトの可能性について

ディスカッションしてもらいました。

三ツ木 紀英
(ARDA代表理事)



永山 智子
(佐倉市立美術館)



ファシリテーションが
キモなんですね

モデレーター
熊谷 薫
(事業評価コーディネーター)



楽しさと厳しさが同居する大人の部活

熊谷 まず、ミテ＊ハナさんとの4年間を振り返るところから始めたいと思います。この間のミテ＊ハナさんの変化には、さまざまなレイヤーがあると思います。特に心理的にどのような変化があったと思われますか？

三ツ木 1期生にすごく意欲のある25人が来てくれた、これが互いに学び合うことの原動力になったようです。2年目には「ミテ＊ハナソウ展（以下、ミテ＊ハナ展）」を、自分たちで工夫を重ねて運営する機会があった。この展覧会によって、団結力ができて自信もつけたと思います。楽しさも実感して。そういう前向きな1期生を軸に、2、3期生が周りを固めています。

永山 実は私は、「楽しい」というところは、それほど予想していなかったのです。でも、ミテ＊ハナさんの熱意がすごくて、それはとにかく自分が楽しくできるからなんだなって。ミテ＊ハナ展に担当日以外にも、楽しく来てくれる。そして、「研究の間」が、ミテ＊ハナさんの居場所になったのだと感じます。

熊谷 楽しいというのは、一番大事なことですよね。さらに「居場所感」みたいなものもできた。これはミテ＊ハナさんへの影響が大きいでしょうね。彼らの活動は自主練習も頻繁で、大人の部活みたいです。研修もしっかりしていますよね。

三ツ木 結構、体育会系なんです。自主練して「ここまでできた！」とミテ＊ハナさんは思っていたのに、研修では三ツ木からダメ出しされる。凹む時もあるようですが、お互いに慰め合ったり、また乗り越えて行くという青春ドラマのような……。ボランティアだから、ここまでできればいいとしてしまうとそこまでしかできない。同志として、ミテ＊ハナさんの力を信じています。そのうち私よりも上手い人が出てくるだろうと。

永山 三ツ木さんは、研修での肩書は講師ですが、先生や指導者ではなく、ファシリテーターの位置にいて、自分自身も成長している。ミテ＊ハナさんたちは最初、「こういうときは、どうしたらいいですか？」と尋ねていました。でも三ツ木さんは、「どう思うの？」と返す。「私だったらこうやるよ」とすぐに返さない。そう返すと、自分で考える幅がなくなり、三ツ木さん

の言うことを聞くだけになってしまいます。ふりかえりも徐々にそのパターンになりました。

ファシリテーションが引き出すミテ＊ハナカ

熊谷 鑑賞だけではなく、日々の繰り返しの中で「自分はどう考えるの？」ということが続けるのですね。

永山 実際に現場で子どもたちに関わるのはミテ＊ハナさんで、私や三ツ木さんは何もできません。その場で起きることに対して、ミテ＊ハナさんたちが同じ方向を向いていないと、その場での対処ができない。だから、彼らの中に「考える態度」をつくっていくことが、ミテ＊ハナさんの研修だと思っています。

三ツ木 その態度をつくっていくために、活動の目的がどういうことか、優先すること、大事にしなくてはならないのは何か、みんなて常に確認することを意識して行っています。これは、ミテ＊ハナさんの自主的な活動に対しても同じですね。

熊谷 プログラムと運営の仕方が、「対話で紡ぐ」方向になっている、プロジェクト全体がそうファシリテートされている。それが5年でこれだけ成果を出せた一因でしょうか？

三ツ木 そうなるようデザインはしているつもりですが、それだけでも上手くいかないと思っています。永山さんが「よい聴き手」であるというのは大きいですね。「どうでしょう？」「どうしてこうなのでしょう？」と尋ね、相手の話を聴いて、納得できたらそうしましょうと進めるんですね。上下関係ができやすい学芸員とボランティアの関係がフラットになって、むしろ永山さんが心配だからみんなで助けようという感じすらある！

永山 私が頼りないのでボランティアが育つ……。とにかくボランティアさんと美術館の関係をフラットにしていきたいという思いはすごくあります。まずはみんなの考えを聴く、そこから話し合っ、何が大事なことを考えるというのは、「対話で紡ぐ美術鑑賞」のいいなと思っています。私自身もちろん、この態度を持っていたいと思っています。

聴く力が変えること

熊谷 それはとても大事で、先進的ですね。聴く重要性が出てきましたが、聴く力や考えて話す力も含めたコミュニケーション力について、ミテ＊ハナさんは元から優秀だったのですか？

永山 私はどんどん変わってきていると思います。美術に興味がある人、知識が豊かな人は、それをしゃべらずに聴く段階を1つ越えなくてははいけません。そこから人の話を聴くことが面白くなる段階へ。あの人、絶対しゃべっちゃうよなと思っていた人が聴くに徹する、そして聴くことが面白くなっているのがわかる。そこでまず、変わることができるんだと思いました。そして、ある時期からは人の意見を聴くと、自分が感動する。この段階も過ぎないとダメですね。

三ツ木 その次に感動で舞い上がりず冷静に受け止めて、言葉を紡がなくてははいけません。そうしていくと自然に、大きな声の正しそうな意見も、間違っている意見も、どれも発見のある大事な視点があることが見えてきます。また一見、対立しているように感じられた意見に共通点が見えてくることも。それって美術鑑賞だけではなく、社会で共生していくためにすごく大事なことですよね。

熊谷 今出てきたことは、人にとっての根本的に大事な聴く力ですね。こういう場があるから、きちんと聴く人になって考えていく。このようなプロジェクトを、佐倉市立美術館で行う価値について、改めてお聞かせください。

三ツ木 ミテ＊ハナさんにとって、ミテ＊ハナ展のような、自分たちが活躍する舞台があるというのは、大きな魅力だと思います。それがあと押しして「美術館の」ボランティアとしてのプライドや責任感も生まれてきています。このように、鑑賞者の立場だった人がこれだけ主体的に参加する場として機能しているのは、美術館としても少数派では。

永山 現代のホワイトキューブの美術館では、作品は文脈から解放されてその中に置かれ、観客が自由に作品そのものをみて考える場のはずです。もともと観客が参加する装置としてつくられていると思うんです。

熊谷 美術館は神殿ではなく、フラットな場だと、ミテ＊ハナさんやミテ＊ハナ展を通じて観客へ伝わっているのでしょうか？

三ツ木 道のりはまだ半ばだと思います。1年目には展示室での対話を聞いて、こんなに勝手なことを話しているのは作家に失礼だと怒り出したお客様もいらっしゃいました。5年たって少しずつミテ＊ハナソウが浸透してきているとは思っています。

永山 美術館に期待するものの違いですよね。感動した作品について、人にとにかく言われたくないという気持ちはわかりますが、それを許さないというのはおかしいかと。美術館ではそれは自由ですから。ただ、美術館がフラットな場だと言わないと、人々はそうは思わないんだということに、改めて気づかされました。

三ツ木 このような美術館と鑑賞者のギャップを埋める可能性があるのが、ミテ＊ハナソウプロジェクトです。彼らの鑑賞力が少しずつついてきていることに可能性を感じています。

ミテ＊ハナカアップが学芸員の意識を変える!?

永山 ミテ＊ハナさんの、対話のファシリテート技術だけではなく、作品をみる力が上がっていることは実感しています。ミテ＊ハナさんの発見や解釈を聞いて、学芸員がきちんと作品をみていなかったことに気づくこともあります。学芸員は作家の生涯や画歴などから作品に入ることも多いですから。

熊谷 そのあたりの実感を、永山さんは直接感じていらっしゃいますが、ほかの学芸員さんはいかがですか？

永山 プロジェクトを見てくれている人は、同じようなことを言っていますね。うちの収蔵作品になったら、作家は幸せだとも。穴のあくほど見つめられ、語られて。ただ、それに見合う収蔵作品だろうかという話もします。展示も収蔵も、どのような作品を選ぶかということは、すごく責任があるので。なにしろ地方の小さな美術館ですから、収集方針や収蔵品の限界もありまして……。すぐに外から見える変化はないかもしれませんが。



熊谷 地方の館といえば、市民ギャラリーとほかの企画展に来る人をどうつなぐかというお話が出ていました。

永山 今後の課題ですが、市民の作品でミテ・ハナソウ・カイができたらすごいなと思っています。ただ、市民展などの場合、作家が対話を受け入れてくれるかという問題もあります。

三ツ木 実は、作家は結構喜ぶんですよ。作品画像を貸してもらった作家に、こんな視点や解釈が出たと伝えると、とても喜びます。自分の作品はそういう意味も生み出しているんだと。作家は自分の作品を再発見できるのだと思います。

永山 確かにそうですね。

三ツ木 ミテ・ハナさんから、市民の作品で「ミテ・ハナ」をやりたいという声は挙がっていましたし、やってみたいですね。

永山 もし、貸館企画で作家たちも参加して、フラットにミテ・ハナソウをやる動きが出てきたら、美術館の市民ギャラリーに別の意味が加わると思います。

三ツ木 市民ギャラリーとほかの展示会の断絶をうまくつなぐブリッジに、ミテ・ハナさんはなれるかもしれません。

見えてきた課題

熊谷 ほかの美術館事業との連携など、運営的な課題も見えてきました。今後の話も出ましたので、今までの活動から見えてきた、プロジェクトの課題や今後の方向などを聞かせてください。

三ツ木 いくつかあるのですが、当初から永山さんがいなくても運営できる体制をつくるのが、大きなミッションだと思っています。その準備をしてきました。幸い今でも永山さんはいらっしゃいますが、活動が活発になったため永山さんが全部の現場にいられない規模になってきています。

永山 私が参加せずにミテ・ハナさんだけで企画・運営をして、かつ、美術館の事業として成立する枠を作ることが必要だと感じています。学校連携事業も全校実施に広げたいと

思っていますが、すでに毎週、ミテ・ハナソウの活動が入っている状況です。ミテ・ハナさんたちもやりたい企画がいろいろとありそうですし。

三ツ木 学校連携では、プログラムや運営の方法のフレームを作り、ミテ・ハナさんの中からそれらを適切に運営するコーディネーターを育ててきました。彼らだけで現場を動かせるようになりつつあります。アウトリーチも優都苑の活動をミテ・ハナさんと1年かけてやってくるなかで、大体の活動のフレームができてきています。それでも全校実施となると、マンパワー不足は否めません。

熊谷 なるほど。優都苑といえば、職員研修の話も出ていますね。これはもう、ボランティアではなく仕事の域に入ってくるのではないですか？

永山 やはりそう考えますか。

三ツ木 職員研修もそうですが、今の月1回の活動をもっと広くやってほしいとの要望もあります。ただ、この活動はコーディネーターの準備も大変で。今は文化庁の助成金で活動費を賄っていますが、助成金がないと活動できなくなるのは課題ではないかと。トライアル期間は無償でも、今後はせめて有償スタッフであるコーディネーターが動く費用だけでも施設から出してもらおうように交渉すべきかと。施設も利用者からのアクティビティ・フィーなどがあり、予算はゼロではありません。お互いに持続可能な無理のないラインを、見つけていくことも1つの道だと思います。

熊谷 ミテ・ハナさんが自覚を持って気持ちよく活動を続ける環境づくりのためにも、運転資金の確保は必要でしょうね。このプロジェクトは、そのような段階に入りつつあるのかなと思います。

ミテ・ハナさん×作家、そして佐倉の可能性とは？

熊谷 ほかにも見えてきたことがあると思いますが。

三ツ木 どんなプログラムも常に時流や目的に沿って、そのときの最

善を考えるための見直しが必要ですね。学校連携も学習指導要領が変われば、その時代にあったものに常に更新していかないと。それは、市民向けのプログラムも同じです。

熊谷 ミテ・ハナさんもそれに対応しなくてはならない、ということですね。もともと彼らには、三ツ木さんと同じレベルのファシリテーターになってほしいとおっしゃっていました。

三ツ木 ファシリテータースキルはもちろん、プログラムを見直し、自分たちで新しいことを考えたりできるようにもなってほしいなど。そのためには、アートへの理解をもっと深める必要があると思っています。今はまだアートの楽しいとか、きれいという部分しか伝えられてないのですよね。アートの持つ怖さや痛みを伴うような部分も含めて、理解できるという部分。佐倉市立美術館なら作家と一緒に考えてつくるプロジェクトもできるでしょう。生の作家の考えや制作プロセスを体験してから作品をみれば、ミテ・ハナさんの考え方や活動は今までとは違う拡がりを見せるのではないかと。これは永山さんがされてきたワークショップとのギャップを埋める活動にもなるかと……。

永山 このプロジェクトは、大きくは以前やっていたワークショップと同じ方向を向いている、と感じられるようになってきました。当時考えていたのは、「まちや人と美術や美術館とのかかわりを考える」ということでした。作家の宮前正樹さんが、市民ボランティアと一緒にまちを歩いてワークショップをつくることを企画して、その後もその形を続けてきました。毎年興味のある人を募集してつくっていったのです。今、これだけフラットに対話をする訓練をしたミテ・ハナさんたちが作家と一緒に考え、作家の思考プロセスやリサーチに関わったら、どんなことが起こるのか。ミテ・ハナさん一人ひとりの成長にもなるだろうし、「対話で紡ぐ美術鑑賞」が生み出す新しい価値をみつける可能性もあるかもしれません。

三ツ木 SEA(Social Engaged Art)のように社会や地域の断絶や問題にアートが介入することで、市民とともに解決策をさまざまな形で探るような流れも活発になっています。宮前さんとやってきたようなことを、ミテ・ハナさんたちが作家と一緒に、展開していくような可能性もあると思うんです。ミテ・ハナさんの存在も宝ですが、佐倉には歴史や国立歴史民俗博物館のような魅力的な資源もあります。佐倉という立地も活かせると思います。

永山 確かに、1990年代にここでやってきた活動とミテ・ハナの流れにつながっていくと、面白いかもしれません。そして、佐倉の立地といえば、最近気になる東京オリンピックやパラリンピックについても、少し離れた佐倉だからこそ、東京とは違った角度で提案していけることがかもしれませんね。

熊谷 今後のミテ・ハナソウは、作家と新しい動きを創る、美術館をコアに地域へ積極的に関わっていくような可能性も見えてきました。今日はミテ・ハナさんの成長から、美術館が市民と活動するためのキーワードを、そしてプロジェクトの将来展望もうかがえたと思います。どうもありがとうございました。

評価Note

「ミテ・ハナソウ・プロジェクト」
事業評価分析から



事業評価
コーディネーター
熊谷 薫さん

仲間×場で個人が変わり、美術館が変化する

今回の事業評価では、ミテ・ハナさんたちの成長が最も重要な事業の変化を生み出していると仮定し、さまざまな調査をしてきました。当初ヒアリングを通して、ミテ・ハナさん個人が成長し、そこからミテ・ハナさんの仲間たちのコミュニティが変化し、さらに社会へその活動が伝播していくことで、美術や美術館が持つ力が伝わるだろうと想定していました。ところが、よくよく話を聞いてみると、よい仲間がいて美術館という場に集まることができるとい環境があるからこそ、個人が自主的に動き、変化していくことがわかりました。美術作品の鑑賞をきっかけに生まれるコミュニケーションがよい場をつくり、美術館が従来の役割以上の機能を担うようになる。そこからさまざまな活動が派生し、個人の自信につながり、さらに自主的な活動が増える。そうした一連の流れが、より豊かな市民社会の醸成につながっている。これは、ミテ・ハナ展での子どものリピート率の高さ、学校連携事業での先生の気づきや子どもの楽しさ、ユウカリ優都苑での活動の広がりなどから明らかになりつつあるといえるでしょう。

詳しくはP.80へ

ミテ・ハナさんとアーティストで
面白いことが起こせそう



Section 1

対話が生ま出すもの

—ミテ・ハナソウ・プロジェクトの評価について

評価の趣旨について

今回の「対話による美術鑑賞プロジェクト ミテ・ハナソウ（以下、ミテ・ハナソウ・プロジェクト）」の事業評価は、事業を実施する佐倉市立美術館及びNPO法人芸術資源開発機構（ARDA）から事業のミッションや事業内容について、なるべく丁寧にヒアリングや調査を実施し、平成29年度の活動に伴走するような形で実施しました。

事業評価は事業を運営する側自ら実施する自己評価や外部専門家による外部評価が一般的ですが、今回は専門家と事業実施主体がともに何を評価すべきかを対話しながら検討しました。

今回用いた評価は伴走型評価や発展型評価といえるものであり、すでにある評価軸を事業にあてはめるのではなく、事業運営者と評価者がともに、事業の価値を掘り起こし、事業に寄り添う形で実施しました。こうした手法は事業の個性に即した考察や分析を可能にし、事業運営者が事業自体について理解を深めることにつながる、事業運営へのフィードバックを即時に得られることが特徴です。

ロジックモデル

具体的な事業評価の手法としては、社会的インパクト評価などに用いられる、事業の変化のストーリーを明らかにする「ロジックモデル」を用い、事業の長期的な変化が生ま出す価値について整理しました（図3）。社会的インパクト評価は現在内閣府が推進する事業評価の1つの手法であり、「短期・長期的の変化を含め、事業や活動の結果として生じた社会的・環境的な変化、便益、学びその他効果を定量的・定性的に把握し、事業や活動について価値判断を加えること」です。社会的インパクト評価を行う目的は、大きく2つ、「事業や活動の利害関係者に対する説明責任を果たすこと」及び「事業や活動における学び・改善に活用すること」が挙げられます※1。

このロジックモデルは、佐倉市立美術館において、本事業担当者のみならず、美術館学芸員、美術館館長なども参加して検討・作成しました。

今回、ミテ・ハナソウ・プロジェクトがどのような価値を生み出しているかを理解するために、ロジックモデルを作成しました。ここでは、事業を実施したという事実や、その内容・規模を裏付けるものであり、事業に直接伴って生ま出される物事を「アウトプット」と呼びます。「アウトプット」には、例えば来場者数、実施回数など、単純に数値化できるものも多くあります。そして、「アウトプット」の効果として、

事業に関わる人や地域社会に起きる気持ち、行動、状態などの変化を「アウトカム」と呼びます。「アウトカム」は、短期・中間・最終など何段階かに分けることができます。これらは単純な数値ではとらえづらく、アンケートやヒアリング、場合によっては大規模統計の経年比較などによって明らかにしていきます。

文化芸術事業に関しては、短期的な「アウトプット」以上に、関わる人の変化や、地域社会の変化を見ていくことが重要なため、こうした長期的な視座を持つことが、事業設計の戦略などにも有効だといえるでしょう。

ロジックモデルでは、ステークホルダーといわれる事業の利害関係者をまずは網羅分類し、それぞれがどのように変化するかを想定しています。ステークホルダーには実際の事業を運営する人、事業の対象となる受益者、主たる事業である佐倉市立美術館での対話で紡ぐ美術鑑賞から派生したアウトリーチ活動に参加する人などがいます。今回の調査ではその中でも特に重要なステークホルダーを抽出し実施しました（図1）。

多様なステークホルダーを分析することで、事業全体の目標の達成度が複合的に明らかになることを想定し調査を実施しました。

調査方法

具体的な調査方法としては、アンケートやヒアリング（インタビュー、座談会形式）を実施しました（図2）。今回はステークホルダーとなる、ミテ・ハナソウ展、学校連携事業の先生と児童・生徒、美術館来場者（ミテ・ハナソウ展、その他）、ユーカーリ優都苑スタッフ、NPO法人ARDAスタッフと美術館学芸員に対して調査を実施しました。収集したデータは、ロジックモデルに即して分析し、初期に作成したロジックモデルの検証と修正にも役立てました。

テキスト分析はインタビューや座談会に関しては下記が対象です。

- ・学校連携事業、下志津小学校先生 2名
- ・ミテ・ハナソウ個人別インタビュー 5名
- ・ミテ・ハナソウ座談会
- ・佐倉市立美術館 永山智子、NPO法人ARDA 三ツ木紀英

※1：出典=社会的インパクト評価イニシアチブHPより <http://www.impactmeasurement.jp/about/>

図1 ステークホルダー（利害関係者）関係図



図2 データ分析に用いたアンケート

ミテ・ハナソウ展	ミテ・ハナソウ展2017 大人アンケート集計 (n=207) ミテ・ハナソウ展2017 子どもアンケート集計 (n=204) ミテ・ハナソウ展2016 大人アンケート集計 (n=250) ミテ・ハナソウ展2016 子どもアンケート集計 (n=183) ミテ・ハナソウ展 大人アンケート集計 (n=209) ミテ・ハナソウ展 子どもアンケート集計 (n=200) 柴宮忠徳展+ミテ・ハナソウ展2017(一般アンケート) (n=52※2)
学校連携	2017年 先生アンケート (n=17) 2017年 子どもアンケート (n=176 ※3)
月例ミテ・ハナソウ・カイ	2017年4～9月 大人アンケート (n=27) 2017年4～9月 子どもアンケート (n=4※4)
ミテ・ハナ事後	ミテ・ハナ1期生14名、2期生6名、3期生9名 (n=29)

※2：ミテ・ハナソウ展への回答が無回答の者を除いた数字 ※3：ただし事前・事後の回答88/88 ※4：集計数がごく少ないため分析は割愛



Section 2 評価のためのロジックモデル

ロジックモデルにおける「短期、中間、最終アウトカム」の達成時期について
 ステークホルダーごとにアウトカムが明らかになる時期は異なるが、おおむね短期は1年くらいまで、中間は3年、最終は5年以上の期間を想定している。

図3

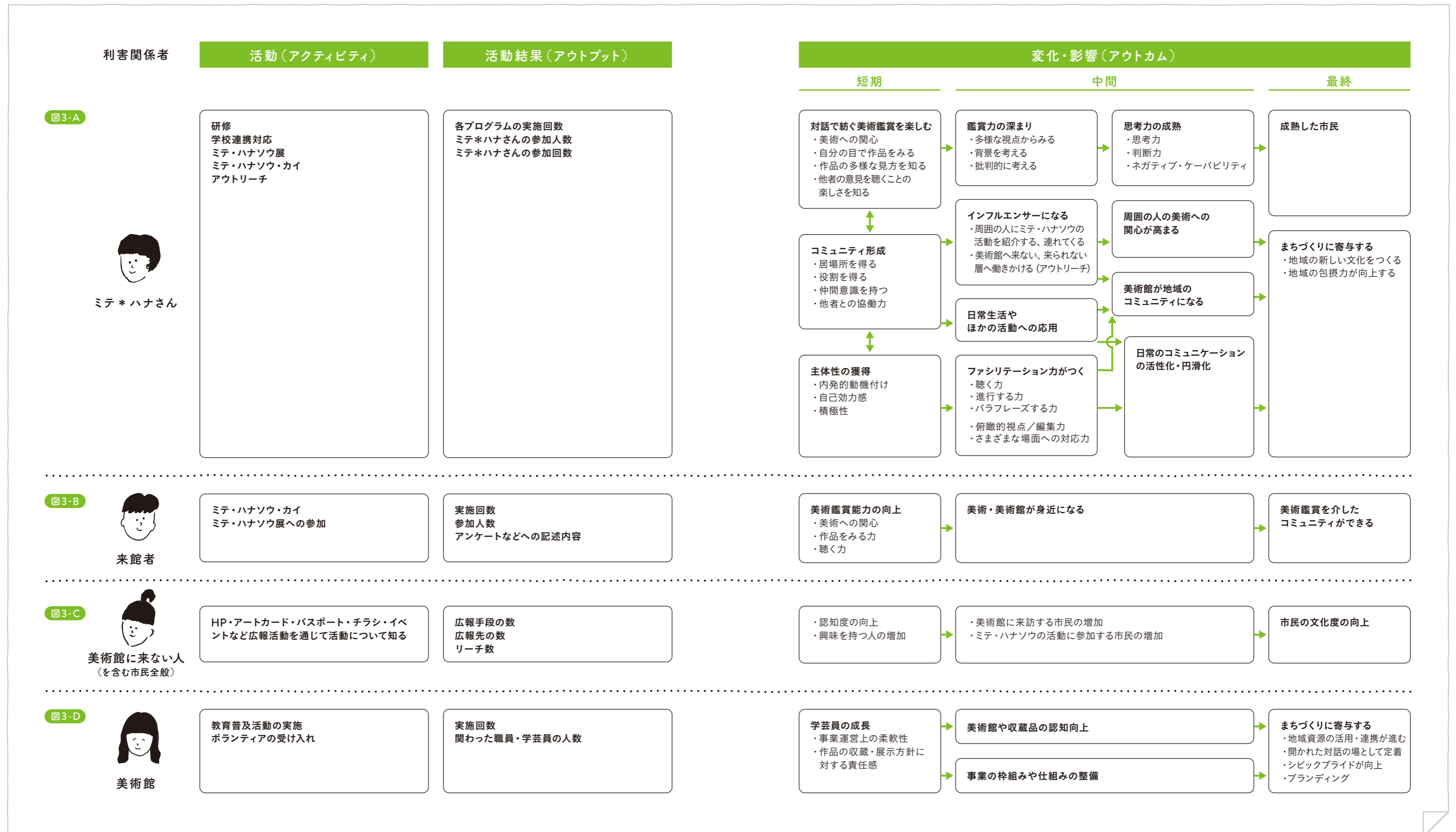
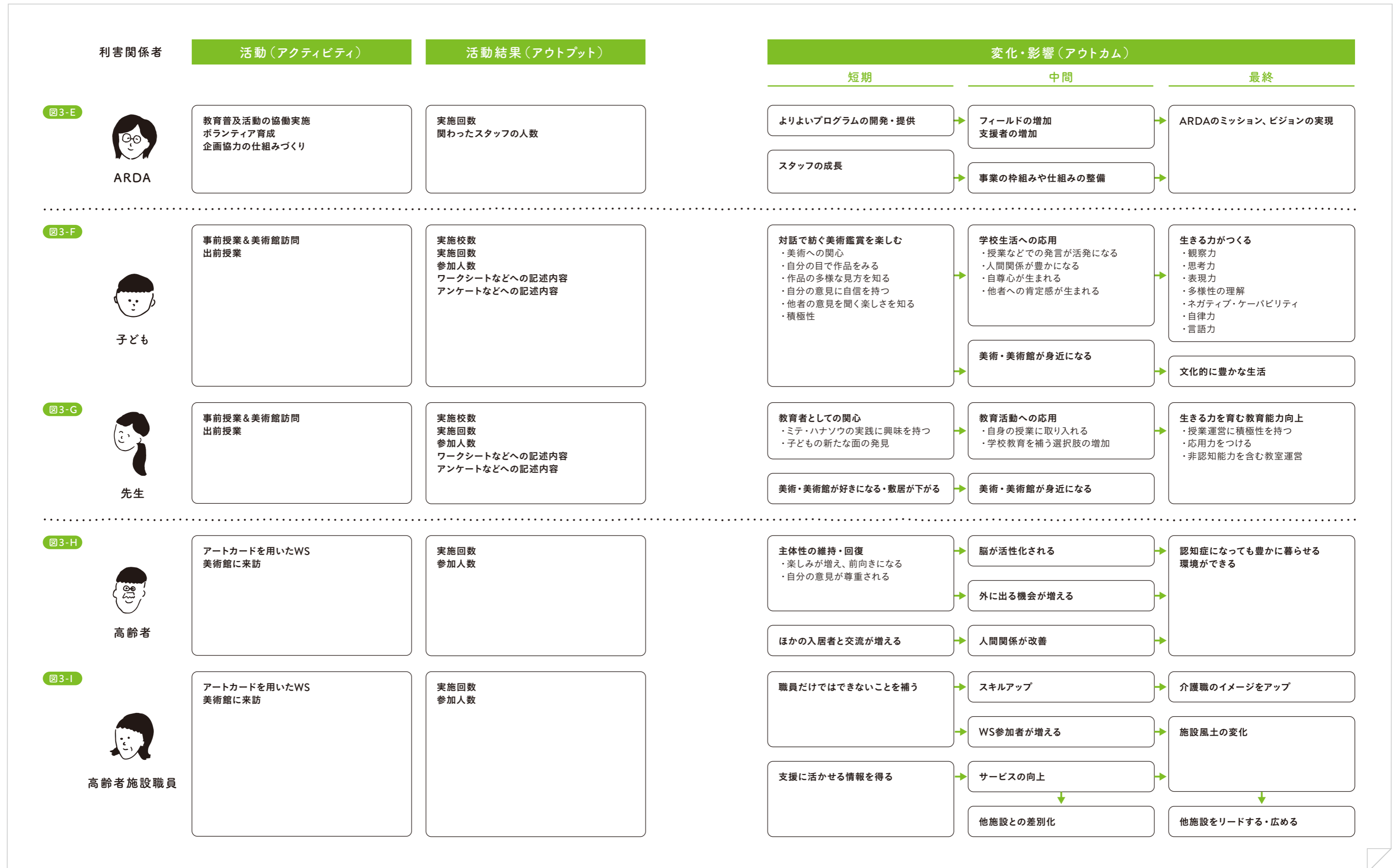


図3 (P68-69の続き)



Section 3 評価——ステークホルダー別分析

1. ミテ*ハナさん

今回の事業評価で最も重要なステークホルダーとして、ミテ*ハナさんを設定しました。

この事業はすでに5年目を迎えているため、ミテ*ハナさんには、1期生、2期生、3期生がいます。そのため、継続年数による成果の違いも見据えて評価を実施していく必要があるでしょう。

アンケート、個別インタビューや座談会を通して、どのような変化が生まれつつあるかを見えます。

アンケート分析

2017年12月から2018年1月にかけて、ミテ*ハナさんとして活動していた方々に活動を振り返るアンケートに回答をもらい、1期生14名、2期生6名、3期生9名の計29名から回答をいただきました。回答者は1名を除きすべて女性でした。以下の分析では、回答数が少ないためパーセントではなく実数を用いることとします(図4)。

美術館、ならびに(業務・研修以外の)佐倉市立美術館への訪問頻度はともに年に2~3回程度が最も多数でした。

関心のある領域としては、「美術館」が21名と最も多く、「コミュニケーション」が18名でした。次いで児童教育とボランティア活動が続きます。ここからミテ*ハナソウの活動には美術館とコミュニケーション、さらには子どもに関心を寄せる人も集まっていることがわかりました。

また、ミテ*ハナソウの活動以外に行っている文化活動としては「習いごとや地域のサークル活動(例:合唱、絵画教室、お花、お茶など)」が19名、「地域のボランティア活動(例:読み聞かせ、PTA、傾聴、図書館ボランティア、花火大会、マラソン大会など)」が13名でした。文化活動を行っていない人も4名いることから、ミテ*ハナソウがボランティア活動や文化活動の入り口としても機能しているといえそうです。

ミテ*ハナソウの活動を通じて達成できたことについては、「作品について自分の考えを話す楽しさを味わう」「作品に対するほかの人の考えを聴く楽しさを味わう」「ほかの人の話を聴いて、自分では思いつかなかった考えや視点に出会い、感動する」といった点についてほとんどの人が「できた」と回答をしています。これらの点からはロジックモデル短期の「対話で紡ぐ美術鑑賞を楽しむ」は参加者がほぼ達成できているといえます。この点に関しては、自由記述でも、充実感や達成感、お年寄りや子どもたちの反応への驚きやうれ

しさなどについての言及があったことからはっきりしています。

しかしながら、中間アウトカムでも、「ファシリテーション力がつく」の第1段階の、「ほかの人の話をよく聴いて、それを自分の言葉でわかりやすく表現する」というパラフレーズ能力については多くの人が獲得していましたが、第2段階の「相手を見て、臨機応変にプログラムを実践する」「対象に合わせてプログラムをアレンジ、提案する」といった応用力や状況判断能力を用いなければならない、深度の深い活動についての達成度合いは高くはないようです。これは、年数を経たからといって必ずしもできるようになっているわけではなく、またこうしたことを目指している人が必ずしも多くないということを示唆しているかもしれません。

さらに、「自分たちだけで対話で紡ぐ美術鑑賞プログラムを企画実践する」「本プログラム外に対話で紡ぐ美術鑑賞プログラムを企画実践する」といった、美術館外でのプログラム実践についてはまだ達成できている人は多くないようです。

しかし、中間アウトカム(図3-A)「日常生活やほかの活動への応用」に該当する、「この活動を通して学んだことを仕事や家庭など美術館以外の場の役に立てる」といった、生活でのコミュニケーションに生かす活動については半数の人が「できた」と回答していることは特筆すべきでしょう。特に1期生は、14名中11名が「できた」と回答しており、生活にミテ*ハナソウでの実践が活きつつあることがわかりました。

具体的な例としては、職場でのコミュニケーションに活かしている、子どもやお年寄りなどのコミュニケーションの際に取り入れているなどのエピソードが寄せられました。ここから、ミテ*ハナソウの活動は、ファシリテーターを目指したり、新たな文化実践を生み出したりすることよりはむしろ、生活における態度やコミュニケーションをよりよくするものとして個人に還元されていることがわかりました。

この点は、個人がミテ*ハナソウの活動をどのように認識しているのかという点にもつながっていきます。上位の6つは「仲間と出会う」「成長できる」「感じ方が豊かになる」「成長につながる」「新しい価値観と出会う」「思考が磨かれる」でした。この中の「仲間と出会う」以外はいずれも自身の成長や新しい出会いに関するものであり、個人の成長や発見につながるものでした。「アートを深く理解できる」は7番目でした。他方、1位に「仲間と出会う」があること、あるいは「癒やされる」や「おしゃべりの場」、「社会とつながる」という場としての機能についても一定の回答があることから、ミテ*ハナソウの活動は

個人の成長の場だけではなく、コミュニケーションの場としての機能も持っていることが推測でき、むしろ居場所があり仲間に出会うことが最初に重要なものとして認識されている可能性があります。

このことから、短期アウトカム「コミュニティ形成」がまずは重要で、その後に個人の成長があり、中間アウトカム後半の「思考力の成熟」へつながっていることがうかがえます(図3-A)。

また、ミテ*ハナソウの活動についてはほとんどの人が周囲に伝えており、ミテ*ハナソウの活動に周囲の人と参加した人も20名いました。ここから、ミテ*ハナさんの存在がプログラムの宣伝媒体の役割を果たしていることが推測できます。また、ミテ*ハナさん同士でほかの活動を始めた人も8名おり、この活動から新たな文化活動が広がる可能性も持ち合わせていることがわかりました。

プログラムへの要望については、継続的な活動への枠組み作りや子どもへの活動を中心に地域に根差すことなど、今後も事業を継続していくことを希望する声が寄せられていたことから、「自分事」としてとらえていることに加え、その先も見据えた活動を期待していることがうかがえます。

このことから、ロジックモデル短期アウトカムの「主体性の獲得」や、中間アウトカムの「インフルエンサーになる」「日常生活やほか

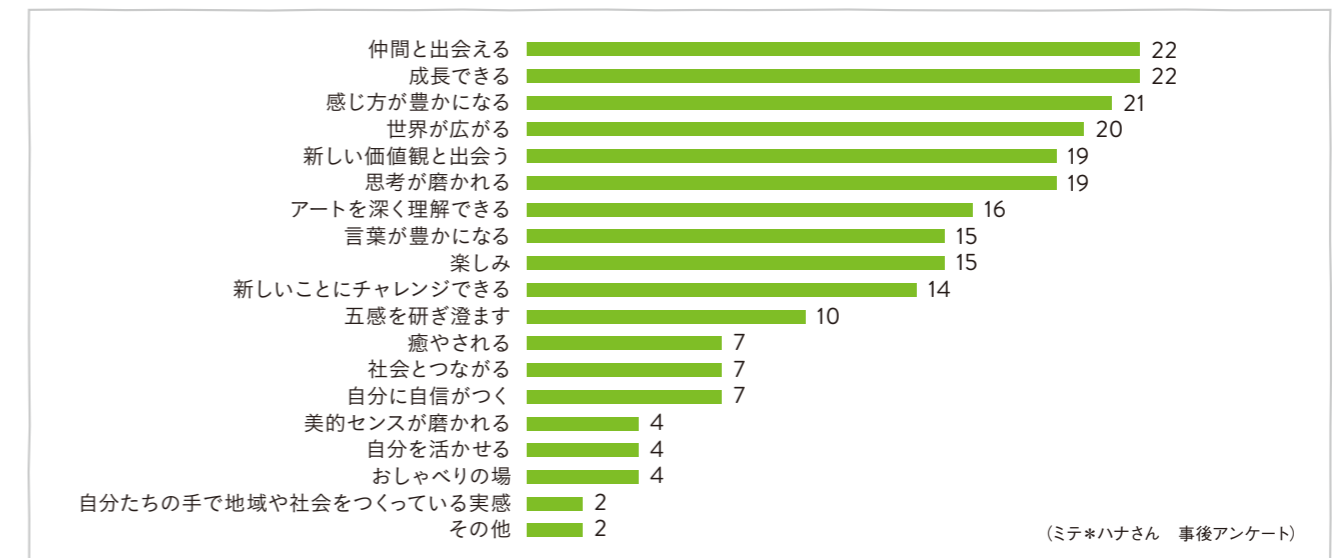
の活動への応用」は達成されているといえます。そして今後の要望については最終アウトカムの「まちづくりに寄与する」「地域の新しい文化をつくる」「地域の包摂力が向上する」などへの期待を示唆しうる活動であるということもできるでしょう(図3-A)。

まとめ

ミテ*ハナさんたちの活動は、ミテ*ハナソウにおける気づきや発見、感動などの短期段階についてはおおむね達成できていましたが、その先の応用力(中間段階)については個人差が生じていることがわかりました。また、ミテ*ハナソウの活動はまだプログラム自体を自主的に進めるまでには至っていないものの、コミュニケーションへの応用については美術館だけの実践ではなく日常生活にも活かされていることが明らかになりました。

他方、ミテ*ハナソウの活動は個人の成長だけではなく、同じ目的や関心を持った人たちにとっての場としても機能する可能性を持っていることがわかりました。将来的にはこの場を継続させ、多くの人にミテ*ハナソウを体験してもらえらる仕組みを作ることが、ミテ*ハナさんの活動から見てくる事業自体に期待される未来像なのでしょう。

図4 ミテ*ハナソウの活動の認識



インタビュー分析

●個別インタビュー

ミテ＊ハナさんは、対話で紡ぐ美術鑑賞を通して、美術や特定のジャンルに対する苦手意識がなくなり、美術や美術館への親しみを感ずるようになっていきます。ミテ＊ハナさん同士が仲間意識や尊敬を持ち、対等に切磋琢磨する学びのコミュニティも生まれており、そこに参加すること自体がやりがいにつながっているようです。

美術館が身近で好ましい場になると、今度はそこを居場所としながら、さまざまな観点から作品をじっくりみて素直な気持ちを語るとい見方や、他者の話を聴くという姿勢、相手の意見を言い換える・待つ・身体で示すなどの手法を学んでいきます。そして、想像できなかった意見に出会うことを楽しんでいるようです。

対話で紡ぐ美術鑑賞のファシリテーション技術を身につけることは、ミテ＊ハナさん自身にとって新たな発見であり、自分が信じてきたものがゆらぎ、新しい方法を身につけることであるとして、ポジティブに受け止められているようです。さらには、仕事や家庭で経験してきたことを活かす場としてもとらえられているようです。

数年関わっているミテ＊ハナさんの中には、ファシリテーターとして参加者と向き合うだけでなく、ミテ＊ハナさんたちが盛り上がることにやりがいを見出し、ほかのメンバーを気遣うという役割を担っている人もいます。この活動や美術館に関わる者として、主体的に自分たちの手でもっとよくしていこうと考えるようになってきています。

ミテ＊ハナさんは、家庭や職場で会話などにも、よい効果を感じています。例えば、子どもや同僚とのコミュニケーションが活発・円滑になったようです。また、この活動を人に伝えたり誘ったりすることで、興味を持つ人・参加する人も現れるなど、ミテ＊ハナさんが活動を外に伝える役割を担っていることもわかりました。

ロジックモデルの短期「対話で紡ぐ美術鑑賞を楽しむ」→「コミュニティ形成」→「主体性の獲得」から、中間の前半「インフルエンサーになる」「日常生活やほかの活動への応用」「ファシリテーション力がつく」は確実に達成されつつあるといえるでしょう(図3-A)。

●座談会(アウトリーチ活動について)

アウトリーチ活動の始まりは、ミテ＊ハナさんの主体性に委ねる形で設計されており、アウトリーチ先の課題に対して主体性を持った人が発起人となって行われています。それをほかのミテ＊ハナさんに広げる仕組み(全員規模で呼びかける、掲示板で状況を共有する)があることで、周りを巻き込んでプロジェクトが生まれています。また、自分の職場でミテ＊ハナソウの手法を活かす、職場の人からミテ＊ハナソウの活動を受け入れたいという声が出るなど、ミテ＊ハナさん同士やその周りの人たちの間で、活動が波及し始めています。

アウトリーチ活動の効果として、学校では、子どもたちの美術に対する関心が高まっています。また、スクールカウンセラーとして働くミテ＊ハナさんは、絵をみたり音楽を聴いたりして感じたことを話す活動を子どもたちとの対話に取り入れています。それによって、あらたまったカウンセリングの場では引き出しづらい気持ちを引き出すことができるそうです。高齢者施設では、回を重ねるごとに、入居者同士がお互いの話を聴き合うなどコミュニケーションが取れるようになり、美術が好きの人以外にとっても楽しめる場となっています。学校や高齢者施設のふだんの環境やアプローチでは引き出せない表現や行為を、アートカードを用いたワークを行うことによって引き出すことができているのです。それによって、学校教育、カウンセリング、高齢者介護における課題を解消することができる、という手応えをミテ＊ハナさんは感じているようです。

小学校や高齢者施設での活動やその手応えを踏まえて、養護施設、認知症カフェ、お祭りやイベントなどに働きかけていきたいという気持ちも生まれています。一方で、その実現のためには、現場の人たちとの調整やその窓口となる人の有無、自分たちの力量やモチベーションの継続に関する懸念などがハードルとなっているようです。

アウトカムごとの分析例(個別インタビュー)

アウトカム	他者の意見を聴くことの楽しさを知る
分析	他者の考えを理解することができていなかったことに気づき、他者の声を聴こうと努めるようになっていく。その中で想像もつかなかった意見を聴くことのうれしさを感じている。そうした経験を通して、コミュニケーション観が変化している。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> 自分と違う環境にいる人のことを短時間で理解することが意外とできていないことに気づいて。 全然想像できない意見に出会ったり。 話す立場から聴く立場になった。3年前、4年前にコミュニケーションって何? って聞かれたら、うまく話すことって答えていたと思うんですよ。でも今は、相手が何を言いたいのかうまく聴くことって答えるかな。

アウトカム	ファシリテーション力がつく
分析	子どもたちの対話を引き出したり、一緒に考えたりする姿勢を身につけている。対話を生み出す手法(パラフレーズ、裁く人がいないという身体感覚)を自分の言葉で咀嚼し、実践しようとしている。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちから対話を引き出し出していること、いろんな発想や意見が生まれてくるということにやりがいを感じたり。 対話による鑑賞会をやる中で、みんなの顔が見えてきたり、自分自身の心の変化。待つということができるようになって。 自分の意見を言わずにパラフレーズをして相手の思考を聴くやり方というのは、想像力を膨らませるいい橋渡しになっている、よいやり方。 ここには裁く人がいませんよという身体感覚で、その場に自分がいるということ意識して、そこに言葉を乗っけていくという手法を使うと、うまくいくと最近わかってきた。

アウトカムごとの分析例(座談会)

アウトカム	主体性の獲得
分析	アウトリーチの始まりが、ミテ＊ハナさんの主体性に委ねる形で設計されており、アウトリーチ先の課題に対して主体性を持った人が発起人となって行われている。主体性の高い人たちが集まる場と、それをほかのミテ＊ハナさんに広げる仕組みがあることで、周りを巻き込んでプロジェクトが生まれている。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> 学校以外でどんなところでやりたいかというの、こっち(ARDAや美術館)からお願いでなくて、ミテ＊ハナさんたちから、ここでやってみたって出てきたところを、じゃあやろうって感じでした。 アウトリーチ委員会に、ここなら何かできそうだと思ってくれるミテ＊ハナさんたちが集まって、やるとなったときには全員に対して「当日一緒にやる人、手挙げて」と。こんなふうにやっていますというのを掲示板で共有して。 施設と高齢者とアートをつなぐ何かがしたいと思っていたところに、僕都苑のプロジェクトが始まったので、最初に手を挙げた。

アウトカム	日常生活やほかの活動への応用
分析	対話で紡ぐ美術鑑賞の手法を、日常生活、ほかのコミュニティ、自身の作家活動などに応用している。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> パラフレーズを繰り返しやっていると、日常の中でも使ってみたくなるんですね。「それってこういうことだね」と言い換えたりしていたら、下の子が最近よく喋ってくれるようになりました。 レジデンスでは、身体を見て話をするとということをしていて、パラフレーズをやっています。研修でやったことをすぐ使わせてもらっている。 「子ども食堂」でアートカードとか対話で紡ぐ美術鑑賞をやりたいなという気がしています。以前、打ち合わせのときに「こんなのあるんだけど」ってアートカードを持って行って。

アウトカム	美術館が地域のコミュニティになる
分析	ミテ＊ハナさん同士のコミュニティだけでなく、対話で紡ぐ美術鑑賞や美術館が、来館者をはじめとする市民のつながり形成の場になりうる可能性を感じている。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> 美術館は、コミュニティを形成する場所なのかもしれない。今は自治会が崩壊に向かってるんですけど、こういうところがそれに代わる役割を果たせるのかもしれないし、そういうものを再生するつながりをつくる場になるのかもしれない。 ミテ＊ハナソウ・カイが終わったあとに雑談してる中で、「この人こういうことやって」とか、「僕も実はこういうことをやっている友人がいるんですよ」とか、そういう会話の中からつながりが見えてきたりする。

アウトカム	美術館へ来ない・来られない層へ働きかける
分析	アートカードを用いることで、ふだんの環境やアプローチでは引き出せない表現や行為を引き出すことができ、スクールカウンセラーや高齢者介護における課題を解消することができる。また、小学校や高齢者施設での活動を踏まえて、ほかの施設やイベントなどに働きかけていきたいという気持ちが生きている。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> 相談って言うと、子どもたちがすぐ構えて相談につながることも多くあるので、アートカードを使って、自分がどう感じるかということ、みんなと共有して受け入れられる経験が、子どもたちの自己肯定感だったり、仲間を認める力につながっていて。日常の中でそれができるのはすごいこと。 養護施設で心が傷ついている子にこれをやったら、子どもの心を豊かにできるかなってずっと考えてる。 お祭りとかでもいいんですけど、ミテ＊ハナソウのワークショップをやってみたい。子どもを集めてもいいし、やってみたい人に参加してもらって。

2. 学校連携事業の先生、子ども

①先生

学校連携の先生のアンケートからは、特にロジックモデルの短期の目標における「子どもの新たな面の発見」が多くあることが読み取れました(図3-G)。一方で、「美術館を身近に感じる」など、美術に関する点については、回答した(担当した)教員が美術教員かどうかによって状況が異なるようです。全体としては「美術鑑賞のイメージが変わった」という回答が多く、美術や美術館のイメージ転換に対話で紡ぐ美術鑑賞が作用していると考えられそうです。

インタビュー分析

こうした結果を踏まえ、下志津小学校の担当教師2名から聞き取りを行った内容をより詳細に見て分析しました。

先生の観察によれば、子どもたちは積極的に手を挙げ発言しようとしており、クラスメイトの発言を聴く表情からは、作品をみたり他者の意見を聴いたりすることの楽しさを感じていたと推察できます。また、事後のお礼の手紙を書くという課題では、ふだんは文章を書くために型を示すなどの手本が必要な子どもたちが多いようですが、そういった子どもたちも自由に書いており、内容も具体的で分量も多かったそうです。このエピソードからは、美術に対する興味の深まりが見取れます。

子どもたちの発言に見られた多様な視点や言葉は、対話で紡ぐ美術鑑賞を通して美術をみる力が育っていることを示し、それは表現の仕方の引き出しを増やすことにつながったのではないのでしょうか。子どもたちの変化は、その後の学校生活へも引き継がれ、異なる意見を言ったり受け止めたりする様子も見られるようになってきたそうです。

先生への影響としては、子どもたちに絵のみせ方を伝える方法の多様さという点で、対話で紡ぐ美術鑑賞に教育的関心を示していたことが挙げられるでしょう。アートカードに関しては、自主的に子どもたちとやってみたとの発言があり、自身の教育活動に取り入れていたことが顕著な例として挙げられます。また、積極的に自由な子どもたちの姿に出会うことで、先生は彼らの新たな一面を発見するとともに、先生自身の美術に対する関心や子どもたちの作品に対する見方も変化していたようです。このように、子どもたち

に対する効果に加えて、対話で紡ぐ美術鑑賞は先生自身の認識にも影響を与えています。

ロジックモデルの短期「教育者としての関心」、中間の「教育活動への応用」に関しては一定の効果が認められます(図3-G)。一方で先生自身にとって短期の「美術・美術館が身近になる」ためには、もう少し先生と美術館の継続した関係性の構築が必要なようです。

②子ども

学校連携は子どもにとって、対話で紡ぐ美術鑑賞を楽しむ機会であると同時に、美術館というものに親しむ機会として作用していることがわかりました。子ども自身にとっては対話で紡ぐ美術鑑賞そのものを楽しむというよりも、美術館という「いつもの授業とは違う空間」を楽しむ場として作用しているようです。これは、対話で紡ぐ美術鑑賞に興味を持って美術館に来ているミテ・ハナソウ展に来る子どもとは大きく異なります。ロジックモデルにおいては短期アウトカム「対話で紡ぐ美術鑑賞を楽しむ」、つまりは作品の楽しさや他人の意見を聴くことを経て、中間アウトカムである「美術・美術館が身近になる」と考えていましたが、美術館という施設への興味が先行した上で後に、そこで行われている美術鑑賞への興味が増すことも考えられます。まずは「美術館」という場を体験することが、子どもにとっては大きな一歩なのかもしれません。(図3-F)

3. 美術館来場者——ミテ・ハナソウ展、その他

子どもの美術館来場者に関してはアンケートを分析した結果を右記にまとめました(図5)。

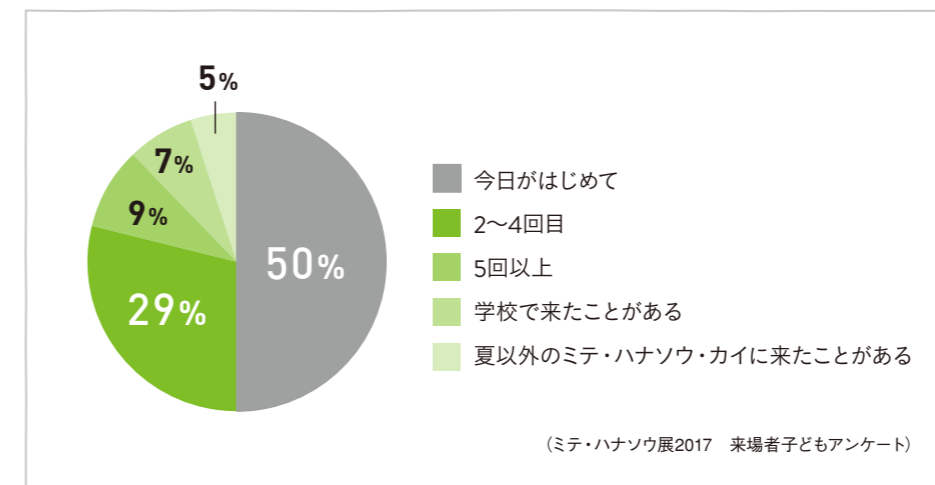
①ミテ・ハナソウ展—子ども

2017年に来場した子どもは半数がミテ・ハナソウ・カイに参加したことがあると回答しています(図5)。これは展覧会イベントのリピート率としては驚異的な数字であるといえ、ミテ・ハナソウ展の愛好度には目をみはるものがあります。また、子どもたちの満足度もおおむね高く、8割前後であることから、ミテ・ハナソウ展に参加した子どもの評判は良好だったといえるでしょう。ここからロジックモデルの

アウトカムごとの分析例(先生へのインタビュー)

アウトカム	(子ども) 美術への関心が高まる	アウトカム	(子ども) 自分の目で作品を見る・作品の多様な見方を知る
分析	先生は、積極的に手を挙げ発言しようとする子どもたちの姿から、対話で紡ぐ美術鑑賞を楽しみ、没頭していたと評価している。また、子どもたちがお礼の手紙を自分で考えてたくさん書くことができていたことから、美術館や美術に興味を持ったのだろうと推察している。	分析	先生は、対話の中で子どもたちが発言する言葉の多様さや、作品に言及する視点の多様さから、鑑賞力・表現力・感性が高められていると評価している。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> 発見を言いたくしょうがない子がいましたね。入り込んでいいるなど感じましたし、「とにかく何かを見つけてやろう」という意欲もあり、ふだん引込んでいいる子でも手が挙がっていたと思います。 美術館や作品に興味を持ったんじゃないかな。お礼の手紙はよく書くのですが、今回はみんなたくさん書いていて内容が具体的でした。型を挙げなくても自分で自由に書いていました。 	根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> 色でみたり、形でみたり、子どもたちはいろんな角度からみることをよく知れたと思います。よくいろんな言葉が出てくるなとも思いました。 引き出しの数が増えたと思いますね。表現の仕方というか。いろいろな言葉が増えたと思います。
アウトカム	(子ども) 授業での発言が活発になる	アウトカム	(先生) 子どもの新たな面の発見
分析	先生は、ミテハナの活動以降、ふだんの授業でも、自発的に意見を言う子どもが増えたことや、異なる意見を言うこと・受け止めることができるようになってきたと感じている。	分析	先生は、子どもたちの思いがけない真剣な表情や、ふだんと違う振る舞いを見て、子どもたちの新たな面を感動や感心とともに受け止めている。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見を言うときに手を挙げる子の数が多くなりましたね。特に国語では、いつも手を挙げなくて指名していた子が手を挙げて発言することが増えてきました。 答えがないものに発言することは安心して言えるのかなと。みんなも否定はしないでし、意見の違う子は「僕は別の感じ方をしました」と言って手を挙げて「僕はこう感じました」と言えるようになりました。 	根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> 表情がいつもつまらなそうで少し気になる子が、自由行動になったときに、真剣に絵をみたり書いたりしていたんです。今までこんな表情見せたことない! すごいなと思ったんです。この子ってこういう表情できるんだという新しい発見がありました。 ふだんは何も言わないから分からなかった子が、こんな感じ方ができるんだ、こんな意見を持っているんだ、と。普段はちょっかい出し合っている2人が真剣に意見交換していたり。

図5 ミテ・ハナソウ・カイへの参加回数



中間にある「美術・美術館が身近になる」はある程度達成されたといえるのではないのでしょうか(図3-B・3-F)。

また、特に楽しかったところについて選択式の質問をしたところ、2017年の結果では「絵をみながらいろいろ感じて考えた」が62%と最も割合が高く、次いで「自分の気持ちが言えてよかった」の59%でした(図6)。2015年は「ほかの人の意見を聴くのが楽しかった」の回答が一番高かったことを踏まえれば、時間が経過するにつれてミテ・ハナソウ・カイを通じて自己表現ができる子どもたちが増えてきたと考えられそうです。また「ミテ・ハナさんが意見を聴いてくれた」も経年比較をすると増えており、対話として楽しんでいるようです。

こうしたことから、ロジックモデルの子どもの短期アウトカムにおける「対話で紡ぐ美術鑑賞を楽しむ」の中にある、「美術への関心」「自分の目で作品をみる」「自分の意見に自信を持つ」などはある程度達成されているといえそうです(図3-F)。

次に、2017年においてリピート経験のある子どもと初めての子どもの違いを確認してみると、初めて参加した子どもの特徴としては、自己表現を楽しみ、自己主張の場としてミテ・ハナソウ・カイをとらえていたことがわかりました。一方で、リピート経験のある子どもは他人の意見を聴いて新しい考えを得ている傾向が見えてきました。ここから、リピート経験のある子どもにとっては、ミテ・ハナソウ・カイを相互交流の場ととらえ、より美術館への関心が高く、深い理解につながっているようです。NPO法人ARDAのみなさんによれば、コミュニケーションの成熟の段階には、「自分の意見を話したい」段階の次に「他者の話を聴きたい」段階があるそうです。それを踏まえるのならば、子どもたちはミテ・ハナソウ・カイに参加するにつれ、より豊かなコミュニケーション能力を身につけつつあるといえそうです。

つまり、子どもの場合、リピート経験が理解に大きく作用しているようです。リピート経験のある子どもほど、感想をよりうまく伝えるために努力しており、ミテ・ハナソウ展のみならず美術館への理解も高まっています。このように複数回参加することによって、ロジックモデルでいえば短期のレベルから中間のレベルへと変化していることがうかがえます(図3-B・3-F)。

②ミテ・ハナソウ展—大人

ミテ・ハナソウ展に来場した大人向けアンケートによれば、「対話で紡ぐ美術鑑賞」を認知して来場する人の割合は年々高まっており、浸透してきているようでした。

大人の来場者の場合、特に「他人の意見が新鮮だった」というコメントが多く、他者との対話よりも以前に、他者の意見に刺激を受ける機会としてミテ・ハナソウ・カイをとらえているようです。また、「自分の感じたことを表現できた」や「自分の鑑賞が深まった」などの回答も多く、自己理解、自己表現の場としても有効だったようです(図7)。

一方で減少傾向ではあるものの「学芸員のギャラリートークが聞きたかった」という回答が一定数あることから(2015年2割強、2017年1割程度)、子どもとは違い、対話を楽しむばかりではなく、知識の習得も期待していることがうかがえました。

③美術館一般アンケート

美術館の3階で開催されたミテ・ハナソウ展2017と同時期に、2階で行われた「柴宮忠徳展」においても来場者アンケートを実施しました。この一般アンケートでは、ミテ・ハナソウ展を意図せず見たと思われる人の意見を集めることができました。結果、意図せずみただからこそ楽しめた人もいれば、そうでない人もいたようです。つまり、ミテ・ハナソウ展は、従来の美術館来館者からすれば、通常の美術体験とは大きく異なるため、その不意の出会いをどのように誘導するのが重要なようです。

つまり、対話で紡ぐ美術鑑賞の入り口の設計が、今後の事業戦略として重要でしょう。また、今年のミテ・ハナソウ展は、企画展と同じ作品の作家を用いて実施したことで、3階と2階の連続性や差異を見出した来場者もいたようです。

4. 介護老人保健施設 ユーカリ優都苑

優都苑での事業は、ミテ・ハナさんの1人が勤務していたことがきっかけとなり、自主的に始まったミテ・ハナソウ・プロジェクトのアウトリーチ活動の1つです。実際には、半年程度月1回、ミテ・ハナさんたちが施設に赴き、アートカードを用いて対話で紡ぐ美術鑑賞を実践し、入所者の方に美術鑑賞になじんでもらいました。その後、施設の企画により入所者の方たちが美術館を訪問し、ミテ・ハナソウ・カイが実施されました。以下、優都苑での担当職員へ実施したインタビューを分析し、事業の成果を検証します。

アートカードを用いた活動は、施設利用者にとっては生活の中の楽しみとなったようです。こうしたことは、あまり話さなかった人が

図6 ミテ・ハナソウ・カイに参加した感想(子ども)

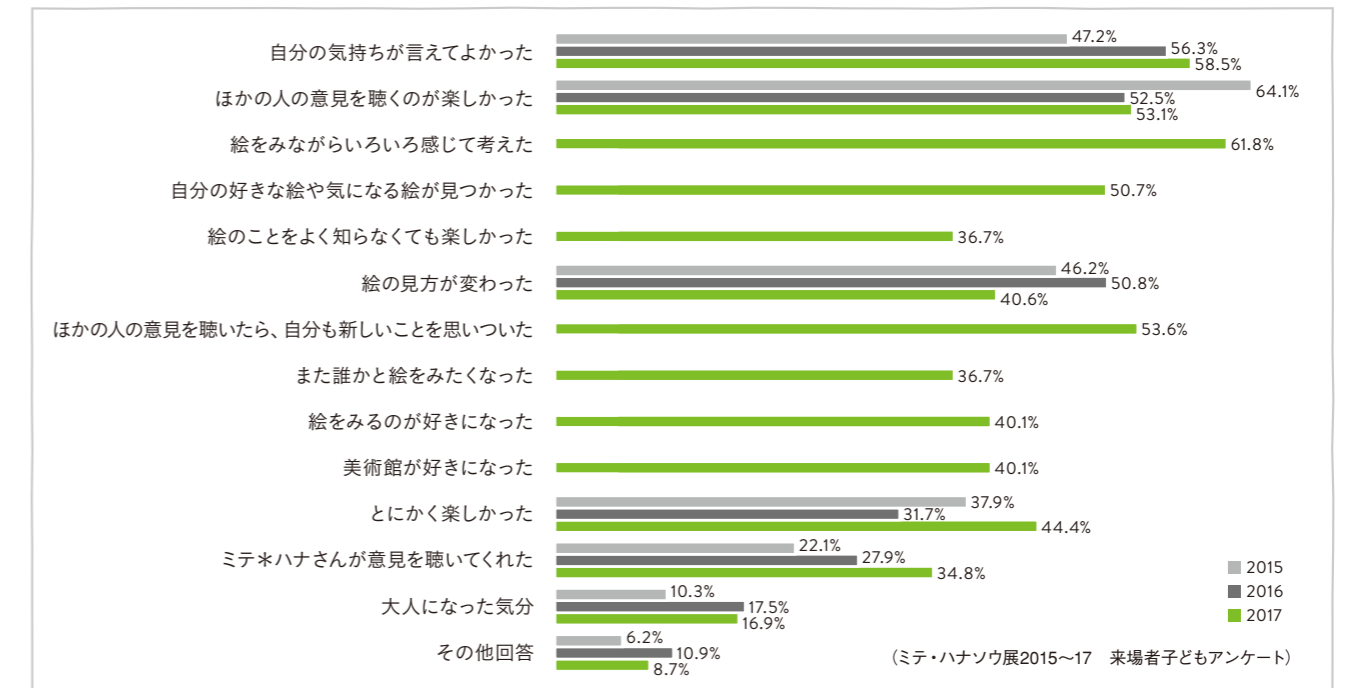
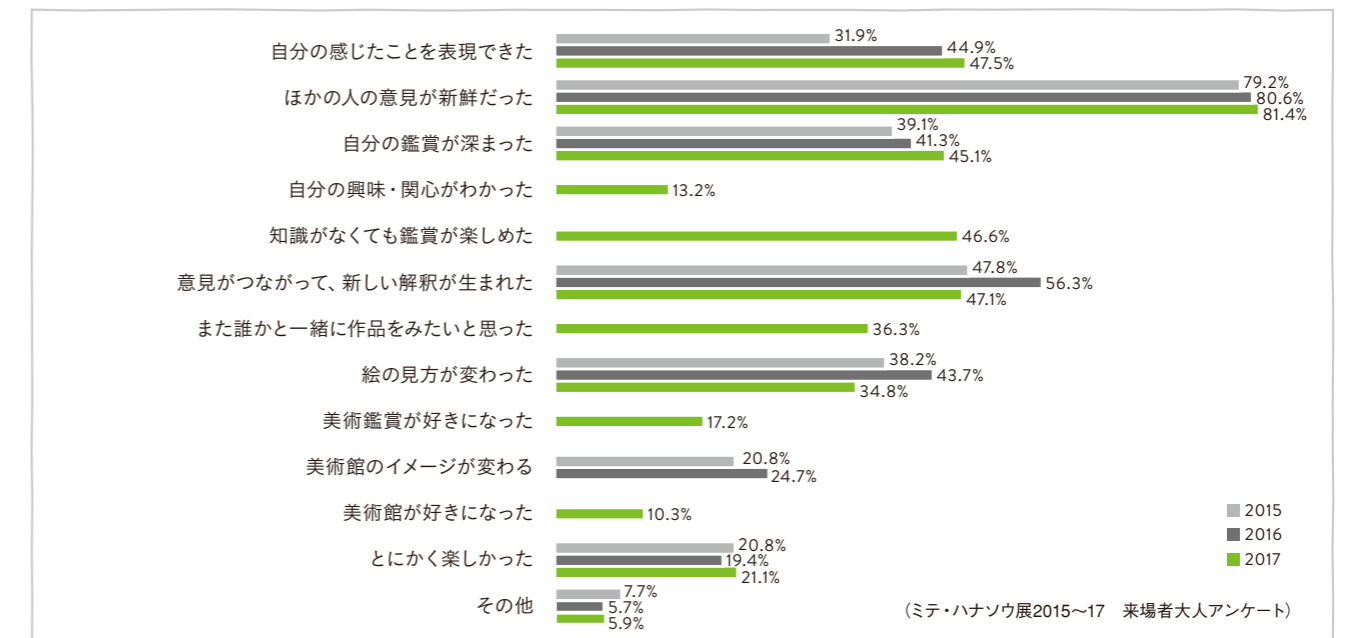


図7 ミテ・ハナソウ・カイに参加した感想(大人)



前向きな言葉を発したり、次の回を楽しみに待ったりする様子などから読み取れます(図3-H)。

施設での生活は、生活のさまざまな物事を規格化したり事前に準備せざるをえず、利用者自身が選んだり、自分の考えや気持ちを表現したりする機会は少なくなりがちです。その中で、この活動は、利用者が主体性を維持・回復できる場になっていたようです。

比較的認知症が進行しており健忘が見られる人でも、アートカードの活動は記憶に残っているというエピソードがインタビュー中に出てきましたが、生活の中に興味のある活動があることや、作品をみて何を感じるか自分の言葉で表現するといった活動は、高齢者の脳の活性化にもつながる可能性があることがわかりました。特に、「美術館に行きたい」という気持ちが生まれ、実際、久々に外出した利用者もいたそうです(図3-H)。

また、アートカードの活動は、グループでお互いの話を聴き合う活動のため、孤立しがちな利用者がほかの人と交流するきっかけになることも期待できそうです。実際、この活動に参加している利用者同士が、よく話すようになったり、トラブルが減ったりするといった効果もありました。こうした取り組みは、老後、施設に入居しても認知症になっても、豊かに暮らしていける環境づくりにつながると考えられます(図3-H)。

一方、施設側にとっては、職員にできることにはさまざまな制約があるので、ミテメハナさんたちが活動を持ち込むことにより、職員だけではできないことを補うことができていると認識されたようです。職員にとっては、アートカードを支援に取り入れるのは利用者とのコミュニケーションの手段が増えることを意味します。こうした活動を通して、職員がスキルアップすることにより、よりよい支援を提供できるようになる可能性があります。また、美術館訪問などを実際にやってみることで、利用者がどんな反応を示すのかといったリアルな情報を得ることができ、今後の支援に活かすことができるとの意見もありました(図3-I)。

現在は、比較的活動になじみやすそうな利用者のみに参加してもらっていますが、今後は、症状の重い方のグループや、学童保育の子どもも含めた多世代のグループなどにもこの活動を広げていこうとしています。そうすれば、施設全体としてのサービスも充実し、ほかの施設との差別化も図ることができるというメリットも指摘されました(図3-I)。

このように、職員がスキルアップすることで、利用者の希望や状況をきちんと把握し、それに沿った支援を提供できる職員が全体とし

て増えていけば、介護職のイメージアップにもつながることでしょう。また、施設のサービス向上を通して、施設の風土がよりよくなり、職員にも利用者にも選ばれるような施設になることで、ほかの施設をリードし、その取り組みを広める存在になっていくことが期待できます(図3-I)。

5. NPO法人ARDA、美術館学芸員

ARDAや美術館学芸員に関しては、事業運営者として関わりながら、ミテメハナさんの活動から刺激を受け、自分たちの活動へフィードバックがあることが想定されます。その点について、ARDAの三ツ木氏、佐倉市立美術館の永山氏の鼎談から探ってみました。また彼らが見る、ミテメハナさんの変化のストーリーを改めて抽出分析し、ロジックモデルを改善したので、想定とは異なった点なども抽出しています。(図3-D・3-E)

まず、鼎談を通して、ミテメハナさんにとっては、美術館という拠点があり、互いに学び合える仲間がいて自分にも役割があること、自分たちで工夫して展覧会をつくったという経験が、楽しさ、自信、積極性につながっていることが、よりはっきりしました。また、主体的な1期生が育ったところに、2期生、3期生が入ってきたことで、よりチームとしてのまとまりが生まれてきているようです。その信頼関係や主体性が、互いに励まし合って厳しい指導を乗り越えたり、自主練をしたりといった行動のベースになっています。

ARDAスタッフは、素人のボランティアだからと基準を緩めることは、甘やかすこと、上の立場からミテメハナさんに接することだと考えており、同じ土俵で同じことをやり、同じレベルを求めるという対等な目線でミテメハナさんと関わろうとしています。そのため、あえてミテメハナさんからの質問に対してすぐ答えるのではなく、ミテメハナさん自身がどう思うのかを考えるよう促し、引き出そうとしています。こうした対等な関係性からはARDAスタッフ自身も刺激を受けています。

このように、みんなで話し合っ、何が大事なのか確認し、活動を一緒に創っていくというプロセスは、ARDAから見れば佐倉市立美術館ならではのプログラムの開発につながり、ミテメハナさん側から見れば主体性を育む研修になっています。双方にとっても意味のある活動といえるでしょう。また、ミテメハナさん同士、そして、

ARDAスタッフとミテメハナさんの、こうした対話が、双方に成長機会をもたらしているともいえます。

次に、美術館学芸員にとっての活動の意味にフォーカスします。学芸員からすれば、美術館のプログラムの企画・運営にミテメハナさんが関わるといことは、非専門家に委ねる怖さや管理しきれない怖さも伴うことです。ところが、担当学芸員は、それを受け入れる姿勢を取っています。こうした態度が取れたのは、学芸員側にも、サービスを提供する側と受ける側ではなく、フラットに同じ方向を向くことを大事にする価値観がもともとあったことや、それがこの活動と合致したということが大きいでしょう。ミテメハナさんの意見をよく聴くことで、ミテメハナさんから学芸員に対する信頼感も増し、美術館のために何かしたいという主体性も育まれており、よい関係性の構築がうかがえました。

また、学芸員は作家の生涯や業績といった情報から入りがちですが、対話で紡ぐ美術鑑賞で鑑賞者が作品をさまざまな角度から語るのを目の当たりにし、いかに自分が作品をみていなかったかに気づいています。さらに、熱心な鑑賞に応えられるような作品を収蔵しなければ、という責任を意識するようになっており、美術館の主たる事業である作品収蔵およびコレクションの拡充に対して、よい意識変化が生まれているようです。

最後に美術館の役割に対する認識について見てみます。現代の美術館は本来、フラットに作品をみせ、批判も称賛も含めて対話する場としてつくられています。ミテメハナの活動を美術館で行う意義の1つは、そのような美術館の役割を発信していくことにもあります。当初、ミテメハナさん以外の来館者からは、自由な解釈を述べることに拒否反応も見られましたが、活動を続けていく中で、来館者の作品をみる力も育ってきているようです。その様子を見て、学芸員も、対話で紡ぐ美術鑑賞と本来のアートの方向性の近さを実感しているといえます。

アウトリーチ活動についての発言を分析すると、ミテメハナさんの活動は、美術館内にとどまらず、学校、高齢者施設にも広がり、施設からは職員研修をしてほしいという話もあったそうです。また、1期生の中からアウトリーチ事業のコーディネーターになる人も出てきているなど、最初の熱量で立ち上げるフェーズから、継続・普及のフェーズに移行しているといえそうです。それに伴い、公金に依存しないための資金調達先の開拓とその仕組みづくり、責任感を持つ

て事業を動かす人材や人件費の確保、ミテメハナさんの自主性を発揮できる枠組みの整理などが、次なる課題となっていることが明らかになりました。また、美術館という拠点があることのポテンシャルを活かし、佐倉市の立地や地域資源を活用する、ほかの文化施設と連携することにより、地域への面的展開や佐倉市のブランディングにつながる可能性も出てきているといえます。

アウトカムごとの分析例(鼎談)

アウトカム	(ミテメハナさん) 主体性の獲得→対話で紡ぐ美術鑑賞を楽しむ→対話で紡ぐ美術鑑賞の運営能力が伸びる
分析	支え合う仲間がいること、楽しさ、美術館のボランティアとしての主体性(プライド・責任感)が、研修や実践に対して深くコミットすることにつながり、結果的に個人が成長していく。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> ・誰かにやってあげようっていう前に、楽しくできる。……楽しいから、頼んでもないのに、ミテ・ハナソウ展にうじゃうじゃ来ちゃう。 ・マンションの会議室を借りて、勝手に自主練していたんですね。ダメ出しされて、みんなめげるんだけど、お互いにそれを慰めあって乗り越えてく。 ・「美術館の」ボランティアとして自分が活動するプライドもあると思う。責任感みたいなもの。だから頑張っ、厳しい研修にもついてくる。

アウトカム	(美術館) 学芸員の成長
分析	事業の運営やマネジメントに関する考え方や、作品の収集や展覧会のキュレーションに関する考え方が、ミテメハナさんを受け入れたりその活動の様子を見ることを通して、変化している。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> ・学芸員は、その人の生涯とか画歴とかから入っちゃうから、ほんとに作品みてる? というところはありますよね。ほんとは研究は作品をみることからしか始まらないと思う。 ・何を出すか、どういう作品を収蔵しなくてはいけないのかという責任感がありますよね。 ・最初、対話型を自分ではできないし、うちの美術館ではできないと思っていた。やっていきながら、対話型の「考え方」というのは、自分の考えているアートの方向と同じだなとすでに感じてきている。

アウトカム	(来館者) 鑑賞能力の向上
分析	当初、来館者からは、自由な解釈を述べることに拒否反応も見られたが、活動を続けていく中で、来館者の作品をみる力も育ってきている。
根拠となる発言	<ul style="list-style-type: none"> ・1年目のときは、あんな勝手なことをしゃべっているのは、作家に失礼だと怒り出す周りのお客さんがいたりして。(でも) 鑑賞者の見方も変わってきている。作品をみる力が少しずつついてきている。

Section 4 評価と分析の総括

総括

これまで見てきたさまざまなステークホルダーの分析を通して、明らかになってきたことは以下の通りです。

①ミテ＊ハナさん

短期アウトカムの「対話で紡ぐ美術鑑賞を楽しむ」「コミュニティ形成」「主体性の獲得」と、中間アウトカム前半の「インフルエンサーになる」「日常生活やほかの活動への応用」に関しては達成されつつあるといえます。他方、「対話で紡ぐ美術鑑賞の運営力が伸びる」の達成に関しては個人差があることが明らかになってきました。中間アウトカム後半については、ミテ＊ハナさんの周囲への伝播を想定していましたが、発言や回答からは徐々に達成しつつあることは予想されます。次の段階として、それが地域へ伝わり、「まちづくりに寄与する」「成熟した市民」が達成されることが期待されます。今後は、ARDAや美術館スタッフのコメントからも明らかですが、持続的活動が市民活動として根付いていくことで、こうした最終アウトカムの実現が期待されます。そのためには、資金調達や持続可能な制度設計、あるいはミテ＊ハナさんの中から単純に対話で紡ぐ美術鑑賞を実践できるのみならず、俯瞰的にものをみるファシリテーターとしての能力を獲得する人が出てくることが期待されます(図3-A)。

②来館者

ミテ＊ハナソウ展に参加した人は、短期アウトカム「美術鑑賞能力の向上」、中間アウトカム「美術・美術館が身近になる」に関してはある程度達成できたといえますが、最終アウトカムの「美術鑑賞を介したコミュニティができる」状態まではもう少し事業の継続が必要です。ミテ＊ハナソウ展に関しては子どものリピーターは多いため、大人や一般来館者も巻き込んでいけば、達成の可能性があるといえるでしょう(図3-B)。

③美術館

担当者に関しては短期アウトカム「学芸員の成長」、中間アウトカム「美術館や収蔵品の認知向上」はある程度達成できたといえそうです。さらにミテ＊ハナソウ・プロジェクト事業担当者以外からも、こうした意識の変化がはっきり現れてくることが期待されます。また、中間アウトカムの「事業の枠組みや仕組みの整備」は今後の課題として認識され出しているため、今後事業継続のために新たな施策が必

要であり、具体的なアクションが必要でしょう。最終アウトカム「まちづくりに寄与する」に関しては、ミテ＊ハナさんが主体的に美術館外に出ていっていることから、その萌芽は確認されたので、達成のためにさらなる事業継続が必要でしょう(図3-D)。

④ARDA

ARDAに関しては、短期アウトカム「よりよいプログラムの開発・提供」「スタッフの成長」、中間アウトカム「フィールドの増加、支援者の増加」に関してはアウトリーチ活動の増加からフィールドの増加は明らかですが、事業継続のためには支援者を増加することが課題といえそうです。すでに前述の美術館のアウトカムの箇所ですべての「事業の枠組みや仕組みの整備」も今後の課題といえるでしょう。最終アウトカム「ARDAのミッション、ビジョンの実現」は日常の活動の中で実践されていますが、その社会的認知に関しては今後さらなる向上が期待されます(図3-E)。

⑤学校連携—子ども

子どもでは、短期アウトカム「対話で紡ぐ美術鑑賞を楽しむ」や中間アウトカム「学校生活への応用」「美術・美術館が身近になる」について一定の達成が見られます。一方で、最終アウトカムである「生きる力がつく」「文化的に豊かな生活」に関しては、数回の事業実施ではなかなか明らかにはならないため、継続的に事業に参加してもらい変化を追跡することが必要です(図3-F)。

⑥学校連携—先生

先生では、短期アウトカム「教育者としての関心」に関しては発言から明らかでしたが、「美術・美術館が好きになる・敷居が下がる」に関しては教員間で個人差があり、これからの課題といえるでしょう。中間アウトカムに関しては「教育活動への応用」へは実践へ取り入れる姿勢も見られ、一定の効果はあったようですが、「美術・美術館が身近になる」に関してはまだまだのようです。中間アウトカム上段の教育に関する項目は一定程度達成されつつありますが、下段の美術・

美術館への関心という軸に関しては、これからの課題といえます。最終アウトカム「生きる力を育む教育能力向上」に関してはまだこれからであり、長期的にこの事業に参加することにより、達成できるといえるでしょう(図3-G)。

⑦高齢者施設—利用者(高齢者)

高齢者施設の利用者と施設職員に関しては、アウトリーチ活動としての達成度の1つとして、それぞれの変化を検証しました。利用者に関しては、短期アウトカム「主体性の維持・回復」「ほかの入居者と交流が増える」に関しては効果がありました。中間アウトカム「脳が活性化される」「外に出る機会が増える」「人間関係が改善」に関しては、その可能性が示唆されました。最終アウトカム「認知症になっても豊かに暮らせる環境ができる」に関しては、この活動に限らずさまざまなプログラムを実施する施設の中に対話で紡ぐ美術鑑賞などが定着し、より選択肢が増えることにより今後達成されるかもしれません(図3-H)。

⑧高齢者施設—職員

施設職員の短期アウトカム「職員だけではできないことを補う」の達成度は発言からも明らかです。今後は施設の定番プログラムなどとして位置づけてもらうことができれば、中間アウトカム「スキルアップ」「ワークショップ参加者が増える」が達成されるでしょう。対話で紡ぐ美術鑑賞などの楽しく専門的な活動ができるスタッフがいる状態ができれば、最終アウトカム「介護職のイメージアップ」が実現する可能性があります(図3-I)。

以上のように、ロジックモデルに基づき分析してきました。ステークホルダーごとにばらつきはあるものの、おおむね中間アウトカムに関してまでは一定の達成が確認されました。今後は最終アウトカム達成のために、事業継続のための人材育成や、活動基盤の整備、またさらなるアウトリーチ先など協力者の獲得が必要でしょう。主たるステークホルダーであるミテ＊ハナさんたちは、自発的なアウトリーチ活動を行うなど、その成長は目覚しく、大いに事業展開の力となる可能性を感じさせてくれます。今後はさらにその活動が地域に開かれ、多くの人を巻き込み、美術館や対話で紡ぐ美術鑑賞を核として、佐倉市の市民がさらに文化的に成熟し、地域イベント参画などを通してまちづくりに寄与していくことが期待されます。

【調査・分析・執筆＝熊谷 薫・石幡 愛・高橋 かおり】

ミテ*ハナさん研修カレンダー 2014～2017年度

参加人数 ファシリテーター(講師) ※ARDA
 所要時間 ★ミテ*ハナさんの呼びかけで行った回

2014年度 1期生研修

7/7(月) 1期生基礎研修A① ⑥時間15分 参加人数 8人	7/12(土) 1期生基礎研修A② ⑥時間15分 参加人数 16人	7/14(月) 1期生基礎研修B① ⑥時間15分 参加人数 10人	7/19(土) 1期生基礎研修B② ⑥時間15分 参加人数 14人	9/25(木) 作品選び、 コーチング研修 ④時間 参加人数 22人
10/25(土) 作品選び、 コーチング研修 ④時間 参加人数 22人	11/6(木) コーチング研修、 事前準備「ひとりVTS」 ④時間 参加人数 17人	12/6(土) コーチング研修 ④時間 参加人数 24人	1/24(土) コーチング研修、コミュニケーター 心得をつくるグループワーク ④時間 参加人数 16人	2/14(土) 監視員さん向け鑑賞会 ④時間 参加人数 19人
3/12(木) コーチング研修、コミュニケーター 心得をつくるグループワーク ④時間 参加人数 18人				

2016年度 1・2期生研修

6/4(土) 2期生基礎研修A① ⑤時間45分 参加人数 10人	6/6(月) 2期生基礎研修A② ⑤時間45分 参加人数 13人	6/13(月) 2期生基礎研修B ⑥時間5分 参加人数 17人	7/22(金) ミテ・ハナソウ展2016 事前研修・顔合わせ ⑤時間5分 参加人数 20人	7/23(土) ミテ・ハナソウ展2016 運営研修 ④時間 参加人数 23人
8/2(火) コーチング研修 ④時間55分 参加人数 15人	8/9(火) コーチング研修 ④時間15分 参加人数 16人	8/29(月) コーチング研修、 作品研究 ②時間25分 参加人数 9人	8/29(月) ミテ・ハナソウ展2016 ふりかえり ②時間50分 参加人数 10人	9/5(月) アートカード研修 ③時間55分 参加人数 14人
9/30(金) アートカード研修 ④時間35分 参加人数 16人	10/7(金) 事前準備「ひとりVTS」、 コーチング研修 ⑤時間15分 参加人数 12人	11/25(金) コーチング研修 ④時間10分 参加人数 13人	12/15(木) コーチング研修 ③時間45分 参加人数 19人	1/27(金) コーチング研修 ④時間45分 参加人数 14人
2/24(金) コーチング研修 ④時間15分 参加人数 16人	3/13(月) 体験会準備 ⑤時間45分 参加人数 13人	※美術館職員・監視員が一部回に参加		

2015年度 1期生フォローアップ研修

4/16(木) コーチング研修、 今年度のスケジュール説明 ④時間 参加人数 14人	5/16(土) コーチング研修、 アートカード研修 ④時間25分 参加人数 20人	6/3(水) アートカード練習 ④時間25分 参加人数 11人	6/9(火) アートカード練習 ④時間 参加人数 12人	6/16(火) アートカード研修、 学校連携準備 ⑤時間5分 参加人数 15人
8/1(土) ミテ・ハナソウ展 運営研修 ⑥時間15分 参加人数 18人	8/19(水) やまとアートシャベル※1 来館&交流 ②時間20分 参加人数 8人	9/17(木) 学校連携準備、アートカード復習 ・研究、ミテ・ハナソウ展ふりかえり ⑥時間5分 参加人数 17人	10/17(土) アートカード練習、 学校連携準備 ④時間25分 参加人数 13人	11/16(月) 学校連携準備 ③時間15分 参加人数 7人
11/19(木) アートカード研究 ④時間30分 参加人数 11人	12/17(木) アートカード研究 ④時間30分 参加人数 14人	3/12(土) 来年度ミテ・ハナソウ展準備、 ミテ・ハナソウ・カイについて ④時間30分 参加人数 12人	※1=神奈川県大和市とARDAの協働事業で 対話による美術鑑賞を行う市民ボランティア・チーム	

2017年度 1・2期生フォローアップ研修

4/8(土) コーチング研修 ④時間45分 参加人数 11人	4/28(金) アートカード研修 ④時間30分 参加人数 14人	5/9(火) アートカード研修 ⑤時間10分 参加人数 17人	5/12(金) コーチング研修 ④時間30分 参加人数 15人	5/26(金) コーチング研修 ⑤時間5分 参加人数 21人
8/4(金) ミテ・ハナソウ展2017 顔合わせ ②時間 参加人数 21人	8/5(土) ミテ・ハナソウ展2017 運営研修 ③時間45分 参加人数 25人	8/8(火) コーチング研修 ④時間15分 参加人数 18人	8/19(土) コーチング研修 ⑤時間 参加人数 14人	9/16(土) ミテ・ハナソウ展2017ふりかえり、 これからのミテハナ会議 ⑥時間10分 参加人数 26人
10/11(水) アートカード研修 ④時間10分 参加人数 13人	10/30(月) 学校連携準備 ③時間 参加人数 17人	12/15(金) VTSコーチング ②時間30分 参加人数 7人	1/24(水) 根付展 ミテ・ハナソウ・カイ準備 ⑤時間45分 参加人数 11人	2/15(木) VTSコーチング ④未定 参加人数 未定
3/11(日) これからのミテハナ会議 ④時間予定 参加人数 未定	3/13(火) 予定 VTSコーチング ④未定 参加人数 未定	※8月4日以降は1～3期生合同 ※2017年度の3期生研修、自主研修はp.27参照 ※2018年1月末現在		

上記以外に自主研修実施:2014年度14回/2015年度13回/2016年度14回

ミテ・ハナソウ 学校連携事業の実績 2015～2017年度

授業タイプ 事前+美術館…… 美術館訪問とそれに伴う事前授業で子どもたちの鑑賞活動をサポートするプログラム
 美術館 …………… 美術館訪問時の子どもたちの鑑賞活動をサポートするプログラム
 出前 …………… 学校を訪問し、アートカードを使った美術鑑賞授業を行うプログラム

2015年度 実施校

校数	日時	学校名	学年	学級数	人数	授業タイプ	展覧会
1	6/26(金)	佐倉市立間野台小学校	6年生	3学級	99人	美術館	収蔵作品展 美術館のどうぶつたち
2	6/30(火)	佐倉市立下志津小学校	6年生	2学級	47人	事前+美術館	収蔵作品展 美術館のどうぶつたち
	7/3(金)						
3	8/9(日)	佐倉市立佐倉中学校 美術部	-	-	12人	美術館	ミテ・ハナソウ展
4	9/18(金)	佐倉市立白銀小学校	4年生	1学級	28人	美術館	収蔵作品展 水にとけあう彩り—水彩画の魅力
5	9/25(金)	佐倉市立小竹小学校	4年生	2学級	38人	美術館	収蔵作品展 水にとけあう彩り—水彩画の魅力
6	11/10(火)	佐倉市立千代田小学校	5年生	2学級	48人	出前	-
7	11/18(水)	佐倉市立根郷小学校	4年生	3学級	85人	美術館	高橋真琴の原画展

合計7校 357人

2016年度 実施校

校数	日時	学校名	学年	学級数	人数	授業タイプ	展覧会
1	5/13(金)	佐倉市立内郷小学校	4年生	1学級	33人	事前+美術館	佐倉ゆかりの作家と工芸
	5/20(金)						
2	6/8(水)	佐倉市立白井南中学校	1年生	4学級	114人	事前+美術館	収蔵作品展 深沢幸雄—銅版画の魅力
	6/16(木)						
3	6/24(金)	佐倉市立間野台小学校	6年生	3学級	90人	美術館	収蔵作品展 深沢幸雄—銅版画の魅力
4	6/30(木)	佐倉市立下志津小学校	6年生	1学級	34人	事前+美術館	収蔵作品展 深沢幸雄—銅版画の魅力
	7/5(火)						
5	7/1(金)	佐倉市立佐倉小学校	6年生	3学級	106人	美術館	収蔵作品展 深沢幸雄—銅版画の魅力
	7/8(金)		4年生	4学級	117人		
6	8/10(水)	佐倉市立佐倉中学校 美術部	-	-	13人	美術館	ミテ・ハナソウ展2016
7	9/13(火)	佐倉市立小竹小学校	4年生	2学級	44人	美術館	収蔵作品展 —memories—
8	9/20(火)	佐倉市立白銀小学校	4年生	2学級	44人	事前+美術館	収蔵作品展 —memories—
	9/21(水)						
9	10/11(火)	佐倉市立千代田小学校	5年生	2学級	51人	出前	-

合計9校 646人

2017年度 実施校

校数	日時	学校名	学年	学級数	人数	授業タイプ	展覧会
1	6/1(木)	佐倉市立間野台小学校	6年生	3学級	94人	事前+美術館	収蔵作品展 小林ドンゲ 初期版画を中心として
	6/9(金)						
2	6/5(月)	佐倉市立白井南中学校	1年生	3学級	105人	事前+美術館	収蔵作品展 小林ドンゲ 初期版画を中心として
	6/14(水)						
3	6/30(金)	佐倉市立下志津小学校	6年生	2学級	40人	事前+美術館	収蔵作品展 小林ドンゲ 初期版画を中心として
	7/4(火)						
4	8/17(木)	酒々井町立酒々井中学校 美術部	-	-	7人	美術館	ミテ・ハナソウ展2017
5	8/24(木)	佐倉市立佐倉中学校 美術部	-	-	8人	美術館	ミテ・ハナソウ展2017
6	9/6(水)	佐倉市立白井小学校	6年生	2学級	49人	事前+美術館	柴宮忠徳展
	9/12(火)						
7	10/24(火)	佐倉市立千代田小学校	5年生	2学級	51人	出前	-
8	10/30(月)	佐倉市立白銀小学校	4年生	1学級	33人	事前+美術館	自転車の世紀
	10/31(火)						
9	11/17(金)	佐倉市立根郷小学校	4年生	3学級	112人	事前+美術館	自転車の世紀
	11/24(金)						
10	12/8(金)	佐倉市立内郷小学校	6年生	1学級	20人	事前+美術館	自転車の世紀
	12/15(金)						

合計10校 519人

※2013年度はモデル授業実施1校。2/19(火) 佐倉市立寺崎小学校 4年生2学級83人／美術館訪問

ミテ・ハナソウ 対話ドキュメントから

収録：2016年7月5日

「深沢 幸雄—銅版画の魅力」展@佐倉市立美術館
学校連携事業の小学校6年生8人のグループ



深沢幸雄《星の門》1972年



収録日の記録動画（撮影：株式会社らくだスタジオ）より、鑑賞の様子

《星の門》を巡る対話（2作品中の2作品目）

ミテ*ハナ この作品。じゃあ、まずは1人でじっくり、よ〜くみて
みてください。

……「星の門」「星の門？」とささやき合う児童たち……

ミテ*ハナ まだしゃべんないよ。あとでゆっくり聴くからね。

……1分半ほど、子どもたちがそれぞれ作品をみる……

ミテ*ハナ ちょっと、左右入れ替わる？ 大丈夫？

サポーター 左からみるとまた違う印象かもしれないよ。

ミテ*ハナ いいかな……じゃあ下がってもらっていい？

ミテ*ハナ そのまま座ろうか。大丈夫？
（端の児童に手招きしながら）もうちょっとこっちへ。
はい、じゃあ、いい？

児童たち わかった（数人が一緒に挙手）。

ミテ*ハナ じゃあ、ちょっと順番に行こうか。
はい、A君。

児童A えっと、何かこの真ん中にいる人が……

ミテ*ハナ この人？

児童A 祀られているみたい。

ミテ*ハナ 祀られている。それはどこからそう感じたの？

児童A なんか囲んである……やつ。

ミテ*ハナ こういふところ？ 囲ってあるって？

児童A うん。

ミテ*ハナ こうやって、いろいろこの人の周りに何かがあるから……祀られてって意味わかるかな？ 大丈夫？ こう、
なんか、この人のことを大事にこう、神様とか仏様
を祀るっていうんだけど、そういう存在なんじゃない
かなって思ったのね。ありがとう。そう、よく周りに
こう（絵の該当部をぐるっと示して）、囲いがあ
って、大事にされてるような感じがするのかな。
はい、ありがとう。

児童A （うなづく）

ミテ*ハナ はい、じゃあほかに。はい、B君。

児童B えっと、周りのやつが門にみえて。

ミテ*ハナ 門。これが今度は門にみえてきた。

児童B あと、門にあったり、赤い部分にあるものが星にみえて、
何か宇宙へと続く道みたいなの。それでその青い部分
が宇宙で、その人っぽいものが神様。

ミテ*ハナ どうもありがとう。これがまず、門に見えるのはどこから？

児童B なんか下の部分が段々となっていて、遠近法で徐々に徐
々に遠くなってる。

ミテ*ハナ どんどん奥に、（絵の該当部を指しながら）これが奥行
きがあるように感じるのね。だから門なんじゃないかっ
て思って。で、ここにあるのが星。で、どんどん奥に行く、
宇宙に続く道。っていうのは、宇宙に続くなあっていう
のは、どこからそう思ったの？

児童B えっと、なんかやつば星があったり、そこの紋章が星っ
ぱい……

ミテ*ハナ これ？ 紋章って？

児童B あの赤いやつが星の紋章っぽいやつだから、こっから
先は宇宙ですよ、みたいな。

ミテ*ハナ この門をくぐると宇宙に行けるような。宇宙との間にあ
るような門のような感じがする。はい、ありがとう。で、
やっぱりこの人は神様なんじゃないかなって、それはど
こからそう思ったの？

児童B あれ、その宇宙は見たことはやっぱりないけど、宇宙は本
とかで見ると暗い感じがするから、そこも暗いし。

ミテ*ハナ ああ、この背景がね、暗いところ。

児童B 宇宙にいるような人っていえば、まあ神様とかしかいな
いから、神様。

ミテ*ハナ じゃあ、この人は宇宙に居る人なんだ。この門の先は、
向う側に居る人。

児童B （うなづく）

ミテ*ハナ ありがとう。そんな、宇宙への入り口のところなんだね、
門っていうのはね。そんな風に感じてくれました。
ありがとう。
はい、ほかに。じゃあ、C君。

児童C えっと、なんかこれは、あそこの男の子みたいなの
がいるところがスタートで、そこからどんどん何か違う世
界に行くような。なんか、今着いたんじゃないって、今か
ら行くような。

ミテ*ハナ う〜ん、ここがスタート。で、どんどんどんどん先に行
く感じっていうのは、どこからそういう感じがしたの？

児童C えっと、あそこの段々になってるところとかが何重にも
なって、同じような場所が何個もあるように見えて。

ミテ*ハナ こういふところ？ うんうん、それがこう、重なっている
ような感じがするから、どんどんどんどん先に続く……
次へ次へ次へってつながっていくような感じがする。
ありがとう。
はい、じゃあ、D君。

児童D はい。えっと、こっちに星があるじゃないですか。これ
とこれは同じで、この赤いやつも同じで、ここにある
青いやつも同じだと思います。



ミテ＊ハナ あ、なるほど。ここに、みんなわかったかな、(絵の該当部を指示して)1個、2個、3個、4個、星がある。その星が同じもの? 同じものを描いてる感じがする。それはどこからそう思いましたか?

児童D え、なんか、星がなんか全部似てるなあみたいな。

ミテ＊ハナ 形がよく似ているから、同じものを4回ここに描いてるんじゃないかな。繰り返し繰り返し描かれているような感じがする。ありがとう。
ほかに。何かある?
○ちゃんとかどう? どんなこと感じたかな?

……サポーター「何でもいよいよ」と声かけ。絵をみながら、小さな声でささやき合う児童たち……

ミテ＊ハナ (話をしたそうな児童に)いよいよ。

児童F その赤いやつが太陽で、朝を表してる感じで。真ん中が、赤が一番手前っていうか、こっち側の何か大きい方が色が濃いから夜っていう感じ。その赤色と夜の真ん中に昼があって、ある感じで。何か、こっちから見るとその青い人が何かに乗って……、人みたいなやつが何かに乗ってやって来るみたいな。

ミテ＊ハナ うーん、なるほど。

児童F 感じにみえました。

ミテ＊ハナ ありがとう。今まで結構、この空間の話をしてたけど、時

間の話をしてくれたね。ここは赤くて太陽みたいだから昼、こっちは濃い暗い感じがするから夜なんじゃないかなっていう。この中の時間のことを今考えてくれたのと、あとこの人、何か乗り物に乗って来てる感じがするっていうのは、どこからそういう感じがしたの?

児童F こっちから見ると、なんか……何ていうか……何だろう……

ミテ＊ハナ ここのところ? 何か乗り物って。違う??

児童F ここの辺が丸くなって、何かの乗り物にみえました。

ミテ＊ハナ 船みたいな乗り物なのかなあ? 今、乗り物って聞いて、私、船っぽくみえてきちゃったんだけど。

児童F 船って言うか、何か新幹線とかそっち系。

ミテ＊ハナ あ、これ全体が(絵の該当部を指示しながら)乗り物みたいな感じなのかな? この色が変わっているところ。この、人みたいなのが、何かに乗ってやって来るの? うんうん。ここがさっきは、向こうに行くとか、向こうから来たとか、行ったり来たり話の中でもしてきてるけど、来る感じ、というのはどこからした?

児童F なんだろう、こっちをみて、なんか最初の門っていうか、門みたいなやつが朝でその次が昼でその次が夜だから、何かだんだん朝、昼、夜で変わっていく感じ。

ミテ＊ハナ うーん、なるほど。ありがとう、わかったわかった。

一番奥側が朝なんだ。さっきも重なっているという話をしていたけど、朝があって、昼があって、夜があつて重なってきている感じがするから、向こうから時間の流れとともにやって来る、そんな感じがするんだね。ありがとう。
ほかにはどうですか?

児童G なんか

ミテ＊ハナ どうぞ。

児童G その左側の門みたいなやつが、中にワカメみたいなのが……

ミテ＊ハナ ああ、模様があるね。

児童G それを海を表してて、こっちが夜空みたいな空を表してて、あの、天と地みたいな感じ。

ミテ＊ハナ なるほど〜、ありがとう。また新しい意見が出てきた。
この中の模様が海藻、海の中みたいなワカメみたいな模様で、こっちは空っていうのは、どこからそういう感じがしたの?

児童G なんか色が濃いし、なんか星みたいなのが。

ミテ＊ハナ 星、(絵の該当部を指示して)やっぱこのへんかな……があるから、黒いから、さっきも言ってくれたみたいに夜だったり、天のような感じがする。

天と地の方っていう、トンネルとか門とかみたいな話をしていたところが、何かを象徴して表しているような、そんな感じがするっていう話をしてくれました。ありがとう。

ミテ＊ハナ ほかにはどうですか?
2回目でもいいよ。

……小声でささやき合う児童たち……

ミテ＊ハナ いいよ、2回目でもいいし。さっき言ってきたことと違うことを感じてきたらその話でもいいし。ほかの人と同じでも、自分の言葉にしてみてもいいよ。

……ミテ＊ハナは児童たちの表情と様子を見渡す……

ミテ＊ハナ もうない? もう全部言った? 言い尽くした? いっぱい出てきたもんね。いろんなみえ方をしただろうし、みんなでみたら、1枚の、たった1枚の平面の絵だけれど、中に入っていったり、中から出てきたり、行ったり来たり、海だったり、天だったり、いろんなのがみえてきたと思います。十分みれた?

児童たち (うなづく)

ミテ＊ハナ 満足? 言った。はい。じゃあ、これから1人でみる時間にしようと思います。

(対話時間:13分25秒)

プロジェクトメンバー 一覧

ミテ*ハナさん



敬称略・50音順

ミテ・ハナソウ・プロジェクト連携実行委員会 (2017年度)

委員長
 穴戸 信 (佐倉市立美術館 館長)

副委員長
 泉 重二 (印旛地区教育研究会 図工・美術研究部 部長)

委員
 相蘇 重晴 (佐倉市教育委員会 指導課 課長)
 鈴木 千春 (佐倉市教育委員会 文化課 課長)

監事
 (ミテ*ハナさん)

事務局員
 永山 智子 (佐倉市立美術館 主査 学芸員)
 小川 恒 (佐倉市立美術館 主査補)

プロジェクト運営スタッフ (2017年度)

担当学芸員
 永山 智子 (佐倉市立美術館)

プランナー・講師
 三ツ木 紀英 (ARDA)

コーディネーター
 近藤 乃梨子 (ARDA)

事務局・学校コーディネーター
 (ミテ*ハナさん)
 (ミテ*ハナさん)
 (ミテ*ハナさん)

敬称略

企画

永山 智子（佐倉市立美術館）

三ツ木 紀英（特定非営利活動法人 芸術資源開発機構）

執筆

永山 智子（佐倉市立美術館）

三ツ木 紀英・近藤 乃梨子（特定非営利活動法人 芸術資源開発機構）

米津 いつか・和田 真文（一般社団法人ノマドプロダクション）

染谷 ヒロコ（atopicsite）

熊谷 薫・石幡 愛・高橋 かおり（国際芸術祭及び地域アートプロジェクトの事業評価検証会運営事務局）

アート・ディレクション+デザイン

中北 隆介

イラスト

三好 愛

撮影

加藤 健・落田 伸也・小田川 悠・大野 隆介

佐倉市立美術館

編集

染谷 ヒロコ（atopicsite）

佐倉市立美術館 ミテ・ハナソウ・プロジェクト

市民とNPOと美術館が紡ぐアートの物語

活動報告と評価 2013-2017

2018年3月31日発行

発行 ミテ・ハナソウ・プロジェクト連携実行委員会

事務局 佐倉市立美術館

〒285-0023 千葉県佐倉市新町210

☎043-485-7851

<http://mitehana.com>

<http://www.city.sakura.lg.jp/sakura/museum/>

印刷・製本 株式会社山田写真製版所



平成29年度 文化庁

地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

